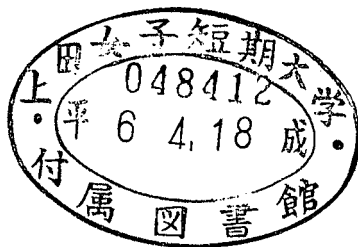
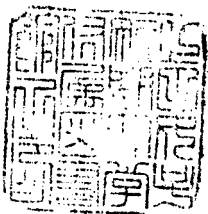


277.3
u32
A

上田女子短期大学の三十年



刊行にあたって

学校法人北野学園
理事長 北野 次登

本学は昭和四十八年に上田女子短期大学として発足し、「敬愛、勤勉、聡明」の三綱領を掲げて、平成五年で二十年が経過しました。

学校の歴史としては決して長いものとは申せませんが、これまで清新かつ堅実な学風の確立をめざし、また、地域社会に開かれた大学となるよう、ひたすら精進を重ねてまいりました。

この二十年間、幾多の苦難と危機を乗り越えて教育振興に微力ながらたずさわってこられましたのは、教育文化に関してすぐれた伝統に支えられた信州の風土のなかで、あたたかい愛情をもって見守ってきてくださった卒業生ならびに関係者のみなさまがたのご尽力、教職員諸氏のたゆみない努力のたまものと確信し、心から感謝の念に堪えません。

このたび上田女子短期大学の二十年史を刊行いたしますことは、学術の研修、さらに真理の探究と人格の形成を重視し、社会の進歩に対応し得る磨かれた知性と豊かな情操を備えた女性の育成をめざすという建学の精神に立ち返るとともに、現在、本学がおかれた社会環境を十分認識し、かつ輝ける将来に向かって、新しい第一歩となる布石になるものと信じてやみません。

ここに、ご協力いただきました関係各位のみなさまに厚く御礼申しあげます。
このささやかな校史が、未来の教育文化に取り組むべき私どもの道しるべとなる
ことを祈念しつつ、今後ともなおいつそうのご指導とご鞭撻をたまわりますよ
う、お願い申し上げます。

平成五年三月

刊行にさしして

上田女子短期大学

学 長 西尾 光一

塩田平の景勝の地に、小さいながらも心を寄せ合った女子短大として本学が発足してから、二十年経った。まさに日本が高度成長を達成した年月であり、本学は、国の歩みとともに次第に充実・発展しつつ今日に至った。

はじめは幼児教育科だけの単科であったが、内外の要望に応えて、昭和五十八年には国文科が設置された。わたくしは、昭和六十年四月学長として着任。短期大学の典型・模範といふべき本学の構成・運営に深く感銘している。すぐれた研究業績と優秀な指導力を持った教師と、練達した事務能力と懇切な配慮を忘れぬ事務職員とともに勤務して、よくこれだけのスタッフが結集されたものだと、ひそかな誇りを感じている。

大学の教員は、地方大学に在任していても、全国的に認められた学問的業績を

挙げていくことが必要である。とともに、それぞれの地域社会と結びつき貢献するところがなくてはならぬ。本学は短大ながら、中央の学界で活躍する教員の業績のめざましさが注目されているが、同時に、上田・小県・佐久などの地域コミュニティへの貢献が要請されている。それに応えるべく、昭和六十二年、幼児教育科は従来の保育コース、音楽コースを「幼児保育」「社会福祉」「教養文化」「音楽」の四コースに学科課程を整備し、国文科に「文学」「表現」「書道」の三コースを設け、入学当初からの教育研修の中心軸を確立した。さらには、司書課程をも併置、価値観の多様化した現代社会に有力に対応できるような個性と創造力を持った学生の育成につとめ、大学としての発展を期している。

平成五年三月

上田女子短期大学建学の理念

上田女子短期大学教育目標

本学は「敬愛、勤勉、聡明」の三綱領のもとに、学術の研修ならびに真理の探究と人格の形成を重視し、社会の進歩に対応し得る磨かれた知性と豊かな情操を備えた女性の育成を建学の理念といたします。

教育文化に関してすぐれた伝統に支えられた信州の風土の中で、清新にして堅実な学風の確立に努め、さらに理想的な大学教育の場を目指し、最善を尽くす所存であります。

一 大学教育の基本を旨とし、努力を惜しまぬ、誠実で品位のある学生を育成する。

二 価値観の多様化した現代社会に対応できる、個性や創造力を持つ学生を育成する。

三 平和の根幹たる、人を愛し自然を愛することに徹し、自学自習の意欲に燃える学生を育成する。

上田女子短期大学校 歌

吉川 静夫 作詞
吉田 正 作曲

一 明日あしたがとおい

思い出になる日も

世界のどこかに

生きていて

希望を星に

つないで学んだ

友を呼ぼう

塩田平の

みどりの中に

そびえ立つ

上田女子短大

わたしの母校

二 真理はひとつ

今日もまたここにも

恵みと光りに

花ひらく

誠実まことと愛を

ささげて飾ろう

わかい命に

千曲川ちくまきよい

流れの中に

うつる空

上田女子短大

わたしの母校

三 山鳩やま鳩郭公かくこう

いっしよに歌おう

自然のふるさと

尊さに

はるかに続く

山並みあおいで

朝の合唱チャイム

古城のあとの

歴史の中に

そだちゆく

上田女子短大

わたしの母校

目で見える二十年

◎ 現況編

「信州の学海」の伝統を受け継ぎ
地域の人びととともに歩んで二十年
心豊かな女性を育むために
さらなる教育の理想郷に向け
新しい一歩を踏み出した



本館正面



学長 西尾光一



理事長 北野次登





校旗



校章



学園全景



- ① ワープロはいまやオフィスの必須技能。ワープロ教室には四二台電備
- ② 個人ピアノ練習室は全部で二〇室。ピアノの保有台数は四〇台を数える。
- ③ 各分野の専任教員による少人数制の国文科ゼミナール
- ④ 電子ピアノシステム二〇台によるグループレッスン
- ⑤ 国文学の精髓を十分に学ぶ専攻授業
- ⑥ 附属幼稚園で実践の基礎を学ぶ



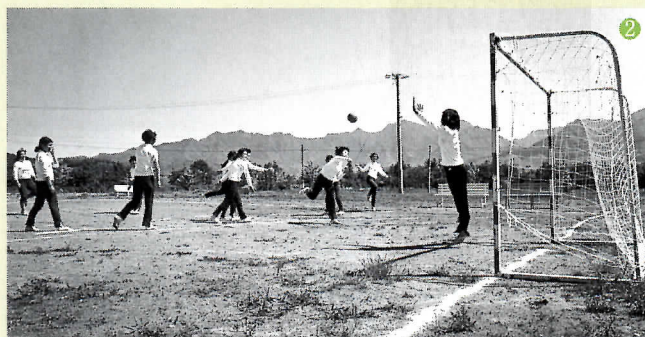


7 カリキュラムの企画をぬってお花の稽古
8 思いっ切り体を動かすバスケットボール部
9 学海祭に向けて大作に取り組む美術クラブ
10 対外試合で好成績を残すバレーボール部
11 日頃の成果を披露する「ニュー イヤー コンサート」



◎ 歴史編

伝統に支えられた信州の風土と
緑さわやかな「わかば」のマーク
のもと
四千五百余名の同窓生と教職員の
笑顔が宿る
その足跡を振り返り
今後の飛躍の礎としたい



- ① 1968 (昭和43年)
自然のなかに建つ唯一の本校校舎
- ② ③ 1968 (昭和43年) 頃
開学当時の体育・美術の授業
- ④ 1969 (昭和44年) 頃
全国の短期大学のなかで珍しいと注目を集めた
グループによる卒業研究
- ⑤ 1969 (昭和44年)
教舎を改造した開学当初の図書館
- ⑥ 1970 (昭和45年)
地域に役立つ大学を目指して開講された母親大
学

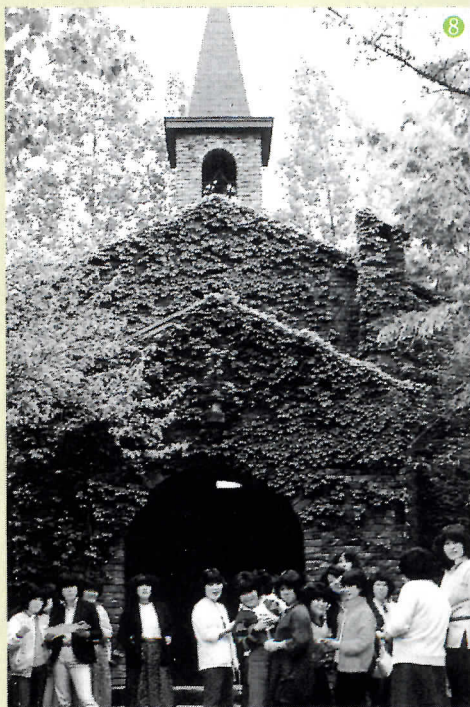




7



9

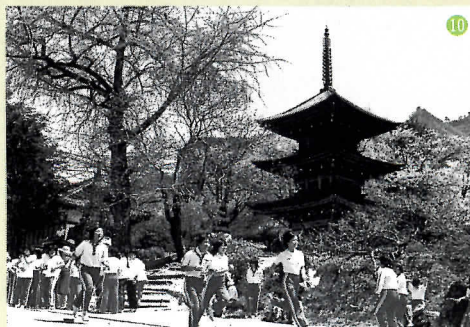


8

- 7 1973 (昭和48年)
上田女子短期大学発足の秋、第一回音楽の会を
上田市民会館で開催した
- 8 1973 (昭和48年)
新緑の一日、美術デーと称して幼児教育科全員
による課外授業が行われる。県内の美術館を訪
ね、作品の観賞とスケッチで創る楽しさを体験
する
- 9 1975 (昭和50年)
上田市民会館で毎年発表する「音楽と創作舞踊
の会」第一部・創作オペレッタから
- 10 1983 (昭和58年)
塩田平の豊かな自然環境のなかで行われるユニ
ークな体育授業のオリエンティングとクラス
マッチによるバレーボール大会



11



10



14



12



15



13

⑫ ⑬—1983 (昭和58年)
 菅平高原で自然を生かした幼児教育科一年生の
 菅草ゼミ。室内では保育技術学習も
 ⑭—1974 (昭和49年)
 上田市東山の舟窪古墳発掘発掘調査。地域文化
 の向上に寄与したと高い評価を得た
 ⑮—1973 (昭和48年)
 「歌のおはさん」こと松田トシさんが副学長兼
 声楽担当特別講師として就任
 ⑯—1978 (昭和53年)
 この年に創設されたバレーボール部は、春の北
 信越大学選手権大会に初出場、初優勝
 ⑰—1978 (昭和53年)
 児童文化研究所が本格的な研究活動に入る



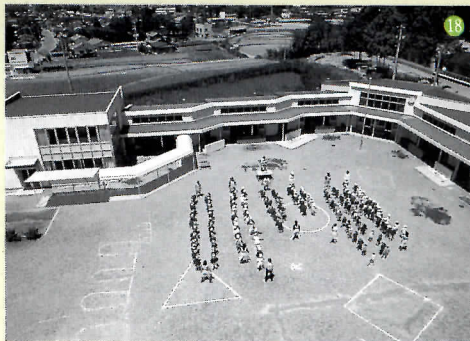
17



16



19



18



21
記念講演
講師 水上 勉先生

16 1978 (昭和53年)
附属幼稚園完成

17 1978 (昭和53年)
4月に開園した附属幼稚園では、待ちわびた教育実習がはじまった

20 1983 (昭和58年)

昭和58年11月13日の創立10周年記念式典に作家の水上勉氏が長年の知己・北野理事長の求めに応じて特別講演で花を添えた。

21 1983 (昭和58年)

創立10周年記念式典で挨拶する北野理事長



21



23 1984 (昭和59年)
 前年開設された国文科では59年、国語国文学会
 設立総会を開催し、福沢武二教授の記念講演が
 行われた。

24 1984 (昭和59年)
 昭和59年11月3日、同窓会組織「わかばの会」
 第一回総会が行われた。

25 1984 (昭和59年)
 国文科開設と同時にカリキュラムに組まれた文
 学散歩。文学遺跡に恵まれた信州は絶好の教材
 の場。北野美術館もその一つ。





27



26



28

26 1985 (昭和60年)
藤村記念館をはじめ近代文学の遺跡に触れながら学習する国文科の本曾ゼミは、59年から実施された(寝覚めの床国民賞會前)

27 1986 (昭和61年)
昭和60年11月からはじめられた京都・奈良の文学史跡をめぐる文学研修旅行

28 1986 (昭和61年)
国語国文学会あけての学海発展示会、教員が所蔵する貴重な文学資料も公開

29 1985 (昭和60年)
北信越大学選手権大会で連勝をつづけるパレール部は、11月の全日本パレール女子選手権大会に出場し、みごと3位入賞を果たした



29



31



30

- 30—1987 (昭和62年)
幼児教育科の卒業研究発表会 テーマは年を追って広がりをもせる
- 31—1988 (昭和63年)
国文科でも開設初年度から個人研究による卒業研究がとり入れられている卒業研究発表会
- 32—1984 (昭和59年)
北野理事長を団長とする日中友好放送・教育関係者訪中視察団の一行は、北京市内の幼雅園を視察。32は万里の長城を背景に北野理事長(右)と視察団の1員荒井金雄理事
- 33—1986 (昭和61年)
留学生受入れ1年目の中国特別研究生と共に、北野理事長の左・田さん、右・孫さん
- 35—1987 (昭和62年)
中国特別研究生は夏休みの一日、地元の人びとを対象とした中国語講習会で講師として教壇に立ち、日中友好の役割を果たす



32



33



34



35



37



36



38

36—1986 (昭和61年)
 琴研究会は昭和60年、アメリカ西海岸に演奏旅行するなど活動も活発
 37—1986 (昭和61年)
 ひときわ層も厚い茶道部
 38—1982 (昭和57年)
 短大生のなかでも根づよい人気の空手道部
 39—1988 (昭和63年)
 学海祭実行委員による祭り太鼓で例年になく盛り上がった第15回学海祭



39



43



40

- ④ 1988 (昭和63年) 学海祭でも福祉の原点を考える講演会「人間とは何か」が開かれた
- ⑤ 1985 (昭和60年) 学生に人気が高いテニス部
- ⑥ 1980 (昭和55年) レクリエーション研究会は日頃の着実な活動が評価されて、全国レクリエーション大会で優良団体に選ばれた
- ⑦ 1986 (昭和61年) 国文科開設とともに誕生した謡曲研究会
- ⑧ 1986 (昭和61年) コーラスを連れて友情も育っていく合唱部
- ⑨ 1981 (昭和56年) 地域の人びとにも親しまれたクリエイティブダンス
- ⑩ 1987 (昭和62年) 教職員のアテアが結集される体験入学



41



44



42



46



45

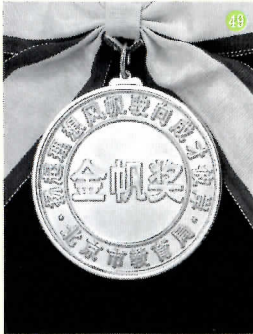


48



47

48 1992 (平成4年)
 本学の中国特別研究生受け入れが評価され、中国北京市教育局より北野理事長に日本人初の金帆奨(教育功労賞)受賞。写真は受賞後挨拶される北野理事長(中央)



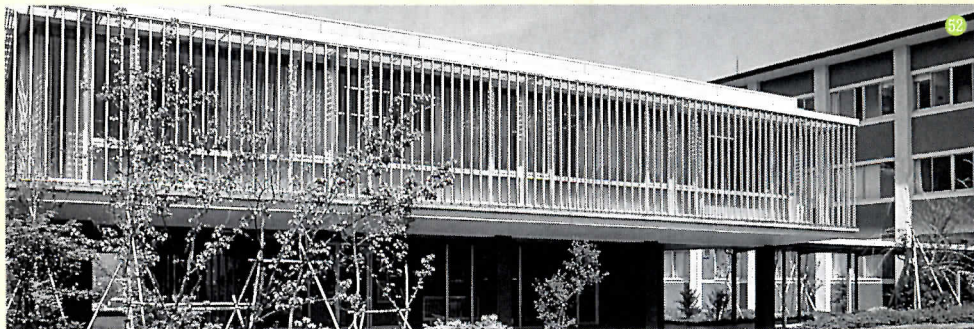
49

47 1991 (平成3年)
 4月29日。北野次登理事長、61年の黄綬褒章に続き、教育・放送功労者として藍綬褒章を受章。関谷勝嗣郵政大臣(左)から褒章伝達を受ける理事長ご夫妻
 50 1990 (平成2年)
 米・ハワイ州教育長マーガレット・オダ先生による本学初の英語による講演会。題して「アメリカにおける教育事情」
 51 1988 (昭和63年)
 四季折々の花が咲き開く前庭の花壇と体育館情報化時代に向けてリーダー格を發揮する上田女子短期大学附属図書館



51

「アメリカにおける教育事情」
 講師 Dr. Margaret y. Oda



52

53 1992 (平成4年)
西尾学長から入学許可を受ける新入生代表
54 1992 (平成4年)
入学式場に向かう新入生の夢はふくらむ



55 1993 (平成5年)
卒業生と歓談する北野理事長
56 1993 (平成5年)
上田女子短期大学に改称されて第千回の記念
すべき卒業証書授与式

上田女子短期大学の二十年

凡例

- 一、本書の内容は、上田女子短期大学発足時の昭和四十八年から平成五年までの二十年を中心に記述した。
- 一、年表は、本学の変遷を通覧するため、本学の前身、本州女子短期大学設置の昭和四十二年から平成五年までの重要事項を中心に、あわせて教育関連と社会の主な動向を記した。
- 一、本文中の人名は敬称を省略させていただき、肩書き・役職名は原則として当時のものを使用した。
- 一、記述は、固有名詞その他の例外を除き、原則として常用漢字および現代かなづかいを用いた。

プロローグ

「わかば」に刻む忍耐と努力

信州の雄大な自然と澄みきった空気。塩田平はいつも、ひとときのやすらぎとやさしさをたたえている。ここは、かつて鎌倉時代、北条氏が信濃守護所を置き、学問・文化の一大中心地として栄え、鎌倉文化が花開いた地である。それゆえこの地は「信州の学海なり」と称されていた。その塩田平に上田女子短期大学が誕生して、二十年の歳月が流れた。

上田女子短期大学のシンボルマークは「わかば」である。この二十年間、上田女子短期大学は、わかばが陽光を浴びて伸びやかに育つように発展をつづけた。この大学を支えてきたのは、塩田平と上田女子短期大学をこよなく愛する職員たち、教授たち、学生たち、地域の人びと、そして理事長・北野次登である。多くの人びとに見守られて、教育県長野にふさわしい短期大学にまで成長したのだ。

この輝かしい二十年の歴史のなかには、人びとのたゆまぬ努力と忍耐がある。ときに迷いや葛藤もあつた。しかし、上田女子短期大学の二十年を振り返るとき、そこにはいつも人びとの笑顔が光り輝いている。

北野次登、請われて理事長に就任

日本が高度成長をつづけ、社会情勢が急速なテンポで進展するなかで、塩田町（当時は小県郡）議会は、とくに恵まれた産業もないところから、産業振興と人口過疎化の対応策として大学を誘致することを決めた。その結果、昭和四十一年に本州大学が創立され、翌年本州女子短期大学が設置された。

しかし、大学は設置されたが、施設と環境の不備から入学者が定員に達しないため財政は振るわず、学園運営は発足早々難航をきわめた。上田市ならびに長野県は、地元高等教育機関を何としても救済したい考えから、時の西沢権一郎長野県知事が理事長を引き受ける結果となったが事態は好転しなかつた。折しもこの頃、東大安田講堂事件に象徴される全国的な学園紛争が広がるなかで学内は紛糾した。

大学の再建に心を痛めていた西沢知事のところに、かつて長野県議会議長を務めたこともある羽

田義知長野県議會議員（現長野放送監査役）と小山一平上田市長（前参議院副議長）が訪れ、実業界で活躍するかたわら、なお教育の分野に強い関心を抱いている北野次登を推薦した。

羽田県議會議員と小山市長は、北野次登が、「現代社会が物の価値にのみ走り、心を忘れていることを痛感し、それを救うものは教育の振興がまず第一である」と、かねがね主張していたこと、また、かつて学校経営の再建を依頼され、成功した実績をもっていることを知っていたからだ。西沢知事が北野次登に白羽の矢を立てたのはごく自然な成り行きだったのかもしれない。

北野次登は西沢知事から理事長就任の要請を受けたが、経営不振と学園紛争で常識では引き受けられるような状態ではないと、一度は断った。しかし、理事会が「短大を分離委譲して大学の再建をはかる」との案をまとめて再び要請してきたことと、八十二銀行の小出隆頭取からも「全面的に協力するから西沢知事の要請に応える方向で検討してほしい」旨の要望があつて、独自の調査を行い慎重に検討を重ねた結果、「学生や教授会、父兄後援会が一致しての希望であれば要請に応えてもよい」と承諾した。

一方、大学誘致に積極的に取り組み、これまで地元をまとめてきた宮沢三子男上田市議員（元上田女子短期大学父兄後援会会長）は、教育の場を一建設会社の社長の手に委ねるのには一抹の不安がある、とする学生代表三人をともない、東京・銀座の北野建設東京本社に赴いた。学生たちは、

当時、すでに京浜女子学院（現白鵬女子学院）を再建した実績のある北野次登の人格・識見に共鳴し、前途に希望を抱いて上田へ帰ってきた。

学生たちの熱意に応えるべく北野次登は、個人名義で所有する貴重な山林の一部、四十七万六千三十五平方メートルを売却し、大学がもつ負債のうち、短大部門にかかわる借入金返済にあてることを決意し、解決をはかった。

一方の本州大学は現在、長野大学として立派な大学に成長している。

北野理事長は機会あるごとに、「二十年間、教育という問題を私なりに考えてきて、社会や時代の進歩を見つめ、未来を担い時代をリードしていくことのできる若い人たちを育成することこそ、本当の教育ではないかと思うようになった。進学率や就職率がいいなどといった当面の結果にとらわれるのではなく、総合的な人間教育こそ、最も必要かつ基本的なことだと思う」と、教育への思いを関係者に示唆している。

学校名を『上田女子短期大学』と名称変更の決定がなされたのが昭和四十七年十二月。直ちに文部省に申請し、四十八年三月二十八日に設置が認可された。ここに、北野次登を理事長とする『学校法人上田女子短期大学』が誕生したのである。

新生学園伸展の足跡

上田女子短期大学発足とともに、それまで伸び悩んでいた学生の応募者数が増加し、定員変更の必要をせまられた。五十一年には五十人増の定員変更が認可され百五十人になって、幼児教育科としては長野県下でいちばん規模の大きい短期大学となった。学生数の増大はますます学園の名声を高めていった。応募学生の出身地も、これまでの地元上田市とその周辺を中心としていたものが、県下一円から遠く県外にまでおよび、全国的な広がりを見せるようになっていった。一方、入学願書受付にあたって、学業成績優秀もしくはは体育活動のとくに優れた学生に与えられる特待生制度の導入もはかられた。

新生学園の施設充実の第一弾は、四十九年の体育館建設にはじまる。雨の日でも、学生たちが安心して体育実技の授業が受けられるようにという配慮から、真っ先に取り上げられたのだった。

体育館の建設と同時に附属幼稚園の設立も計画されたのだが、三年後の五十二年九月まで建設は待たなければならなかった。一貫した幼児教育者の養成を目指すためにも、教育実習の場である附属幼稚園設立は一日も早く望まれていたのだが、設立計画を地元幼稚園の園長会にはかったところ、「近くに開設されてまもない幼稚園がある。まだ経営が安定していないので、設立は三年待つてほしい」という要請が出されていたからである。地元幼稚園と協調していくためにも、これは守

らなくてはならない。

その約束の三年後の九月、設立手続きを終えると直ちに建設がはじまった。園舎は五十二年十二月に完成、翌五十三年四月一日に開園した。

この間、学生の増加にもなうロッカールームの新設、玄関と正面ロータリーの整備、学生専用玄関の増改築など、北野理事長の急ピッチな学園づくりが行われていった。環境整備がとこのように学園内に活気がみなぎり、学生の表情も、より生き生きとしていった。

五十四年七月、本格的な学園の整備拡充工事が行われた。前期の授業が終わり夏休みに入ると同時に、全校舎の暖房工事と内装の大改修工事が行われた。

九月初め、附属幼稚園に次ぐ課題だった附属図書館の建築が発表された。図書委員会が準備委員会を開いて原案をつくりあげるとすぐに工事は着工された。北野理事長の断行は素早く、着工からわずか三ヵ月、上田女子短期大学附属図書館は十二月に完成、五十五年一月二十四日開館された。

この独立棟の附属図書館は、その後、国文科の認可申請にあたって、大きな役割を果たした。

念願の国文科増設成る

施設の整備・拡充、体育館、幼稚園、図書館など一連の学園づくりが行われるなかで、学科の増

設構想が具体的に練られていった。地域の高校からの要望も取り入れ、国文科と英文科の増設に向けて作業を開始した。ところが、国からの私学助成金の抑制措置によって、学科増設に厳しい措置がとられることが予測されたため、結局、国文科だけを申請することにした。十一人の専任の教授陣を得て、文部省からも「十分必要を充たすもの」と評価された。これによって、幼児教育科を含め二十六人の教授陣を形成することができた。

昭和五十八年一月十七日、念願の国文科新設の認可を得た。定員は八十人である。長い間の幼児教育科単科時代に加え、国文科が増設されたことによって、学内はより充実していった。

国文科新設の認可を得た記念すべきこの年の三月、上田女子短期大学は創立十周年を迎え、同年十一月十三日午前十時から来賓、学生、教職員全員のもとに記念式典を行った。この記念式典では、北野理事長と昵懇の間柄である作家の水上勉氏によって記念講演が行われ、学生たちに深い感銘を与えた。次はその講演の一部の要約である。

「カイコが自分の肌からきれいな糸を吐き、それが織物となって高価な着物になるように、小説家も自分の体から言葉を吐かないと、よい作品は生まれません。他人から借りた言葉では人にあきられてしまいます。私が体から言葉が吐けるようになったのは、生活が貧しくても、純真無垢な感性を持ちつづけることができたからだと思います。こんにちに、自分の言葉として表現し、読者に受

け入れられたのは、少年のころの無垢な感性を磨きつづけ、言葉が体から吐きだされたものだったからだと思えます。このことは、小説にかぎらず、人間としての生きる楽しみでもあります。知識として人の話を聞こうとするより、無垢に聞きわけようとする感性を私は尊敬します」

六十年四月、開学以来学園の発展に務めてきた鈴木鳴海学長の退任にともない、西尾光一が学長に就任した。

この年の十二月、大学は、将来の計画についてさまざまな角度から検討する機関として、長期教育学将来計画研究委員会を発足させ、新しい大学の進むべき方策に取り組み、精力的に討議を重ねた。幼児教育科・国文科の教員をはじめ事務職員が一体となって情報収集およびその分析を行った。

六十一年四月、委員会は教授会に「コース制」導入を提案した。四月から六月にかけて教授会と委員会、並行して幼児教育科と国文科の両科会で討議がつづけられ、六月の教授会でコース制の導入が決定し、六十二年四月から実施された。

コース制は、学生が自分の興味や関心のあるものを中心として大幅に選択をしながら学習し、コースの独自性を生かし、一人ひとりの個性が伸ばせるように指導していかうとするもので、幼児教育科では幼児保育コース、社会福祉コース、教養文化コースと、四十七年に開設された音楽コース

の四コース、国文科は文学コース、表現コース、書道コースの三コースが取り入れられた。

コース制導入と同時に地域の要望に応えて、図書館司書課程、図書館司書教諭課程が新設された。附属図書館も技術革新に対応して図書館像が変わっていくなかで、県下のリーダー格として、新しい図書館づくりを目指し邁進している。

このように学園が整備・充実されてきたのを機会に、六十二年十二月、法人名が『学校法人北野学園』と改められ、新たな時代を迎えた。

目次

刊行にあたって……北野次登

刊行にさいして……西尾光一

建学の理念・教育目標

校歌

目で見ると二十年

プロローグ

第一章 「信州の学海」に花開く学園——47

第一節 個性を重視した教育理念——48

ユニークな選択コース制の導入

「コース制」導入への道のり

社会的変動に対応するためにも

コースの選択は希望どおり

コース制で研究テーマが多様化

現代的なカリキュラムがここに

時代の要望に応えて図書館司書課程開設

第二節 幼児教育の先駆者として進む道——59

新しい幼児教育に燃やす情熱

ユニークな卒業研究

幼児教育科四つのコース

特性を生かす音楽コース

「歌のおばさん」こと松田トシさんを副学長に

第三節 隣接地に理想の附属幼稚園——69

真の幼児教育振興を目指して

教育・保育実習とその指導

貴重な体験は教育実習から

第四節 教育成果挙げる二つの行事——77

菅平ゼミ

美術デー

体育デー

第五節 「音楽の会」と「クリエイティブダンス」——83

教育成果発表の場を地域で

上田の秋を彩るコンサート

創造性を伸ばす創作オペレッタ

新しい舞踊文化をつくるクリエイティブダンス

ニューイヤークンサート

第六節 上田女子短期大学の諸研究活動——92

研究業績発表の場『紀要』発行

『幼児教育研究』から『卒業研究集』へ

第二章 塩田平に甦る教育の理想郷——97

第一節 学園のシンボル独立図書館——98

いつきに進められた設備、蔵書の改善

突然の図書館建築指示下る

ハイテク装備でも県下のリーダー格

第二節 「学海」の伝統を受け継ぐ国文科——104

国文科開設に寄せる地域の熱意

特命を受けて開設準備進める

難問山積に全員一致協力

独立図書館が開設に一役

感無量の大臣認可書

第二節 塩田平の国語国文学会——
110

卒業研究と国語国文学会

優れた研究内容は広く公表へ

多彩な研究大会プログラム

上田ならではの『学海』発行

第四節 三つの文学研修の旅——
115

自然と歴史の宝庫、信州を教材に

木曾ゼミ

文学散歩

信州再発見の旅

学生たちがつくるガイドブック

文学研修は古都めぐり

コース選びにアイデア満載

第三章 明るい学園生活の源泉——127

第一節 スポーツ文化にも特色——128

バレーボール部、初出場で初優勝の快挙

カップを飾って活性化を図ろう

優勝の秘訣は入学前の体づくり

着実にあげる日頃の成果

クラブ棟建設成る

第二節 文化系クラブも活躍——136

地道な活動を続ける文化系クラブ

青春の絆はいつまでも

第三節 自治会活動と学海祭——143

学生自治会

学海祭に総力を結集して

子供の広場を実践の場に

広告とりも社会勉強

第四節 遠隔地の学生に寮・下宿を確保——150

学内に建つ紫苑寮

ある寮生の一日から

「短大生専用」の下宿

第四章 教育に終わりはない——155

第一節 地域に根ざす大学を目指して——156

地域への奉仕活動母親大学の実り

公開講座の産声は塩田母親大学

バスに揺られて主婦の一日入学

乳幼児学級から老人大学教養講座まで

学内開催の婦人大学へ

男性から「私にも聞かせてほしい」

国文科も参加して教養豊かな公開講座

より質の高い講座を求めて

県民カルチャーとしての「開放講座」開講

流暢な日本語で聞く中国語講座

ミセス・オダの英語による特別講座

小さな碑に寄せる大きな期待

高校生に夏期音楽講習会

一足お先に「わたしは短大生」

第二節 地域社会から国際社会へ——175

熱烈歓迎、中国人留学生

成果は日本語の研究論文

充実した留学生生活

日本語教育特別講義

第三節 就職活動——185

短大は花嫁修業の場ではない

三者一体の就職指導委員会

不況下も克服した就職開拓

ユニークな試みの父兄懇談会

いちだんと強化・充実した就職指導体制

第四節 大学の発展を支える同窓会——193

同窓会会報『わかば』の創刊

成果をあげた児童文化研究集会の共催

装い新たに「わかばの会」定期開催へ

エピソード

年表

名簿

資料

第一章 「信州の学海」に花開く学園

第一節―個性を重視した教育理念

ユニークな選択コース制の導入

いつも、時代の流れを見つめ、将来を見据えながら、社会の要求、そして学生の要望に応えていく。上田女子短期大学の歴史をひもとくとき、その行間から浮かび上がってくるのは、いつもこの理念である。

個性の時代、選択の時代といわれ、日本の短期大学全体が学生の要望に即した学科づくりを意識しはじめるようになったのは、つい最近のことだ。しかし、上田女子短期大学では、学生一人ひとりの立場に立って学ぶ意識を考えた履修方法が早くから実践されている。

「四年制でも専門学校でも得られない短期大学の良さ、とりわけ、上田女子短期大学で学ぶ意義をどこで学生に見い出させれば良いのか……」

上田女子短期大学の教職員たちは、この問題について、さまざまな角度から取り組んできた。こ

の、きわめて難解な問題の解決案の一つが「コース制」の導入であった。昭和六十一年のことである。

「コース制」。この履修制度は、従来の一学科に一つの履修方法という概念を超えた上田女子短期大学らしい、たいへんユニークな制度なのだ。

たとえば、国文科の学生だからといって、その全員が『源氏物語』を完全に理解することを望んでいるわけではない。国文学の知識をベースにして文章力を身につけたい、書道の世界をのぞいてみたい、とその希望はさまざまである。

幼児教育科の学生も、幼稚園の先生になりたい、保育所の保育になりたい、福祉関係の仕事がしたい、保育を中心とした教養を身につけたい、あるいはピアノの先生になりたい、と目的は一人ひとり違う。

上田女子短期大学では、コース制を導入することにより、このように学生たちの希望する分野が集中的に学べるようにしたのである。

現在、幼児教育科には幼児保育コース、社会福祉コース、教養文化コース、そして音楽コースの四つのコース、国文科には、文学コース、表現コース、書道コースの三つのコースがある。

「コース制」導入への道のり

昭和六十年の夏ごろから、幼児教育学科、国文科の両学科とも、「学生に、より意欲的な研究、学習をさせるためには、コース制を導入したほうがいいのではないか」という議論が教授陣の間から、盛んに出るようになっていった。

幼児教育学科竹内要教授、国文科中山渡教授はじめ、現場に立つ教員が委員となって、大学の将来計画についてさまざまな角度から検討するという主旨で、六十年十二月に、長期教学将来計画研究委員会（委員長・小松忠志教授ほか九人の委員で構成）が発足した。同委員会は、精力的に会合を開いて討議した結果、幼児教育学科にある保育コースと音楽コースのうち音楽コースはそのまま開設し、保育コースを幼児保育コース、社会福祉コース、教養文化コースの三つに細分化して開設し、国文科は文学コース、表現コース、書道コースの三コースを開設するという原案をまとめた。

六十一年四月、委員会は同案を教授会に提案。四、五、六月の三ヵ月にわたって、教授会および委員会、さらに各科会で慎重な審議を行った結果、六月の教授会でコース制の全面導入を正式決定した。

具体的にどういうカリキュラムでコースを実施するか各科会で検討し、委員会で話し合いをかさね、最終決定したのが十二月である。実施されたのは六十二年四月である。

学生の立場からすべてを考えていく上田女子短期大学の新しい特色がひとつふえたことになる。

社会的変動に対応するためにも

昭和四十二年。当時はベビーブームの子供たちが幼稚園に入園するのにも試験があつて、ときには落とされてしまうという時代であつた。当然、幼稚園教諭もひっぱりだこ、という時代である。実際、保育所や児童福祉施設の保育の資格と幼稚園教諭の免許がとれる保育コースだけで、時代の要求を満たすことができたのである。

ところが、五十年代に入つて出生率が低下し、子供の数が少なくなつていくにしたがい、保育や幼稚園教諭の養成は、「量より質の時代だ」という声が聞こえてくるようになる。子供が少なくなつたから、いまいる保母さんたちだけで十分間に合う。新規にたくさん養成する必要はなくなつたのだ。時代は、量より質の高い保母さんを要求しはじめたのである。

五十一年に幼児教育科の一学年の定員が百人から百五十人という長野県下一の規模になつた上田女子短期大学では、まさにそうした社会的な変動にいち早く対応して、たんに資格が取ればよいという短大から、幼児教育のエキスパートを育てる短大へと、コース制を導入することにより、積極的に脱皮をはかつたのである。

幼児教育科の竹内要学科長は、

「ここは、学びの場であり、自己の個性を伸ばし、豊かな人間同士の出会いの場としても適切な環境がある。幼児教育者として、福祉従事者として熱い心を燃やして進む道も、児童文化各般の専門家として独特な道を歩むことも、自主的な選択に任されている。そして、近い将来の望ましい母親となるための着実な目標も好ましいことである。さまざまな目標に対し、それぞれにきめ細かく応えることのできるコースが準備されている」と語る。

熱心な先生方によって実現した、幼児教育科の新しい出発である。

一方、国文科では、新任の国文科教授が地元高校の要望をいち早く取り入れて、コース制に取り組んだ結果、新しいカリキュラムが生まれたといえる。

五十八年に国文科が開設された当初のカリキュラムは、きわめてオーソドックスなものだった。

国文科の学生全員が文学を研究することを目的とした、いわば四年制大学のミニチュア版のようなカリキュラムだった。「新しい短期大学の新しい国文科」を夢みて馳せ参じた新任の国文科教授陣は、このカリキュラムをみて戸惑った。

挨拶まわりをかねて地元の高校へ行くと、「短大の国文科はたくさんある。四年制大学の二分の一のカリキュラムになっているだけではないか。せっかく地元でできた短大だから、もっと地元の

生徒の希望がかなえられるような短大であってほしい」という要望が寄せられた。「生徒の希望がかなえられる短大」とは、いったいどんな短大なのか。教授陣は地元高校へこまめに足を運んだ。

短期大学を目指す学生たちは、四年制大学の学生に比べ、自分が何を勉強したいかというビジョンをより強く明快にもっているといわれる。たとえば、国文学を勉強したいけれど、同時に書道に比重をかけて勉強したい。また、近代文学を中心に表現力を学び、自分で小説を書いてみたいなど、その目的が具体的なのである。

「書道だけ専門に勉強できる短大はなかなかない。でも、遠くに行くわけにもいかないという学生が私の学校にいるんですが、上田ではもつと書道に力を入れてもらえないでしょうか」、「短大を卒業しても、就職試験のときに文章を書く自信がない。文章の書き方も教えてもらえるようなカリキュラムを組んでもらえるとありがたいのですが」。こんな声が、地元の高校の先生や生徒から聞かれたのだ。

入学してきた学生からも、まんべんなく勉強するよりも、目的をもって集中的に勉強したい、という意見が強かった。

「短大という性格上、研究は中心になるけれど、研究だけでいいわけではない。むしろ求められるのは、教養を身につけることです。国文科でいえば、古代から近世に至る古典を読む力を身につけた

い。近代文学では、享受するだけでなく表現力を養って詩や小説も書いてみたい。国語学や国文学を全般的にわたって勉強するカリキュラムでは、高校から入った学生としては堅苦しく、自分たちの必要とするものとは離れてしまう。ベースは日本語・日本文学だが、研究を行うだけでなく、表現力をぐっとつけてもらう、書道をさらに教えてもらおう。こういう高校生の希望を生かすカリキュラムのほうがよいのではないか、という気がしてきました」と、国文科の中山渡学科長は語る。

コースの選択は希望どおり

コース制を導入した結果は、地元の学生をはじめ、父兄、高校の先生からもすこぶる評判がいい。学生自身に目標が定まって意欲的になり、自ら求めていこうという態度がみられるようになったことだ。質問もふえた。

なぜコース制は効果的だったのだろうか。大きな要因の一つに、コースを選択する際、すべての学生が希望どおりのコースに入れることがあげられる。コース選定に関する指導としては、入学式のあとの履修届提出時と後期の授業が始まる前に細かくカリキュラムの説明が行われる。コースの選定にあたって実技試験があるのは、入学試験時に行われる幼児教育科の音楽コースだけである。

一年目の前期は学科共通の科目を勉強して、自分の適性や希望を再確認し、後期に入ってからコ

コース制のカリキュラムに沿って勉強することになる。しかも学生にとつてうれしいのは、各コースとも人数に制限がないことだ。可能なかぎり自由意思に沿ってコースが選べる。かといって教員は学生の増減によつて変わるわけではない。

「コース制を希望して入学してきたのに、教える側の都合で人数枠を決めたら、コース制をつくつた意味がなくなる」と、教員たちは自分たちの負担が重くなることを覚悟のうえで、学生の希望がすべてかなうような方法を、いまでも実践している。

短大のイメージを専門学校に近づけるのではなく、従来のアカデミックな部分はそのままにして短大のイメージをふくらませる。自由でしなやかな大学像を目指して、上田女子短期大学の試みは始められた。かたちにはまった固定的なカリキュラムに固執するのではなく、学生にとってのよりよいカリキュラムづくりを目指して、努力がつけられているのである。

コース制で研究テーマが多様化

六十三年度になると、卒業研究を指導する教授たちがいちだんと忙しくなった。コース制が導入され、卒業研究が多様化してきたからである。学生が文学コース、表現コース、書道コースのなかから自由に選択できるため、人数にばらつきがでる。しかし、卒業研究を指導する教授の人数は、

学生数によって変わることはない。たとえば表現コースの場合、卒業研究に文学作品と文学評論を書く。二年生になった四月から指導教員につき、八ヵ月ほどかけて書き上げるのである。

「不自然なところがあつたり、技巧的にはまずいところがありますけど、たつた二年間でよくここまで成長し、こんな小説が書けたものだという作品もあります。まだまだ発表できるほど素晴らしい作品ではないにしても、まあ、ここまでできれば短大生としてはいいほうではないかと思えます」とある教授は、巢立ちゆく教え子たちの顔つきを思い浮かべながら語る。

「実際、素晴らしい卒業研究があります。今後、そういう卒業研究の数がふえていけば、国文科の層はますます厚くなります。学生の個性を尊重し、自ら積極的に研究する姿勢を重視するといった設立の意義が達成されることになります。卒業研究だけは、とにかく、なんとか実らせたいですね。卒業研究を書くことは、学生にとって、何ものにもかえがたい貴重な経験になることでしょう。その経験は、どんなに年を経ようとも色あせることはないと思えますね」。この発言も、きまかい教育を実現しているからこそ、確信をもって語れるのである。

現代的なカリキュラムがここに

カリキュラムは絶えず見直されている。伝統ある塩田平に生まれた国文科は、創設から四年間、

新しい時代の要請に応え得るようなカリキュラムの見直しをおこなってきた。

六十一年、六十二年にかけてつくられた新カリキュラムは、コース制の導入にもなつて、さらに手直しされた。そしていま、上田女子短期大学国文科のカリキュラムは、現代的な、柔軟なカリキュラムとして一つのスタイルを確立した。

国文科の独自性を訴えるカリキュラムとは、文学コース、表現コース、書道コースというものの特色を生かした新しいカリキュラムである。たとえば表現コースでは、国文科にある表現コースなので、日本語と日本文学について幾つかの必修と選択科目は他のコースと共通して履修し、そのうえにさらに専門的に学習できるようになっている。

すなわち表現コースでは、小説・物語、あるいは詩歌などの表現法を深く追求できるカリキュラムなのである。さらにものの見方や考え方を広げるため、婦人問題論、職業論、人間関係論、女性職業論、生活言語論なども取り入れて表現力を伸ばしていく、というものである。

書道コースでは、当然、教科として隣接する漢文学および古文書学などが加わっている。

現代的なカリキュラムの一つに、六十二年度から取り入れられた「ワープロ実務」がある。当初は国文科を対象としたが、六十三年度からは幼児教育科・国文科共通の選択科目として開講した。

初年度は二十一台からスタートしたが、平成二年度には四十一台に達した。平成三年度は二百十四

定してしまっていたのである。しかし、保育所は厚生省、幼稚園は文部省と管轄官庁が異なるように、それぞれの役割は本質的に異なっている。保育所が託児所から出発しているように、あくまでも児童福祉が目的であつて、幼稚園の代わりとしては、やはり限界がある。

幼稚園の多い他の自治体では、幼児教育の研究に力が入れられ、幼児の創造力をいかに伸ばすか、情操をいかに育むかということが、あらゆる角度から進められていた。それにたいして、長野県の教育姿勢は、おもに小、中、高の初等・中等教育や実業教育に重点がおかれ、幼児教育においては、未開拓ともいえる状態がつづいていたのである。

このような状況のもとで、長野県の幼児教育のパイオニアとしての自覚に立つて歩み出した上田女子短期大学は、教育方針も新たにスタートした。それは、新しい女子教育の理想を追求し、心身ともに健やかな人格をもつて真に社会に貢献できる人間の育成を目指す。幼児教育振興の気運にのっとり、新しい幼児教育の先駆者として、不動の信念と科学的裏付けをもつて教育者の養成を志向する。人間の基本的パーソナリティー形成における幼児教育の重大さを自覚し、その使命遂行は女性に課せられた聖なる任務と受けとり、これに邁進する謙虚にして真正な学生を養成する、というものである。

その基礎づくりを進めるうえで、一つの構想を打ち出していく。それは、「自分たちの短大を県

下の幼児教育のメッカにする」という、いわば大学としての決意表明ともいえるものだった。たんに資格を取得するための教育機関に終わるのではなく、教育県長野の名に恥じない独自の研究を進めていく。幼児教育のおくれをとりもどすのではなく、新しい幼児教育の流れをつくっていく。既成の教育体系にとらわれず、全学が一体となつて、さまざまな計画にチャレンジしていく。

信州の学海。いまでも残る数多くの寺社が、信州の教育と文化の中心地だった当時をしのばせる。そうした風土を受け継いで、幼児教育へ情熱を燃やそうではないか……。それはパイオニアだからこそできるのではないか……。

上田女子短期大学は誕生以来、さまざまな試みに挑んできた。それはすべて、幼児教育のメッカを目指すための学生と教職員が一体となつた努力の過程にはかならない。

鈴木鳴海学長が、「めぐまれた自然環境のなかで、未来を背負う若人、子供たちを人間性豊かに育てていきたい」と考え、幼児教育の火を新たに点火したからこそ、いまの上田女子短期大学の姿があるのだ。

上田女子短期大学の幼児教育は、いまやすっかり地域に根づき、その実績は各方面から高く評価されている。幼児教育への関心がますます高まっていくなかで、次の時代に向けてどのような幼児教育の在り方を提言できるか、パイオニアとしての真価が問われるのはこれからである。

ユニークな卒業研究

幼児教育のバイオニアを目指す上田女子短期大学では、創意と工天によってユニークな教育を試みている。なかでも卒業研究は、全国の短大のなかでは数少なく珍しいとして注目されている。

第一回卒業生（昭和四十二年度）のときは全員が義務づけられていたわけではなかったが、第二回卒業生から必修になり、義務づけられるようになった。

卒業研究は学生が専門領域について、より深く探究すると同時に、自発的な研究態度や研究方法を学習するために設けられたものである。各科目ごとの講義やクラス別実技などの学習と合わせて、学生自身の研究意欲を基礎としたゼミナール形式の授業が、二年間の教育課程のなかで緻密に行われているものだけに、注目されているのである。

卒業研究は必修科目で二単位。研究のための演習時間は毎週一時間設けられている。学生はその時間を利用して自分のテーマについて研究を深めていく。

テーマは保育領域に関するものが圧倒的に多いが、その具体的テーマは実に多種多彩である。保育領域に関するテーマは、言語、社会、自然、絵画制作、音楽リズム、健康など。そのほか幼児の絵本、童話、童謡、民話、音楽、オペレッタ、舞踊、劇あそび、テレビなどの文化関係。幼児の心理発達、運動能力発達、知能検査、性格検査などの発達・検査関係。

さらに、家庭環境、親子関係、親の教育意識、育児観、しつけなど家庭教育にかかわるものや僻地教育、地域の遊び場などの地域環境を取り上げたテーマ。乳幼児の栄養・保健に関するテーマ。幼児教育史、教育思想、宗教教育といった教育学分野、保母の労働条件、保育施設の構造など経営管理に着眼したものとテーマの分野は幅広く、時代の進展とともに幼児教育を取り巻く問題が多様化してきたことを物語っている。

そのほか最近の傾向では、心身障害児教育や社会福祉関係についての関心の高まりも強い。また、少年非行、同和教育、食品公害などの社会問題に取り組んだものも多くみられる。さらに、人間の脳の研究、手先の不器用、甘えのパーツナリティー、核家族のあり方、父なき社会、といった異色のテーマをねらったものである。

幼児教育の枠組みを固定化させずに、柔軟に思考し、自由に発想してテーマを開拓していく学生たちの学習領域は、これからもさらに多様化する方向にある。

この卒業研究は、学生たちの研究活動と教員側の活発な研究的気運を盛り上げていき、のちに「幼児教育研究会」が生まれることになる。

幼児教育科四つのコース

六十二年四月から導入されたコース制によつて、幼児教育科には現在、幼児保育コース、社会福祉コース、教養文化コース、音楽コースの四つのコースがある。

従来、幼稚園教諭と保育所保育を養成する保育コースと、音楽指導者を養成する音楽コースの二つのコースだったが、このうち保育コースに関する分野を幼児保育コースと社会福祉コースに細分化し、あらたに教養文化コースを新設したのである。

社会福祉コースは、社会の進展とともに保育にたいする形態が多様化してきたなかで生まれた。従来型の保育から長時間保育、夜間保育、障害児保育へと保育への期待が様変わりし、なかでも福祉にのぞむ態度や専門性が大きく変わってきた。このような状況のもとに、ただたんに保育の資格を得るだけでなく、さらに焦点を絞ったエキスパートを養成する目的でできたものである。したがつて、児童福祉施設や社会福祉施設の保育を目指すものにふさわしいコースなのである。ここでは児童福祉、養護原理などの科目をとおして、福祉にたいする正しい理解を深めるほかに、小児保健や臨床心理学も学習していく。

一方、幼児教育科のなかにあつて目新しいのが教養文化コースだ。教養文化の名のとおり、ここでは職業人の養成にとらわれず、児童文化を核とした社会性豊かな観点を育てることに主眼をお

く。これまで以上に広い視野から幼児教育や家庭生活、社会生活を考えることのできる、創造性豊かな知識と技術を学習しようとするものだ。このために、学習の内容や方法は多彩をきわめている。女性としての教養文化のほかに、児童文化にかかわる絵画、音楽、体育と、専門的な分野にも進めるように自由に設定されている。学生の個性をよりよく伸ばすためにも選択科目の幅が広いのが特色である。

特性を生かす音楽コース

音楽コースは他のコースとは少し事情が異なっている。歴史も古く、志望する学生は入学試験時に選考・決定される。

昭和四十七年四月、「音楽」を上田女子短期大学の特色として打ち出し、幼児教育科の特性を生かしながら、すぐれた音楽指導者を養成する目的で開設された。したがって、開設にあたっての苦労も特筆されるものがある。

開設に先立つ四十六年六月、まず、音楽関係の大学の視察からじまった。音楽担当の藤沢紫朗助教授と事務局の遠藤憲三事務長の二人は、短大のなかで音楽教育がもつとも進んでいるといわれる千葉の聖徳学園短期大学、静岡の常葉女子短期大学、三重の松阪女子短期大学の三校を視察し

た。このうち松阪女子短期大学で、音楽が専門の藤沢助教授が、大規模な音楽棟に数えきれないほどのピアノと器楽室に山のようにあるオーケストラの楽器を前にして、「驚くほど立派な設備にびつくりした」という。

九月に視察を終え、講師の選定にとりかかった。「東京の桐朋学園に加納悟郎（ピアノ）、古沢浩子（声乐）という素晴らしい先生がいるという。なんとかこのお二人を桐朋学園から派遣してもらえないものか……」と切実な願いを胸に、講師派遣の依頼をすることになった。交渉に鈴木鳴海学長と藤沢助教授が出向いた。秋も深まった十一月だった。新設校に講師を派遣してもらえるかどうか一抹の不安を抱きながらも、大学の実情と将来の構想を懸命に説明した。先生がいなければコースは開講できない。二人の熱意は通じ、快諾を得て両講師を迎えることができた。

第一回生は四人が入学した。派遣された両講師と音楽担当のスタッフが一体となって音楽コースをスタートさせた。五十二年度から教育内容の充実と資質を明確にするため、コース内を器楽専攻と声乐専攻に分けた。

音楽コースでは、幼児教育をベースに、音楽にたいする深い理解と高度な技術を身につけることを目標としており、音楽技術を追求し音楽専門家を養成するという、世にいう音楽科とは少し異なっている。音楽が好きになるか嫌いになるか、大切なものになるか苦痛なものになるかを決定する

大きな要素は、小さい子供の心理面、思考面での能力を全部踏まえ、音楽という素晴らしい世界に子供をいかに導くかということである。

音楽的にすぐれた能力、技術をもっている人でも、必ずしも三、四歳の子供に音楽の素晴らしさを教えることができるとは限らない。その点このコースの卒業生は、もともと幼児教育科の学生だから、子供の心理面や生活傾向などを理解し、子供の扱いにも慣れている。そのうえでピアノや音楽の素晴らしさを教えられる。つまり、四年制の専門の音楽科では決して学ぶことのできない教育内容をここでは学ぶことができるのである。しかも、少人数による余裕あるカリキュラムのなかで、器楽と声楽の分野で活躍している強力な教授陣による個人レッスン中心の授業が行われるのだ。卒業生の多くは、ピアノ教師、幼稚園教諭として幅広く活躍している。さらに卒業後も研究生として研鑽をつみ技術の向上をはかる学生も多い。

「歌のおばさん」こと松田トシさんを副学長に

音楽コースを世に強くアピールした出来事がある。四十八年のことである。

長野県出身で「歌のおばさん」として知られている松田トシさんを、副学長兼特別講師として迎えたことだ。松田女史と北野理事長はかねてから昵懇の間柄であった。北野理事長は、「上田に來

ていただけませんか』と依頼したところ、『私は同じ長野県の出身。あまり長くはできないけど、郷土のためにお手伝いしましょう』と返ってくれてねえ』と当時を振り返って語った。

松田女史が副学長で声楽を教えてくれるという噂は、長野県下はもとより全国に広まっていた。その効果は応募者数の増加となってあらわれた。北野理事長がかねがね語るように、「すべては人材の時代。教育とでも同じことです」が、みごとに証明されたわけである。

松田副学長の在任期間は三年間という短い期間であったが、この間、上田女子短期大学の名声は一挙に高まり、学生の出身地も長野県はもとより、新潟県をはじめ山形県、北海道、沖縄と、いまなお全国的な広がりを見せている。

第三節—隣接地に理想の附属幼稚園

真の幼児教育振興を目指して

昭和五十三年四月、上田女子短期大学附属幼稚園が開園した。

附属幼稚園設立に先立ち、関克彦教授を委員長とする附属幼稚園設置委員会が設けられ、設立準備から園舎の設計まであたった。設計にあたっては、重視されたことは、教育実習にあたる学生たちが、いつも幼児に接触できるような場となるための配慮だった。

五十二年七月、設立趣意書が長野県に提出された。そのなかで、附属幼稚園の教育方針を次のように掲げている。

- 一、一人ひとりを伸ばす
- 一、自然な保育プログラム
- 一、適正なクラス編成と定員

一、横と縦の人のかかわりを大切に

一、子供に最適の園舎づくり

一、広場と楽園の園庭づくり

一、すぐれた自然環境での教育

一、父母と共にのぞましい幼児教育を打ち立てる

十月に入り地鎮祭を終えると同時に、昼夜兼行の建設工事がはじまった。十二月に県の審議委員会で認可の可否が審議されることになっているのだが、それまでに建設が八〇パーセント以上進んでいなければ審議の対象にならない。間に合わなければ開園は一年遅れになってしまう。工事は急ピッチで進められた。

当時、大学の周囲に民家はほとんどなかったため、建設現場は夜半まで戦場のような騒ぎだった。まさに夜を日についての突貫工事だった。

十二月、鉄骨平屋建て一部二階建ての園舎は、目標を上回る九〇パーセントまで進んだ。工事と並行して園児の募集も開始された。事務局では塩田地区をはじめ千曲川以南の地区の幼児の名簿をつくり、教員と事務職員が一体となって一軒一軒歩き、園児募集に回った。

五十三年二月、附属幼稚園の設置が認可された。開園に向けて、教材、教具、遊戯具の購入も進められた。「大学の附属幼稚園としてふさわしいものでなければならぬ」という北野理事長の意向を受けて、とくに音楽関係の設備には気を配り、周辺の幼稚園にはオルガンくらいしかなかった当時、六室の全保育室にピアノやエレクトーンが配置された。

机、椅子をはじめ、すべり台、ブランコ、低鉄棒、登り棒、遊戯室用のトランポリンなども、すべて良質のものがそろえられた。各部屋は採光用の広い窓をつけ、音響効果を十分考えた遊戯室など、さまざまな工夫をこらした園舎だった。

開園に先立ち三月一日、入園予定の園児たちの一日入園が行われた。小雪が舞う悪天候のなか、母親に手を引かれた四十人余りの子供がやってきた。そのうちの一人が運動場をながめまわして、「あれ、キリンさんのすべり台がないよ」というのである。園児募集に使ったパンフレットの園舎完成予想図に描かれていたキリンの形をしたすべり台のことだった。

それを聞いた丸山正樹事務局長は、「これはいけない。子供の夢を破ってはならない」と、直ちに近くの建具商都築正明さんに相談した。だが、都築さんは材料や図柄からみて、とてもつくれる自信がないという。それを無理やり拝み倒して承知してもらった。

入園式前日になっても都築さんは作りこない。「とても明日までには無理だ」と事務室では、

ほとんどあきらめて開園の日を迎えた。ところが、子供たちが、朝、登園したときには、キリンのすべり台は立派に完成していた。都築さんは入園式の朝、暗いうちから奥さんと二人でとりつけ、間に合わせてくれたのだった。

五十三年四月一日、園長鈴木鳴海（学長兼務）、副園長土屋吉太郎ほかスタッフ四名で開園、同月七日、第一回入園式が行われた。新入園児は四十四人だった。

一学級名は、すみれ組（三歳児）、ばら組（四歳児）、まつ組（五歳児）と名づけられた。

初年度は少ない入園者でスタートしたが、二年目は百十六人と急増。そして三年目の五十五年度には、定員充足の目標を一年早く達成し、予定の六学級編成となった。

附属幼稚園では開園以来、教育内容について随時、短大の教授陣の協力と助言を得て質的充実がはかられており、また、家族の協力を得て父と母の文集『虹』を発行し、現在までに第十五号を数えている。

教育・保育実習とその指導

豊かな自然のなかで、子供たちの豊かな創造力を伸ばす。子供たちとの触れ合いのなかで、教育の在り方を見いだしていく。上田女子短期大学が目指す幼児教育の理想が、その附属幼稚園で実施

されるようになってから十五年になる。

上田女子短期大学幼児教育科では、卒業と同時に幼稚園教諭二種免許と保育所や児童福祉施設の
保母資格が取得できるので、そのための教育・保育実習を履修しなければならない。したがって、
実習は必修である。

実習は一年次に幼稚園、保育所、社会福祉施設での見学実習・観察実習を中心に、学内での特別
講義と関係教科の学習。二年次に幼稚園、保育所、社会福祉施設でそれぞれ決められた実習日数
を、受け入れ先の指導者に付いて行われる。

教育実習は附属幼稚園ができるまでは、上田市内の学校法人ふじ学園「大屋幼稚園」と県下の各
幼稚園や学生の出身地の幼稚園にもお願いし、たいへんな協力を得てきたが、現在では附属幼稚園
においても多くの学生が実習指導を受けられるようになった。

この大屋幼稚園とは開学以来、教育内容においても緊密な協力関係にある。同園では本学の教育
方針に沿った教育実習が行われているので、幼児教育上これ以上の効果はない。なお、大屋幼稚園
の園長は上田女子短期大学の講師も兼ねている。

ところでこの大屋幼稚園については、忘れることのできないことがある。附属幼稚園設立の折、
設立認可について一部上田市内の幼稚園から設立反対の動きがあった。この動きにたいしてふじ学

園安藤信義理事長は、新しい幼稚園の設置に賛同し、逆に附属幼稚園設置の促進をはたらきかけたほどだった。その後両園は姉妹園として地域教育の発展に協力し合い、その効果を上げている。

保育所での保育実習の受け入れ先は、県内各市町村に保育所が普及しているので、学生が出身地の保育所でそれぞれ内諾を得てのち、大学から正式に依頼して実習を行うようにしている。また、地元の塩田を中心とする上田市の保育所では、地元出身以外の学生の実習も受け入れてもらえるので、遠隔地の学生にとって、たいへんありがたい存在となっている。

さらに、社会福祉施設での保育実習は、長野県下の保母養成校が保母養成協議会を組織して社会福祉施設での実習計画をまとめ、施設側と調整をしながら実習を行っている。

これらの実習指導には、教員で組織する実習委員会があたるほか、全学教員の協力を得て行われている。実習委員会では五十年度に、上田女子短期大学の実習の実情に即したガイドブックを作成し、学生はこれにもとづいて指導を受けている。

貴重な体験は教育実習から

さて、念願の附属幼稚園における教育実習が五十五年度からはじまった。幼稚園側にとっても、いうまでもなく初めての経験である。二百人の学生が六学級に分かれて、保育の見学、研究会、さ

らに教育実習が行われ、成果を収めた。

当時の教諭が「実習生がどんどん入ってくるから、その受け入れがたいへんでした。でも、実習生と話し合っているうちに、だんだんとこちらも、ものが見えてくる感じがしたりもしました。何かあればみんなで真ん中の部屋へ集まって、よく話し合いをして、一緒にものごとにあたったものです」。実習するほうも受けるほうも、いわば手さぐりの状態からはじまったわけである。

この年の秋、幼稚園の行事として、「野焼き」、「焼きいもパーティー」が初めて行われた。野焼きは、大学の裏山でとれる良質の粘土で園児がいろいろなものをつくり、日陰干しにしておいたものを、裏山の畑に大きい穴を掘って焼くのだ。燃料も裏山で園児たちが何日もかかって集めた枯枝を使う。これらはすべて自分の手でやらなければならないため、この野焼きは、子供たちにとっては貴重な体験になり、以降、毎年つづけられることになった。一方、実習生にとっても貴重な体験をする場の一つになった。たとえば、裏山を歩きながら、子供がなにげなくこんなことをいう。

「先生、この土、お庭の土と違うよ。ほら、さわってみて。やわらかいでしょ。これは木の下の土なんだよ。色も違うし、お庭の土はかたくて、ざらざらしてるね。もしかしたら、これ、肥料かもしれない」。子供たちは、いつも、「ふしぎだな?」「なんだろう?」「やってみたら」と、好奇心のかたまりのように探索し、目を輝かせる。次々と新しいことにぶつかり、挑戦し、発見してい

く。その発見を大人や友だちに認められることで、ますます楽しくなっていく。

学生たちは、子供たちの創造力を目の当たりにして驚く。自分はどう対処したらいいのか考える。子供たちが前面に出してくる楽しさのなかに、何を学んでどのように子供と接していくかを模索する。そして、それが幼児教育の第一歩であることを、子供たちのかかわりのなかで実感していく。教育実習がたんに単位取得のためのものでないことを、学生たちはあらためて知るのである。

さらに五十六年、園児たちにとって貴重な体験学習が行われた。「りんご狩り」である。りんごを直接木からもぎとる経験をさせたのである。自分の手でもぎとり、その場で食べ、一人一家庭に持ち帰り、家族全員で食べる。そしてそれを絵に描くという体験学習で、これは家族からもたいへん喜ばれている。

昭和五十年代の中頃から全国的に幼児の数が減りはじめ、入園金の引き下げや長時間保育など本質的でない問題が新聞紙上にぎわせていた。こうしたなかでも、上田女子短期大学附属幼稚園は、前年にもまして多くの希望者があった。それは、園児と先生が肌で触れ合うことのできる貴重な体験学習の数々、豊富な遊具を使った教育内容の充実が評価を高めていったことにほかならない。幼稚園が経営上立派に存続していくのは、やはり教育の質的な充実、向上以外にはないと、決意を新たにしたのである。

第四節—教育成果挙げる三つの行事

菅平ゼミ

幼児教育科の一年生と教員全員が、自然のなかで親睦を深め、教育、人生、社会、自然問題を考え、明日の歩みに役立てるのが、菅平ゼミである。

大自然のなかで集団生活を体験しながら幼児教育の指導法を研究・習得することのゼミナール合宿は、四月の体育デー、五月の美術デーとともに、全員参加による上田女子短期大学の三つの行事のうちの一つである。一泊二日の日程で、分科会単位でゼミ、野外学習、自然研究、保育技術指導、研究発表のほか、ハイキング、夜はキャンプファイアーを囲んで、クラスの寸劇を披露するなど、菅平ならではのゼミナールである。

菅平は長野県東部、上信越高原国立公園内に広がる高原である。夏はキャンプ、冬はスキーのメッカになり、高原キャベツの産地、大学ラグビーの合宿地としても知られる。上田女子短期大学で

は自然にめぐまれたこの菅平で、毎年、夏期ゼミナールを行っている。この夏期ゼミは、昭和四十四年七月二十五日、一回目の開催場所が菅平高原だったため、以降、菅平ゼミと呼ばれる。

保育技術指導はだいたい次のような分科会に分かれて行われている。①いたどり笛製作、②自然の中で音探し、③リズム遊び、④折紙遊び、⑤表現遊び、⑥タオルおじさん。午後は全体会が行われ、各分科会の代表が発表し、講評と続く。

保育技術指導の具体例として、いたどり笛の作り方をあげてみよう。いたどりの茎を斜めに切り、切り口に少しキズを入れて葦の葉の小片を差し込む。口にくわえて吹くと、いろいろな音色が出てくる。自然との直接体験が少ない現代の学生に、そんな自然の中の遊び方を工夫させる。「自然の中の製作」というテーマの保育技術指導だ。

菅平ゼミの実行委員長を務める幼児教育科学科長竹内要教授によると、「いまの学生たち自身、われわれ教師と青天井の下で話をしたり、一緒にものをつくったりする機会が少なくなっている。で、学生たちにとっても、この野外学習は貴重な体験になっている」と力説する。

菅平ゼミは昭和六十三年度から九月末の後期授業の当初に変更された。「この変更で菅平ゼミに新たな意味合いが加わった」と竹内教授はいう。従来の七月末の場合だと、大学生活の様子が分かりかけてきたものの、まだ高校生の面影が残っている状態にあった。夏休みに自分の自由にまかさ

れる生活時間を経験したあとは自覚が出てくるため、自分の選んだコースを再確認し、正面から取り組もうとするスタート台として位置づけられるようになった。そのような状況のなかで行われる菅平ゼミは、学生たちに幼児教育者としての意識を刺激する意味をもつようになったといつてもよい。

プログラムや実施時期などについては今後もさらに見直し、検討が加えられていく予定だ。ただ、菅平ゼミの基本的なねらいは、やはり学生同士が、学生と教師と一緒に寝起きし、触れ合いをすること。そのなかから豊かな人間性や創造力が育っていく。そんな菅平ゼミのよきは、いつまでも大切に守っていきたい。これが全教員の願いである。

美術デー

菅平ゼミが生活のなかで創造性を養うものであるとするなら、美術とのかかわりのなかで新しい創造力の発見を促すのが美術デーである。

上田女子短期大学は創立のとき、その教育内容に特色をもたせるため、美術を音楽、体育とともに幼児教育の三本柱に位置づけた。昭和四十八年、美術デーが林幸四郎教授の提案によってはじめられた。

信州はまさに自然の宝庫である。行くところ事欠かず、すべてが教材になる。

幼児教育科の一、二年生と教職員が、志賀高原、日本民俗資料館、礪山美術館や北野美術館、信濃美術館などに出かけ、美術作品を鑑賞し、美術館周辺の風景をスケッチする。特徴はクレヨンを使つてのスケッチだ。これは、幼稚園や保育所で子供にクレヨンを使つて絵を描かせるための実技学習だ。学生にとつて、クレヨンを使うなど幼稚園時代以来の体験だが、絵画担当の高木秀世講師によれば、「郷愁のようなものを感じたり、あらためて興味を抱いたり感動する学生が多い」という。

スケッチした絵の全作品は学内に展示される。この展示も絵画教育の一つだ。学生は一時はいやがる。自分の絵が下手だと思つてゐるからだ。新入生にアンケートをとつてみると、七割くらいは描くことが嫌いだという。

しかし、絵を描くことが好きになれることこそ、将来、子供に絵を教える者の要諦なのだ。そのための展示なのである。指導する側が、絵に技術の違いで上手下手があると考へてゐると子供もそう思い、下手な子はますます嫌いになってしまう。絵は個性の違いが表れるので、指導するときは絵を上手下手で判断してはいけないのだ。卒業するころには、「おもしろい、好きになった」と答へる学生が圧倒的に多くなるという。

豊かな情操をそなえた女性を育成する。上田女子短期大学の建学の理念の中で、美術デーの果たす役割は大きい。

体育デー

体育行事は身体の鍛練をはかり、レクリエーション活動を通じ、学生同士および教師間のコミュニケーションの場として欠かせない。開学以来、「美術デー・体育デー」の名称で、美術と体育行事が行われてきたが、昭和五十一年度から美術デーと体育デーを切り離し、体育デー本来の目的を充実させるため、二日間の日程を組んで行われるようになった。過去のおもな内容はバレーボールとソフトボールのクラスマッチ、オリエンテーリングである。これには全教職員も参加する。

六十三年度から従来のオリエンテーリングに代わり、犬飼己紀子助教授の立案による企画「ウォークラリー」が、全校あげて行われた。オリエンテーリングがスピードとタイム、得点を要求する競技に対し、ウォークラリーは、個人競技になりがちな部分を、社会体育という観点から、人間同士の触れ合い、自然との触れ合いをもっと深めようとする競技である。競技の方法は、指定されたコースを所要所の案内図だけを頼りに、途中のチェックポイントで出される課題問題を解きながらゴールまで歩き、所要時間と回答の正確さを競うもので、距離はおよそ六キロ。グループ単位で

参加する。

その課題問題が実にユニークである。たとえば、神社にあるチェックポイントでは、「境内にある大木の周囲はどれくらいでしょう」、また、別の神社では「鳥居の真下で俳句をひとひねり」、お寺に寄れば「どんな重要文化財がありますか」といった具合である。

文化財の多い塩田平のなかに生まれ育った地元の学生から、「新しい発見をした」という声が聞かれたほど、豊かな自然に親しみながら歩く。

このように、体育デーで共同意識を養い、美術デーで情操の大切さを知り、そして普平ゼミで人間性を育む。春から秋口にかけての一連の行事を体験しながら、学生たちは、上田女子短期大学の教育の理想を身につけていく。

第五節—「音楽の会」と「クリエイティブダンス」

教育成果発表の場を地域で

上田女子短期大学では、音楽・美術・体育を幼児教育の三本柱とする教育目標を掲げ、音楽部門・体育部門の内容の充実、向上にも力を注いでいる。その成果は、開学初期は音楽会、校内創作舞踊発表会、文化祭、文化フェスティバルなどで発表されていたが、やがてそれは、「音楽と創作舞踊の会」、さらに「音楽の会」と「クリエイティブダンス」の二つに分離されて発展していった。音楽会は音楽をとおして地域文化の向上に貢献したいとする、いわば、音楽の地域活動である。

第一回音楽会は、昭和四十八年十一月十七日、上田市民会館で行われた。

前年四月に音楽コースが開設されて以来、教授陣の充実によつて学生の層にも厚みが増し、音楽への高まりにも目を見張らせるものがあつた。その機をとらえた藤沢紫朗助教授が、前年、「音楽会」を上田市民会館で開催することを教授会に提案していたのが実現したものである。実現の背景

には、上田女子短期大学の誕生を祝って、新しい学校づくりに関校中が燃えていたことも大きな原動力となっていた。

この催しは、音楽教育を通じ周辺地域の音楽文化の普及・向上を目指すことから、学校行事として、学生自治会も組織的に協力して行われた。

プログラムからおもなものを拾ってみると、一年生全員による女声合唱にはじまり、二年生によるピアノ独奏とソプラノ独唱、音楽コース専攻の一、二年生による女声複二重唱、音楽担当教員のソプラノ独唱とピアノ独奏、創作舞踊部員の舞踊とつづく。

四十九年の第二回から「音楽と創作舞踊の会」と改称され、五十年の第三回から開催目的はさらに明確になっていく。それは、音楽と舞踊を公の場で発表する機会を作ることによって、学生により意欲を起こさせ、さらなる努力と研究を高めさせ、なおいつそこの質的向上を目指す、というものである。

この年、さらに、過去の実績に加え、画期的な試みがなされた。それは、松田トシ副学長がかねてから所有しているインドネシアの民族楽器アングロンの演奏を組み入れたプログラムであった。このインドネシア民族楽器アングロンの演奏が日本で公にされるのは初めてとあつて、地元新聞をにぎわすほどの盛大な発表会となった。構成も第一部・音楽、第二部に創作オペレッタが加わり、

第三部・創作舞踊のかたちに改められ、以後このプログラムは定着した。

運営も組織化された。計画・原案作成に、音楽部門は藤沢紫朗教授と北村恵子、兎束淑美の両講師の三人、創作舞踊は飯田正江講師の合わせて四人があたるほか、「音楽と創作舞踊の会実行委員会」が組織され、多くの教職員が委員として参加した。

翌年の第四回は藤沢教授の退職により、代わって関口信雄講師が迎えられた。

五十二年の第五回から学生も積極的に運営に参加するようになった。教職員による実行委員会に加えて、学生の委員会組織ができたのである。ここに文字どおり全学あげての開催となったのである。また、この年からピアノ連弾に出演する保育コースの一、二年生の中から二人を選考するオーディションが行われるようになった。このオーディションに向けて練習に励む学生の熱意によって、参加意識はさらに高まった。オーディションは現在も続けられている。

第六回から、保育実習でお世話になっている、ひもろ木園と月影寮などの施設の寮生を招待して、たいへん喜ばれた。

昭和五十六年。この年開催の第九回から、発表会の形式が大幅に変わった。開学以来、音楽教育と舞踊教育の内容充実と地域の芸術文化の普及・向上に務めてきたこの催しは、音楽部門と創作舞踊部門を分離し、音楽部門を「音楽の会」、創作舞踊部門を「クリエイティブダンス」と名称も新

たにして開催することにしたのである。理由の一つは、出演する学生の増加と内容の充実度もあって、発表時間があまりにも長くなってきたことである。観客である地域の人びとや学生にとって、初めから終わりまでつづけて見るのが大変だというのだ。

一方、音楽・創作オペレッタ・創作舞踊の各部門ともに学生が十分力をつけてきたので、それぞれが独立して発表すれば、さらに教育効果が期待されるのではないか、というものだった。

プログラムは「第九回・音楽の会」と改められた。第一部・コンサート、第二部・創作オペレッタとして。

上田の秋を彩るコンサート

「音楽の会」第一部は約一時間におよぶコンサートである。その目的は、音楽関係の授業を通して身につけた表現力、演奏技術を発表すること、また、この音楽体験を通し、大学生として、ひとりの女性としての感情を磨くことを目指している。

第九回「音楽の会」は「明日がとおい思い出になる日も……」と一年生全員による校歌で開幕した。続いて音楽選択二年生の合唱、保育コース二年生のピアノ連弾、音楽コース二年生のピアノ独奏、音楽コース研究生の独唱、音楽コース全員の音楽アンサンブルと盛り沢山のプログラムが組み

れ、このかたちはその後も続けられてきた。

上田女子短期大学の看板として音楽教育に力を注ぎ、つねにそのレベルを維持し続けてきたその証明が、毎年行われたこのコンサート。上田を美しい楽の音で綴る秋の風物詩となっていた。

創造性を伸ばす創作オペレッタ

「音楽の会」の第二部で取り入れられている創作オペレッタは、幼児教育者を目指す学生にとって、豊かな自己表現能力を身につけさせるためには欠かせない学習の一つだ。カリキュラムでは「音楽リズムエ」で、五十年から導入されている。

担当教員の北村恵子講師は、従来、保育現場で行われていたオペレッタ活動に疑問を感じていた。そのオペレッタの方法とは、既成のオペレッタの作品を毎日子供たちに練習させる。ところが子供たちは、発表の間近になっても仕上がらず、逆に疲れていく。結局、発表会は、保育者は見せることに満足し、父母も自己満足に終わってしまう。これでは子供不在の発表会ではないか。無理が起こるのは、既成のものに合わせようとするからではないのか。そこで、創作オペレッタを思いついたのである。

幼児たちが日常生活のなかで興味や関心をもったこと、感動した出来事をみつけてテーマからス

トリーまでつくり、表現遊び、言葉遊びをさせながら発展させていけば、無理なく楽しい活動になるはずだ。これを授業に取り入れることはできないか、という発想だった。県内の大学でも授業として取り入れたのは初めてのこと、全国でも活動しているところは、まだ少なかった。

第九回「音楽の会」第二部で発表された創作オペレッタの出しものは「ピーターパン」「オニの子」であった。学生が演じる笑いあり涙ありの好演に、幼児から大人まで会場いっぱいにつめかけた観衆は、楽しいひとときを満喫した。

いま、義務教育以上の学校で行われている音楽教育では、創造的音楽学習が注目されている。自由な自己表現活動をとおして創造性を伸長させることを目指した音楽指導法である。勉強や技術習得のためだけではなく、音楽の原点を見直そうというものである。この創造的音楽学習は上田女子短期大学の創作オペレッタの指導法と、とてもよく似ている。すなわち、上田女子短期大学が目指してきた音楽教育の理想が、広く義務教育以上の音楽教育にも求められるようになってきたのである。

新しい舞踊文化をつくるクリエイティブダンス

「音楽と創作舞踊の会」から分離して名称も新たに「クリエイティブダンス」となったの第一回発

表会は、昭和五十六年七月十八日、上田市民会館で行われ、以降、毎年、七月に行われてきた。

この公演にあたり当時の鈴木鳴海学長は、「多くの文化は伝承的性格をもっていますが、創作舞踊はこの軌道を乗り越えて新しい舞踊文化を創りつつあります。もろもろの現象のなかの美に感動し、これを空間に自由に表現する芸術であります。この創造的な表現に、私たちは改めて未だ経験しなかった美に、一つの、しかもフレッシュな共鳴を覚えます」との挨拶文をプログラムに寄せている。

テーマを決めることから、動き、伴奏、衣装、照明と、すべて学生たちの手づくりである。発表近くになると、幼児教育科の学生で体育館はもちろん、学校中が練習の場と化す。飛び、跳ね、体をくねらせ、床に寝転び、各々のテーマを表現しようとしている。

発表会には全員が出られるというものではない。まず学内発表会で数グループが選ばれる。選考に洩れたグループは裏方にまわり、照明や音楽、アナウンスをつとめることになる。せつかく一生懸命練習しても自分たちの作品を披露できなければ……と思えば思うほど学生たちの熱は上がる一方なのだ。

第一回のプログラムは、第一部「千羽鶴、卑弥呼、けんか（上田市立中塩田小学校四年四組）、ニューヨーク、如月、反抗期、梅雨（上田東高校）、万里の長城」、第二部は「闘牛士、鐘楼、THE SUN

SHINE (上田千曲高校舞踊同好会)、能面、中国旅情チヤイ、睡蓮、ダダ、FLY (創作舞踊部)と盛大に行われた。

クリエイティブダンスの発表会には、周辺の幼稚園から高校まで、創作舞踊活動に力を入れていた学校から賛助出演してもらっている。これは、学校の中だけでなく、多くの人たちにも参加していただき、創作舞踊を地域に広めていきたいという趣旨によるものだ。

これまで賛助出演した学校は、上田千曲高校、上田染谷丘高校、上田東高校、上田第三中学校、上田第四中学校、松本盲学校、上田東小学校、中塩田小学校、神科小学校、本学附属幼稚園であり、このほか本学卒業生有志の出演もあった。

こうした交流をとおして地域との連帯、地域に根づいた大学を目指し、開学以来、上田女子短期大学が掲げてきた目標を実現していくうえで、創作舞踊は大きな役割を果たしてきた。

担当教員飯田正江助教は「開学以来、学生とともに積み重ねてきた舞踊を振り返ると、テーマによりその時代の特徴が出て時の流れを感じます。また、五十四年当時としては珍しいシンセサイザーを導入したり、常に新しい舞踊を求めてきました」と、熱く語る。

地域の保育現場に立った卒業生たちが、幼児たちに創作舞踊を指導しながら、創造力の種をまき、芽を育て、花開かせる。上田女子短期大学が地域の幼児教育の中心、文化の中心を目指すなか

で、この創作舞踊はすっかり定着した。

ニューイヤークンサート

昭和六十二年のコース制導入により「音楽の会」と「クリエイティブダンス」は、上田女子短期大学開学以来十八年間の幕を閉じることになった。そして「音楽の会」は、音楽コース、同卒業生、二年生声楽選択者、一・二年から選ばれたピアノ連弾で組まれた「ニューイヤークンサート」として、平成三年一月二十日、上田市文化会館ホールで新たに出発した。本格的な衣装をまとい、独唱、ピアノ独奏など芸術性の香り高いコンサートとなり、二回目以降も大盛況であった。

「創作オペレッタ」は、学科必修であった音楽リズムが選択となり、新たに幼児の音楽活動の発表というかたちを明確にし、学生のオペレッタ、合唱、合奏など幅を広げ、附属幼稚園児を招いて校内で発表会を行い、かわいい声援を得ている。

「クリエイティブダンス」も、授業が学科必修から選択となり、これまでのような大がかりな公演は不可能となった。したがって、学内発表会を継続していくことになり、平成四年で二三回目を終了した。

第六節——上田女子短期大学の諸研究活動

研究業績発表の場『紀要』発行

本学教員の研究業績発表の場として昭和四十六年、『紀要』第一号が発行された。

昭和四十八年に上田女子短期大学となつてのち、翌四十九年に第二号の発行をみたが、その後諸般の事情からしばらく休刊した期間はあつたものの、五十九年には創立十周年記念号（通巻七号）の発行を機に、以降、毎年発行している。

『紀要』は全国の大学、短大、研究機関五百余カ所と交換を行っているので発行部数も多く、附属図書館に目録登録のうえ保管し、また執筆論文は、『全国短大紀要論文索引（日本図書センター）』などに、分野別にタイトルが掲載されている。

『幼児教育研究』から『卒業研究集』へ

さきに、全国の短大のなかでも珍しいといわれる卒業研究をみてきたが、その卒業研究と歩をそろえて「幼児教育研究会」が誕生している。幼児教育について専門的に取り組んでいく幼児教育研究会は、教員の卒業研究の指導体制の確立のあらわれとしてできた研究会である。この研究会の設立は大学創立の翌年の昭和四十三年と古く、いわば、幼児教育科の歴史とともに歩み、学生の卒業研究活動の盛り上がりにより大きな役割を果たした。

幼児教育研究会は、教員、卒業生、学生、その他の賛同者で組織されていた。おもな事業のうちの一つは、教員の論文と学生の卒業研究の中から数編を選んで全文を掲載する機関誌『幼児教育研究』の発行（年一回年度末）である。同誌は六十二年度までに第二十三集を教えた。

一方、学生を主体とした研究活動から発展させて、そこに卒業生の研究もまじえて、学内で一つのもとまりがつき次第、外部へも呼びかけて横の連絡をとるという将来展望をもっていた。このうち、卒業生と外部の賛同者に呼びかけての研究活動は、五十年度に設置された児童文化研究所が肩代わりすることになり、幼児教育研究会は発展的に解消した。そして『幼児教育研究』はその後、卒研指導委員会の手で編集が行われることになり、六十三年度からは『卒業研究集』と改題され今日に継承されている。

児童文化研究所

現在、教育・文化の領域でユニークな活動を展開している研究会組織に「児童文化研究所」があるが、これは昭和五十年に、大学の附属研究機関として設置されたものである。所長は鈴木鳴海学長があたり、全教員が委員を務めた。この研究所は従来、幼児に関する研究を行っていた幼児教育研究会とは別に、児童文化についてさらに基礎的かつ広範にわたる研究活動を目指して設立されたものである。すなわち、児童の生活実態について研究を行うと同時に、児童文化への参与の仕方と児童のパーソナリティーの育成過程を把握し、幼児教育の資とするというもので、子供たちの世界を、生活、文化、教育課程の三つの軸でとらえ、さまざまな角度から研究し、幼児教育の在り方を探っていくというものである。国文科が開設されてからは、児童文学などを専門とする教員の参画を得て、活動領域はさらに広がった。

児童文化研究所の設置は四十八年から準備が進められてきた。発足準備期の五十年三月には『上田盆地の民話』が上田女子短期大学の出版事業として刊行されている。同書は、四十九年度の卒業生が卒業研究で採集してきた民話をまとめ、塩入秀敏講師が編集・解説し、林幸四郎教授が挿絵を描いたものである。

発足三年目の五十三年六月一日、児童文化研究所は規定を設け、本格的な活動を開始する。その

業務として、①児童の生活、文化に関する調査研究、②資料の収集と整理、③児童文化に関する著書・資料集および『所報』などの刊行、④公開の研究会の開催などである。

このうちもつとも重点が置かれたのが公開の研究会「児童文化研究集会」で、五十三年から今日にいたるまで毎年開催されている。第一回児童文化研究集会は、五十三年八月十四日、上田女子短期大学を会場として行われ、県外からの宿泊組もあつて盛況をきわめた。

第一回児童文化研究集会の記念講演は、三沢光則長野県中央児童相談所所長によつて行われた。テーマは「今日の幼児をめぐる諸問題」。長年の児童相談の経験をふまえたユーモアあふれた講演で、午後は三つの分科会が開かれた。第一分科会は本学元教授の溝上泰子氏による「教育の原理は自己自身」、第二分科会は関克彦教授の「保育現場と大学の連繋の必要性」、第三分科会は須永淑助教授の「遊びの本質と保育活動」で、それぞれ熱心な討議が繰り広げられた。参加者は百三十七人と、予想を上回る盛況ぶりだった。

児童文化研究集会の参加者の中心は在學生と卒業生だが、地域の幼稚園・保育所・社会福祉施設の関係者のほか、児童文化に関心をもつ一般市民の参加もあり、年を追つて参加者はふえ、多いときは三百人近くを教え、研究会としては質量ともに定評がある。また、在學生にとつては学内にいながら地域の人と勉強できるよい実習・交流の場であり、卒業生にとつては実践活動の発表の場と

なつてゐる。

第一回から第五回までは児童文化研究所と同窓会の共催で行われ、第六回から第八回まで同窓会は後援団体として参加の呼びかけ、開催準備、当日の進行などに協力してきた。第九回からは児童文化研究所の単独事業として開催し、名称も児童文化研究大会と変わった。

この児童文化研究大会の特徴は、児童文化のさまざまな領域をカバーするため、第一回以来、分科会の活動に力を入れていることだ。毎回、二つから三つの分科会が設けられ、幼稚園や保育所など保育現場での活動発表にあてられ、その内容はおもにボランティア活動、児童に関する地域活動である。最近の傾向として、地域の児童文化活動を紹介したり、地域の草の根的児童文化活動を支えている人たちを取り上げるなど、地道な活動が注目を浴びている。

児童文化研究所は五十四年に『所報』を創刊し、毎年、一回刊行している。内容は児童文化研究集会の分科会の研究記録を収録するほか、講演内容も掲載する。

また、五十三年秋に提示された児童文化研究推進計画により、所員の研究成果でまとまった論文を掲載するほか、研究分量の大きいものは児童文化研究所叢書として刊行している。五十五年九月、鈴木鳴海所長の『児童文化の性格と課題』が叢書の第一号として上梓された。

第二章―塩田平に甦る教育の理想郷

第一節―学園のシンボル独立図書館

いっきに進められた設備、蔵書の改善

地域の文化の度合いをはかるとき、その周辺にある図書館が引き合いに出されることがある。大学でも同じことで、図書館がいかに充実しているか、どんな蔵書があるかが、その大学の教育水準をはかる目安になるのだ。

塩田平の一角に明るくその姿を誇る上田女子短期大学附属図書館は、幾多の変遷を経て充実、発展してきた。この附属図書館の歴史は、上田女子短期大学の歴史の象徴的存在でもある。

昭和四十八年に上田女子短期大学が誕生したころは、まだ図書館と呼ばれるほどのものではなかった。校舎内の一教室を図書館にあてた小さな規模のものだった。蔵書は一〇、六〇二冊、広さは閲覧室、書庫、事務室を合わせて一六三平方メートルで、木製の長机と長椅子、閲覧座席数は四〇だった。

上田女子短期大学としてスタートし、新しい陣容のもとで教育面での改革が着実に進んでいくにしたがって、設備や蔵書など、次から次へと改善の手が打たれていった。

改善の第一歩は、四十八年に木製の長机と椅子が、使いやすい機能的な閲覧机と椅子に取り替えられたことにはじまる。

五十二年の夏になると、大幅な拡張工事が行われた。図書館に隣接していたロッカールームを別棟に新築して、その空いたところに書庫を移転させ、参考図書以外の全蔵書を一室に集めた。いままでも書庫が占めていた部分に事務室を移しカウンターを設けた。閲覧室が広く使えるようになった。この結果、延べ面積は三三三平方メートル、およそ二倍近く広くなった。閲覧座席数も四〇席から二倍の八〇席となった。入館者をカウントするセンサーも取り付けられ、この年から入館者は正確に記録されるようになった。

改修された図書館は、夏休みを終えて学園に戻ってきた学生に、大きなプレゼントとなった。

図書館運営予算も系統立てられ、蔵書数も急激に増加した。生まれ変わった図書館のなかで学生たちに注目されたのは、「児童書コーナー」の新設だった。分類は上田女子短期大学独自の分類方法で、これは分かりやすいと学生たちに歓迎された。参考図書、大型図書、郷土関係図書、新書などのコーナーができ、それぞれの図書も年々充実していった。

館長が常勤でないため、司書一人の手で行われていた運営の不足部分を補う目的で、四十九年に鈴木鳴海館長を委員長とする図書館運営委員会（通称図書委員会）が組織された。委員会は購入図書の選定のかたわら、図書館の幅広い利用を進めるため、『図書館だより』を創刊した。五十三年度から委員長に須永淑助教授があたり、国文科が開設された五十八年度から清水正男教授が館長と委員長を兼ね、平成四年度からは山口吉宗教授が引き継いで運営にあたっている。

突然の図書館建築指示下る

昭和五十四年の夏、校内は未曾有の工事現場と化した。夏休みを利用して全校舎内をスチーム暖房にしようと、大改修工事中だった。全職員総出で、てんてこ舞いをしていった。その工事が終わると間もなく九月初めのある日、突然、「図書館を建てる。地鎮祭は九月二十日に決定」と指示が下った。独立棟の図書館は早晚ほしいとは考えていたが、二年前の改装で閲覧室も倍増したばかり。職員にとって、これはまさに晴天の霹靂だった。

北野理事長が「図書館は大学の要だ」というその思想が、いま具現しようとしているのである。

九月二十日、前庭で地鎮祭が執り行われた。図書委員会は準備委員会を開く暇もなかった。構想は理事会で決定された。北野理事長の英断、言動には慣れているはずの職員たちであったが、この

指示には大慌てであった。

北野理事長が描いた設計図は、従来の図書館のイメージからは考えられない、当時としては斬新な設計の超モダンな絨ガラス張り図書館だった。閲覧室は大型書架を中央にまとめ、その書架を囲むように閲覧机、キャレルデスクを周囲に配置した。

モダンな様式のなかにも木の温かさを生かした落ち着いた雰囲気のある閲覧室の図書館が出来上がった。着工からわずか三ヶ月というスピードで、十二月末に完成した。新図書館への引越は、正月休み中の一月五日から行われた。雪の舞う寒い日だった。土曜日・日曜日も返上しての整理作業が行われた。「この三月に卒業する学生に、新しい図書館をたとえ一日でもいいから利用できるようにしてあげたい」と工事を急いでもらったかいあって、五十五年一月二十四日、鉄骨二階建ての独立棟の附属図書館が開館した。

わずか三週間だけだったが、「卒業の記念によい思い出をプレゼントすることができました」と、須永淑委員長と長張和子司書は感慨深げであった。

ハイテク装備でも県下のリーダー格

五十七年、国文科開設準備にともなう約七千冊の専門図書が受け入れられ、蔵書数はいっきに約

二万七千冊となった。これによって、県内私立短期大学のなかで第一位を誇る規模の図書館となり、同時に利用者数も急増した。

設備面での充実ぶりにも目を見張るものがある。五十五年にはカードコピー専用機「ユービックス」を導入した。これは目録の作成を能率化するもので、国文科関係の図書受入れ準備業務で活躍した。

日常業務のなかで手がつけられていなかった部分の目録類の集中整備も成し遂げ、五十六年にはコピーサービスを開始した。さらに六十年、一階の書庫を移動集密書架に替えた。この蔵書容量は約三万冊。六十二年には視聴覚機器、カセット、ビデオ、スライド、CDなどの設備を整え、情報時代に即応した図書館として、いちだんと充実した。

次の図書館の構想は、時代の要求や情報システム化に向けてのコンピュータ化であった。コンピュータにあたっては昭和六十年ごろから予算を計上し、平成元年四月に機械化が実現した。システムの選定にあたっては、数多く開発されているシステムのなかから、経済性、操作性、設置形態などを十分考慮し、パソコンでの機械化を考え、ブレインティク社の「総合管理システム」を導入することにした。

二人の司書は平常業務と併行して蔵書のデータベースづくりに全力をあげ、翌二年九月、後期の

授業開始時には閲覧室の全図書二万六千冊の入力を終え、貸出・返却業務がスタートした。この貸出稼働は長野県内の全大学の中で初の稼働であった。当初計画よりも早めにスタートできたのは、図書館司書課程実習において、同課程の履修者による作業協力があつたことも大きな力となつた。

図書館の利用方法も大きく変わった。いままではカード記入方式による貸出手続きをしてきたのを学生証をバーコード化し、スキヤナーで読み取るだけで処理完了となるため非常に能率化され、いつそう便利なものとなつた。また、国立国会図書館のマーク（J-BISC）などを取り込むことにより、新刊情報をいち早く入手することができるようになり、整理業務も非常にスピーディーなものとなつた。

さらに外部データベースの取り込みを平成三年度から実現させた。まず、国文学研究資料館のデータベースを通信回線によりオンライン検索できるようにした。新聞記事情報も同時に取り込めるようにした。

そして平成四年度からは、全図書資料のコンピュータ貸出を可能とするためバージョンアップをはかり、平成五年度には学生用に検索端末を開放することが決定した。これは司書課程のコンピュータ実習や全学生の情報検索のために大いに期待される。

第二節―「学海」の伝統を受け継ぐ国文科

国文科開設に寄せる地域の熱意

信越本線で上田まで行き、そこからさらに千曲川を渡って南に下ると、一つの盆地が広がる。塩田平だ。鎌倉時代「塩田は信州の学海なり」と呼ばれたところである。長野県の教育の長い伝統と歴史は、じつに鎌倉時代からはじまっているのだ。

「幼児教育科だけの単科大学では、発展には限界がある。女子総合大学になることを理想とし、新たな発展への第一歩として、学科を増設したいものだ」。こんな声が理事会の席上で聞かれるようになったのは、昭和五十年頃のことである。

日本の経済成長にもない、長野県の大学進学率は増加の傾向にあり、平均進学率は二八パーセントを超えていた。とくに進学志望がふえたのは女子だった。男子より高く三三・一パーセントに達していた。そして、人気が高い学科はやはり人文系。そのなかでもとくに文科系を希望する生徒

が大部分を占めていた。

一方、受け入れ側の短大の状況はというと、当時、国文科を開設している短期大学は長野県短期大学一校のみで、入学定員もわずかに四十人。国文科進学志望者は、「長野県内の短大に入りたいけど国文科がない。県外に行くしかない」と、東京はじめ県外へ出ざるをえない状況にあった。地元で国文科ができることは、長野県内の高校生、先生、そして進学させる親たちの願いでもあった。現に、上田市を中心とする近隣町村の教育関係者は、一日も早い国文科の開設を上田女子短期大学に望んでいた。学科増設への気運は高まっていた。

上田女子短期大学の理事会でもこうした要望を受けて、学科を増設しようとした話が出たのである。当時、上田女子短期大学の教授陣は、幼児教育科の教員だけである。理事会の学科増設の意向を受けて開いた教授会では、満場一致で学科増設に賛成し、全面協力の体制をしいて、準備委員会を発足させた。

「特命を受けて開設準備進める

「国文科開設の準備を早く進めること」。この特命を北野理事長から受けたのは、昭和五十五年四月に理事会で常任理事・事務局長に任命された簾田保夫である。理事会で国文科増設が話題にのぼ

つてから五年近くの歳月が流れていた。開設目標は五十八年とすでに決まっていた。簾田新事務局長を囲んで、事務職員全員が開設準備にとりかかった。

「事務職員が一致協力して、国文科新設という大きな目標に向かって進みました。苦労は覚悟していましたが、大きな目標でしたから、達成されたときに得る大きな期待と希望をもってがんばることができました」と、回顧する事務職員もいる。

開設準備を進めていくなかでまず問題になったのは、人事、カリキュラム作成、図書整備などだった。そこへ心強い協力者が現れた。広島大学の元事務局長の井上正氏と、浜松医科大学や産業医科大学などで事務職を経験した橋本春雄氏のお二人だ。早速、二人の指導と協力のもとで準備が進められた。じつは、この二人に囑託職員になっていただくよう懇請したのは、ほかならぬ北野理事長だった。状況を心配した北野理事長が自ら国公立大学の事務職員にあたり、この二人に頼み込んだのである。

難問山積に全員一致協力

さらに難航したのは教授陣の問題だった。すぐれた教授をどれだけ招聘できるかは、どの大学も永遠に追いつけなければならぬテーマである。

カリキュラムが文部省の指導のもとで編成されると、それぞれの専門分野にたいし、候補となる教授のところへ折衝に行った。地元信州大学、長野県短期大学をはじめとし、県内はもとより東京の大学まで足を運んだ。

結局、学科長に信州大学の塚田清策教授をはじめとして専任教授五名、専任助教授一名、専任講師二名、計八名の国文科の教員と一般教養科目で専任教授一名、教職課程に専任教授一名、専任助教授一名、計十一名の新任教員を招くことができた。この布陣は、学科新設に厳しい条件を示していた文部省からも、「十分必要を充たすもの」と評価されたほどの人選だった。

一方、国文科設置認可申請書の作成にも苦勞した。大学・短期大学設置申請書は厳しい設置基準があるため、申請書作成には深い知識と独特の事務処理能力とが要求される。書類作成には全職員が一致協力して当たった。通常の業務のほか、一字たりとも間違ってはならない膨大な資料を、連日、夜ふけまで作成に没頭した。

昭和五十六年五月六日。ようやく申請書を書き上げ、評議員会への諮問を経て、理事会で国文科設置を議決した。そしてその年の七月二十二日、時の文部大臣小川平二に申請したのである。

ところで、申請書を提出したからといって、すぐに認可が下りるとはかぎらない。認可されるためには、文部省から派遣される大学設置審議会および私立大学設置審議会委員の現地審査を受けな

ければならない。

独立図書館が開設に一役

「国文科の命は本だ」といわれる。国文科を新設するときの専門図書数の認可基準は四千冊以上だった。国文科の専門書だけでなく、一般教養図書もそろえなければならぬ。さいわい上田女子短期大学は、国文科新設に先立つ五十五年に独立棟の図書館をつくり、内容の充実に力を入れてきていた。この図書館が独立棟であったことが、文部省の審査クリヤーに大きく寄与していた。一方、教室数の充足度についても、従来、図書室として使っていたスペースがすべて教室に改装されたため、そのぶん教室が増えて解消されていた。図書を並べるスペースは十分にある。あとは購入する図書の選定である。図書の選定には非常勤講師の渡辺竹二郎長野県短期大学名誉教授を中心に、国文学・国語教育に造詣の深い先生方に依頼した。

書店から出版目録を取り寄せ、購入リスト作成のために、一冊一冊丹念に図書を選ぶ作業が続いた。そのとき購入した図書は七千冊。選定するのに要した時間は、丸三ヵ月である。発注五ヵ月後の八月末に図書は届いた。事務局員も総出で一冊ずつ本の整理に取り組んだ。図書と同時に和文タイプ三十六台と英文タイプ二十台をそれぞれ購入した。教室も整備され、あとは文部省の現地審査

を待つばかりであった。

感無量の大臣認可書

昭和五十七年十月十五日と同二十五日、文部省大学設置審議会および私立大学設置審議会委員総勢八人による現地審査が実施された。審査は一度でパスした。来学した審議会委員は、上田女子短期大学の施設をつぶさに視察して、地方短期大学とは思えない充実ぶりに加え、明るいガラス張りの真新しい独立棟の図書館に満足気な表情だった。

翌五十八年一月十七日、国文科設置認可が下りた。定員は八十人である。簾田元事務局長は、「文部大臣の認可書が到着したときは、本当に感無量だった」と、退職したいまでもそのときの感激が忘れられないという。

長野県の多くの人が渴望していた国文科は、こうして誕生した。地域の熱意と北野理事長の描く学園づくりの理想図と教職員の努力が、ここに実を結んだのである。初めての入学式は五十八年四月十一日。春の遅い塩田平に、ようやく春の息吹が感じられるところであった。

第三節―塩田平の国語国文学会

卒業研究と国語国文学会

昭和五十八年に国文科が発足するとともに、草創期にふさわしい教育計画や教育構想について、討議がもたれた。なかでも国文科の特色ある性格づくりに議論が集中した。既定の計画にもとづく前期の授業を終了し、幼児教育科と共同の普平ゼミを終えると、国文科としての独自性を生かすさまざまな計画・方策が求められたのである。

そこで取り上げられたのが、共同研究ではなく個人研究による日本語と日本文学に関する卒業研究の実施である。上田女子短期大学の卒業研究は、全国の短期大学のなかでも珍しく、その成果についてはすでに幼児教育科で証明済みである。「二年間という短い短大生活だからこそ、大学で学んだ成果を一つの論文に仕上げる喜びを学生に与えてやってはどうか」というのが教授たちの考えであった。

優れた研究内容は広く公表へ

さて、卒業研究を実施すると同時に、その一環として「上田女子短期大学国語国文学会」が誕生したのである。国語国文学会は、教師と学生が一体となって構成し、国文科としての研究意欲を刺激して研究を充実させ、卒業研究から幾編かの優れた論文を外部に発表し、なおいっそうの教育と研究の充実を図ろうとするものである。

この発表の場として、総会や研究発表会以外に機関誌の発行が強く要望されたのである。五十九年五月にその準備は完成した。

機関誌の発行にあたって、二つの大きな目的が決められた。

①教授と学生が一体となって学会を構成し、国語国文学に関する研究意欲を高め、お互いに切磋琢磨して研究を充実させる。

②卒業研究の中から幾編かの優れた論文を学外にも発表し、なおいっそうの教育と研究の充実をはかる。

会則をつくっていくにつれて、総会や研究発表会だけでなく、機関誌を発行して記録することにした。機関誌の名は『学海』と命名された。一年を待たずして「上田女子短期大学国語国文学会」の準備はほぼ終わった。

第一回の総会は昭和五十九年七月十二日に開催された。役員、年間行事予定などを審議し、承認された。役員には次の者があたることになった。会長に塚田清策教授、副会長に小松忠志教授、幹事に大島富朗助教授・天野文雄講師、監事に福沢武一教授、学生幹事は唐沢千代子、大野恵美子、原田薫、依田佐智江、出浦君子、高野敬依子、矢島園子、宮本裕子のみなさんである。

年間行事予定に①総会、②研究発表会、③読書会、④会誌の発行を決めた。

このあと福沢武一教授による講演「私の万葉―その発端と終末―」が行われた。

第二回総会は六十年七月四日。五十九年度の会計報告と活動報告、六十年度の活動予定報告のうち、この年四月から着任した西尾光一学長の講演「学問に志した頃」が行われた。

多彩な研究大会プログラム

第一回研究大会は六十年二月二十日、第一部が研究発表、第二部に卒業研究発表、第三部は茶話会の三部構成で行われた。

第一部は午前十一時、塚田教授の挨拶のあと、中山渡教授の講演「伊東静雄の評価をめぐる」とにはじまり、第二部の五十九年度卒業研究佳作発表は、①柳沢隆子さんの「若き日の鏡王女―人と作品」、②伊沢恵里さんの「覚一本平家物語の忠度像」、③田中真紀さんの「宮沢賢治の童話文学」、

④唐沢千代子さんの「学校唱歌から童謡へ」、⑤中島秀子さんの「王維の自然観」など、きわめて完成度の高い研究発表であった。

また、第二回研究大会は六十一年二月二十日に開催され、講演は三田英彬教授の「文化原理と近代の文学―泉鏡花を軸にして―」。六十年度卒業研究佳作は次の五編だった。①林部さち江さんの『和泉式部日記』における―女―について、②北沢良子さんの「弁慶説話の成立と展開」、③水出一美さんの「天草本平家物語における表現と語法」、④大坂容子さんの「斜陽―その運命への素描」、⑤大口美穂さんの「森鷗外―舞姫」と密かな反抗」

以後会長は六十三年度から中山渡教授、平成二年度から井出賢次教授に引き継がれている。

研究大会は一年生たちに知的刺激を与え、卒業研究のテーマを発見したり、研究方法への示唆を与えてくれる貴重な場になった。研究大会が終わったあとの一年生たちは、目立って顔つきが変わっていく。目つきが真剣になり、「卒業研究は何にしようか」と、考えはじめる。発表する先輩たちの姿を見ることが、大いに勉強になったのである。

上田ならではの『学海』発行

六十年三月三十一日には、研究大会の成果をまとめた待望の機関誌『学海』が創刊された。国文

科開設二年目にして、総会、研究大会、機関誌発行と、名実ともに上田女子短期大学国語国文学会が活動をはじめたのである。

『学海』は大学内だけではなく、教育実習でお世話になる中学校のほか、各高等学校にも配布された。内容は、総会と研究会の講演記録と卒業研究のなかから五、六人を選び、三十枚から四十枚の論文を二、三十枚に圧縮して掲載している。「二年間の研究ながら充実していて、感心した」という、うれしい評価が寄せられて教授たちを喜ばせているほか、「機関誌『学海』に掲載して、外部の評価を得ようという姿勢は素晴らしい」と、地元の教育界でも注目されている。

誌名『学海』の由来は、塚田清策教授が「創刊のことば」で語源について説かれている。

『学海』なる語は中国古典に見え、揚子の法言の学行篇に「百川学海而至于海」（百川海を学びて海に至る）とあって、川の水が流れてやまず海に入る。その海を学ぶ意から、学問にいそむたとえに用いられている。またさらに引きのばして、学問の広大にして限りないことのとえにも用いられている」と。

大学・短大のかずある学会誌のなかで、この誌名は、けだし至言である。

第四節——三つの文学研修の旅

自然と歴史の宝庫、信州を教材に

塩田平は緑と自然の宝庫である。上田女子短期大学は、裏の山ではキジ、山鳩、郭公などの声が澄んだ空気のなかで響いているという環境のなかにある。

校歌の作詞の依頼を受けていた作詩家の吉川静夫氏が、校歌に「山鳩郭公」のフレーズを入れたのも、じつは、この豊かな自然に囲まれた環境から取り入れたものである。

その塩田の人たちが誇りに思っているものに、次の言葉がある。

「信州に却回^{まがひ}して塩田に館^{やま}す。乃ち信州の学海なり」。これは、京都の南禅寺の開祖となった、信濃の生んだ名僧、無関普門の碑に刻んである句の一部である。

八百年以上前の鎌倉時代に残された言葉だが、この土地の人々の学問に対する理解と関心、そして塩田平にたいする誇りを示す言葉である。鎌倉は、新田義貞によって攻められて文化財ともども

ほとんど燃えてしまい、かえって塩田平のほうは戦火にも遭わず、鎌倉時代の文化遺産は鎌倉よりも多く残っているという。塩田平に「信州の鎌倉」というキャッチフレーズがついたのも、こうしたことが起源となっている。

無関普門が学んだのも、塩田平の南西に位置する別所にある寺だったといわれている。常楽、安楽、長楽のいわゆる別所三楽寺、中禅寺、前山寺などである。当時は、全国から若い僧たちが、学問や宗教を学びにこの塩田に来ていたのである。

塩田平は、文化遺産を守るといふ地域の人びとの気持ちとともに、このような「塩田は信州の学海なり」といわれた土壌、学問を大事にする雰囲気があつて、学問に対する真摯な環境をつくり出しているといえるが、古代の文献にも、塩田平と関連のある興味深い史料がたくさんある。

たとえば『万葉集』には、防人の歌にある小原オホダノトネの国造他田舎人大島が詠んだ歌をはじめ、東歌にも、塩田平に生まれた人の歌が豊富にある。

また、平安時代初期の仏教説話『日本霊異記』のなかに、上田女子短期大学近辺の話が二つ収録されている。地方の話は珍しいといわれている『日本霊異記』の研究材料が、キャンパスのすぐ近くから生まれているのだ。

貴重な文献も塩田平に保存されている。その代表的なものが、上田女子短期大学から南へ歩いて

七、八分の生島足島神社にある武田信玄の家臣団が書いた「起請文」である。これは国の重要文化財に指定されている。

起請文とは、神仏に誓って約束する文書のことである。武田信玄が地方の家臣たちに、自分に忠誠を誓わせるために書かせた八十三通の古文書のことだ、それがそっくり残っているのだ。

一、信玄様に対し、どんなことがあっても忠誠を尽くすこと。

もしこの誓いにそむいたら、梵天・帝釈天ほかあらゆる神仏からどんな罪でも甘んじてうける。

などと「熊野^{くまの}午王紙^{ごおうし}」という朱印や梵天の模様のある特殊な用紙に書かれている。もちろん、血判が押してある。

自然環境にめぐまれ、「学海」の伝統を受け継ぎながら国文学を学ぶものにとって、信州は研究材料に事欠かない。

木曾ゼミ

国文科には三つの大きな行事がある。木曾ゼミと文学散歩、そして文学研修旅行である。たとえば「木曾ゼミ」

上田女子短期大学の母なる川、千曲川。多くのひとが、千曲川といえば島崎藤村の名を思い浮か

べるに違いない。その藤村ゆかりの地、木曾路を訪ねて、国文科の一年生全員が七月に一泊旅行する。「木曾ゼミ」と呼ばれる夏期ゼミナールである。

国文科開設初年度の昭和五十八年は、幼児教育科と共通のスケジュールで昔平で行われたが、五十九年からは国文科にふさわしく、藤村を訪ねて木曾路を歩く一泊二日のゼミにしたのである。

馬籠の宿、藤村記念館、奥谷郷土館などの見学と読書会が日程の中心だが、とりわけ一日目の夕食のあとの七時から九時ごろまで二時間にわたって行われる読書会は、大いに勉強になる場である。十数人のグループをいくつかつくり、それぞれ藤村の作品のなかから文庫本を一冊選び、あらかじめ読んでくる。『春』『家』『桜の実の熟する時』『夜明け前』など、グループごとに作品は異なる。読書会の会場となるのは、学生たちの泊まる部屋である。部屋をきれいに片付けて、みんなで車座になる。真剣に、またときには笑いもおこる、といった調子で読書会は進んでいく。そして、木曾の夜はふけていくのだ。

学生たちは、木曾ゼミの読書会をするなかで、自分たちの身近なところに、こんなにも素晴らしき作家がいたという事実にあらためて敬意をばらうようになる。

「藤村は、どうもとっつきにくいと思っていたけど、しつかり読んでみて素晴らしさを認識しなおしました。本曾ゼミがなかったら、藤村をこんなにじっくり深く読むチャンスは、絶対になかつ

た。はじめは、強制的に読まされているようにいやだったけど、いまはとてもよかったなと思っています」。これは、木曾ゼミから帰ってきた、ある学生の素直な感想文である。

文学散歩

上田女子短期大学に学ぶ学生たちは、散歩感覚で文学とのさまざまな出会いを堪能することができる。すなわち、文学散歩。こんな贅沢な響きをもつ言葉がそのまま生きているのも、この大学ならではである。

「せっかく文学の宝庫の中にいるんだから、机の上の一方的なレクチャーではなく、足でいろいろな文学碑を見て回ったほうが、現実に身につくであろう」。国文科の草創期の教授たちの発案で、国文科の行事として県下に広がる文学遺跡を訪ねる「文学散歩」が生まれた。

昭和五十八年五月二十七日。第一回の文学散歩が行われた。

この日、午前八時三〇分上田駅を出発した。まず小諸の懐古園に行き、藤村記念館、句碑、火山博物館を見学の後、軽井沢に回り、若山牧水、堀辰雄、有島武郎、松尾芭蕉、室生犀星、正宗白鳥の文学碑を見て回った。以後各地を回ったが、文学散歩のこのような型が定着した。

信州再発見の旅

緑の萌える五月の文学散歩には、国文科の学生全員と教員が一緒にバスに乗り込む。日帰りのバス旅行だ。入学したてで緊張した面持ちの一年生と、二年目の文学散歩に前年以上の出会いを期待する二年生。落葉松の林がもつとも美しい初夏の一日、自然に意思の疎通や親睦がはかれる。

コースは教員たちが決める。二年続けていく学生たちのため、コース設定には毎年かなり工夫をこらしている。地元に住んでいても、その価値を見過ごしてしまふような場所を探し求めて、毎年、新しいコースを開拓していくのだ。コースが設定されると、必ず事前に一年、二年の担任四人がコースを巡ってみる。雨が降ったら昼食はどこで食べようか。徒歩で移動しても大丈夫だろうか、心配するのは、つねに学生たちのことばかりだ。だが不思議なことに、これまで文学散歩の日に雨が降ったことは一度もない。

いままで選んだコースのなかで、学生たちをいちばん驚かせたのは、六十三年に行つた安曇野の浅原六朗記念館である。総勢二百数十人で行つたのだが、一度でも来たことがあるという学生はほんのひと握り。記念館があることすら知らなかったという学生がほとんどだった。浅原六朗記念館は通称「てるてる坊主の館」。てるてる坊主の作詞者の記念館だ。

「てるてる坊主の館にはびっくりしました。歌はよく知っているつもりでしたが、その作詞者が私

たちの県出身で、あんなに立派な記念館があるなんて、まったく知りませんでした」

「安曇野にあるのは、礫山館、道祖神、ワサビだけかと思っていきましたけど、浅原六朗記念館はまったく知りませんでした」。安曇野出身の学生ですら、こんな感想を語る。

「その気になりさえすれば、いくらでも勉強できる。私たちはもつと郷土のことに関心をもたなければ……」というのが、すべての学生の印象である。

西尾学長も、郷土についてこう語っている。

「長野県は文学研究の理想郷ですね。ここでは、それこそ路地の石までも見る者に何かを教えてくれるような気がします」と。

学生たちがつくるガイドブック

木曾ゼミ、文学散歩、文学研修旅行には、学生たちがつくるガイドブックが使用される。クラスで作成委員を選び、資料を集め、自分たちで原稿を書く。作業の分量は多いが、どちらもほぼ一週間ほどで仕上げてしまう。

木曾ゼミのガイドブックをつくるのは、一年生である。ページ数は三、四十ページ。藤村の作品の簡単な紹介や木曾路の観光案内風のページなどがある。集めてきたパンフレット類を切り抜いて

糊ではったり、イラストを添えたり、楽しみながらの手づくり。本文も手書きで、印刷も学生たちだ。

文学散歩は、教員が設定したコースをもとに二年生が担当する。約二十ページほどだが、コース案内あり関係資料ありで、年を追うごとに完成度は高くなっていく。「はじめのうちはイヤだと思っていたけれど、実際つくってみると、予備知識が豊富になって、何だか得をしたような気持ちになりましたね」とは、初めてこのような仕事を経験したという学生の感想だ。というのも、行く直前に配られて読むより、豊富な資料を選択しながらつくりあげるだけに、その予備知識はだれよりも深いからだ。

学生たちは手づくりのガイドブックを片手に木曾路をまわり、文学遺跡を訪ね歩く。国文科の学生とはいえ、日頃、郷土の文学遺跡や文学碑を注意深く見る機会は多くはない。学生たちにとって文学散歩は、郷土を再発見するまたとないチャンスになっていたのである。「教科書でしか知らなかった伊藤左千夫や斎藤茂吉の歌碑が長野県にあることを初めて知りました」と、学生たちは感激した面持ちで話す。

一方教授も、「学生たちがこんな環境のなかで勉強できるのは、本当に幸せだと思えます。でも放っておくと気がつかないことが多い。学生に強引だと思われようが、連れていくだけの価値はあ

る」と語る。

文学研修は古都めぐり

「国文科ができて一年目、二年目の学生に、なんとなく寂しい思いをさせてしまった」

教授たちは、新設して二年目までの学生たちを旅行に連れて行ってあげられなかったことを、とても残念がっている。文学研修旅行が初めて行われたのは、三年目の昭和六十年のことだ。国文科の一年生が毎年十一月に、吉野、飛鳥、奈良、京都方面を巡り、日本の古典から近代文学までの関わりのある史蹟・建物・神社・仏閣・芸術作品などを訪ねて晩秋の古都を巡る、三泊四日の旅である。「上古から近代まで、どの時代に関心をもっている学生も満足できるように、時代にこだわらず、あらゆる文学遺跡を見て、肌で感じてこよう」。これが文学研修旅行の目的である。高校生が修学旅行で行くような、京都、奈良巡りとは一味違う。ワンランク上の古都を楽しめるコースを設定している。

六十年は学生がまだ少なく、参加者は学生が約五十人と担当教員二人であった。バス一台で朝七時前に出発した。バスは三重県を通り、八時間ほどで奈良に着く。室生寺、長谷寺を回り、その日は吉野泊まり。二日目は斑鳩の里から飛鳥を一巡りして午後は自由行動。その日は奈良に泊まる。

三日目は浄瑠璃寺から大津の三井寺を見て、紫式部が『源氏物語』を書いたといわれる石山寺を訪れ、比叡山を經由して京都に泊まる。最終日は自由行動。そして夕方、帰路につく。

コース選びにアイデア満載

文学研修旅行は、年々質的に向上している。二年目の六十一年は、一年目の反省から、長谷寺参拝を二日目にして、初日のスケジュールをゆるやかにした。四年目の六十三年には学校行事としてすつかり定着した。参加した学生は百十五人と二倍以上になって、バスも三台連ねた。

学生たちも先輩たちの残した記録を見て、綿密な自由行動の計画が立てられるようになった。それまで全行程がバス移動だったが、京都までの往き帰りだけをバスにして、京都、奈良での移動は全部電車や路線バスに切り替えた。奈良から京都へ移動するときは、学生たちの大きいバッグだけトラックで運ぶといった教授たちのアイデアで、学生たちは、より身軽に自由に、何でも見て歩けるようになり、大喜びであった。

普通の旅行では行けないようなところを自由に丹念に見て回り、肌で触れてくるのが文学研修旅行のテーマである。そのテーマにもっともふさわしいコースが、自由行動である。学生たちにとっても、いちばん待ち遠しい一日である。

文学研修旅行の直前ともなると、学生たちもちかけてくる自由行動のコースの相談で教授たちはたいへんだ。奈良、京都それぞれに自由行動の時間があるが、教授と学生と一緒に行動することもある。この文学研修旅行の発足当時から、三田英彬教授、天野文雄助教授とともに推進力になってきたのは、京都の大学を卒業した塩入秀敏助教授。観光コース、修学旅行コースからは東大寺から西に歩く佐保路や東山山麓の山道をガイドして、学生と一緒に足が痛くなるまで歩いたこともあるという。

自由行動のコースは、自分たちが行きたいところを最優先するだけに、スケジュールを事前に相談された教員が、びっくりしてしまうほどスケジュールの大きい計画もある。

また、「万葉の夢とロマンを体験したい」と、突飛な計画を相談されたこともあった。

うつそみの人なるわれやあすよりは

二上山をいろせとわがみむ

〔万葉集〕二卷一六五 大伯皇女

処刑された大津皇子が二上山に葬られるとき、姉の大伯皇女が弟を偲んで詠んだ歌である。その歌に感動した学生が、「大津皇子と姉の大伯皇女を偲びに当麻の二上山のふもとまで行き、二上山に登りたい」と、二上山登山計画を立て、ある教員のところへ相談に行った。教員は学生に「それ

は、ちょっと無理かもしれないから、下からながめて、『二上山を弟世とわがみむ』と口ずさんでみたら」と、なだめたという。

文学研修旅行でもガイドブックを準備するのだが、こちらは参加する一年生全員が一ページずつ書いてきた手書きの原稿を、そのまま印刷し一冊にまとめる。どんなところを中心に見聞したいかを書く学生、京都の年中行事、名所旧跡を丹念にレポートする学生もいる。なかには、「おみやげ案内」を事細かに書いてくる学生もいるが、教員たちはその学生をとがめるようなことはしない。自由がいちばんなのである。

原稿の分量も年ごとに増え、初めは五十ページ程度だったものが、六十三年には百三、四ページにもなっている。ページが多くなるごとに、文学研修旅行への学生たちの期待もふくらむいっぽうなのである。

晩秋の古都でロマンを求め、学友と朝まで語り明かす文学研修旅行。国文科の卒業生たちの思い出の宝石箱のなかで、ひとときわ輝く宝石の一つであるに違いない。

第三章 明るい学園生活の源泉

第一節―スポーツ文化にも特色

バレーボール部、初出場で初優勝の快挙

上田女子短期大学のバレーボール部は、大学のバレーボール関係者だけでなく、全国の実業団の有力チームからも注目されている。そのデビューは華々しかった。

昭和五十三年五月、北信越大学バレーボール選手権大会に出場する。そして、四年制大学の並みいる強豪を破って、なんと、初出場で初優勝の栄冠に輝いたのだ。参加校は、新潟、富山、石川、福井、長野五県の四年制大学五校、短大五校の合わせて十チームだった。

バレーボール部は、五十三年に初出場、初優勝の快挙を成し遂げてから平成四年までの十五年間で、次のような成績を残している。

北信越大学バレーボール選手権大会で、春、夏合わせて優勝十八回、準優勝五回だ。全国私立短大大会は六十年から三年連続三位入賞。全日本大学女子バレーボール選手権（インカレ）はベスト

十六に二回。このほか県内の地方大会での優勝は数知れない。

これは、燦然と輝く成績である。しかも、北信越大会は、新潟、富山、金沢、福井、信州といった四年制大学が対戦相手である。最高学年が二年生という短大のハンディキャップを考えれば、まさに驚異的な記録である。このバレーボール部の優勝は、学内に感動の輪を広げていった。「バレーボール部に負けてはいられない」と。

そして、連日、体育館で気合いの入った練習を続けるバレーボール部の姿は、他のクラブの活動にも大きな影響を与えたのである。

カップを飾って活性化を図ろう

実はこの年、上田女子短期大学はじまって以来、学内に初めて優勝カップと賞状が飾られたのである。北野理事長が「この学校にはカップがないのですか」といつてから、わずか半年後のことである。それはこうだ。

あるとき北野理事長は、教職員に、「この学校にはカップも賞状も何もないのですか」と聞いた。いまでこそバレーボールの上田女子短期大学として全国に名をとどろかせているが、当時、正真正銘、学内にはカップも賞状も何ひとつなかった。

対外的な活動の証明でもあるカップや賞状が、なによりも学生を活性化する源泉になる。

北野理事長は、「スポーツで、この学校の特色をつくろうじゃないですか。バレーボールか卓球をやつてはどうですか」と、もちかけた。黒岩光生助教授は自分自身のバレーボールの経験を生かすためにも、キッパリと、「では、バレーボールをやります」と、言い切つた。それからハイレベルの大学バレーボールリーグへの挑戦がはじまつた。

本格的なチームづくりは、大会の二ヵ月前の三月からはじめられた。選手集めから大学内でのバツクアップ体制の整備、特待生制度の導入まで、いずれをとつても苦難の連続であつた。

チームができると、ただちに一日六時間から七時間の猛練習を続けた。三月にチームを結成してからの一ヵ月間は、毎日、午後四時半から九時、十時ごろまで練習した。

優勝の秘訣は入学前の体力づくり

バレーボール部のチームづくりは、毎年、三月からはじまる。高校の卒業式が終わると、まだ入学前の新一年生たちが新二年生との合同練習に参加するためにやつてくる。五十六年入学の橋詰弘美さんは、入学前から合同練習に参加した一人だ。

「練習に参加するのは入学してからだと思つていましたから、春休みに練習しろといわれたとき

は、びっくりしました。練習では体力づくりのためにバーベルや腹筋をやり、苦勞した記憶がありません」

北信越大学の春季大会は五月。技術的にも精神的にも、高校と大学のバレーボールでは雲泥の差がある。二ヵ月足らずの間に、新一年生を大学バレーボールの水準までにレベルアップさせなければならぬ。新一年生を育てつつ、急ピッチでチームづくりを進めるのだ。その間の練習時間は、平日四時間、土曜日五時間だ。初出場、初優勝という輝かしい伝統というプレッシャーに潰されそうになることがある。が、「プレッシャーなんかは負けてたまるか」と、白いボールを思いっきりアタックする。こうして部員たちは鍛えあげられ、チームは着実に強くなっていくのである。

だが、全日本大学女子バレーボール選手権のベスト8に入るという目標は、いまだに達成されていない。ベスト8に進出できる日がくることを信じて、信州のちょっと小柄な魔女たちは、きょうも猛練習に励んでいる。

もとより、北野理事長のねらいは、大学にカップを飾ることではなかった。クラブ活動のヒーローをつくって、低迷しているクラブ活動にカツを入れることが真のねらいだった。そのねらいは、バレーボール部の活躍によってみごとに当たった。

これまで体育特待生を中心にバレーボール部は輝かしい成果を上げてきたが、部としての基礎も

できたため、平成四年、体育特待生制度を廃止し、一般学生に広く門戸を開放した。

着実にあげる日頃の成果

こうした連戦連勝のバレーボール部に刺激されて、他の運動部も華々しい戦績を残した。

バドミントン部は、昭和五十五年の第二十九回上田市民総合体育大会で女子ダブルス、女子シングルで優勝。さらに五十六年の同大会では、高校・大学女子ダブルスの部で優勝。五十七年には、北信越大学大会の二部で優勝し、一部入替戦へコマを進めるまでになった。

「体育館で、バドミントン部とバレーボール部の人たちが仲よくネットをはさんで練習してましたね。ずいぶん一生懸命やっているなあという印象が残っています」と、五十五年度卒業の馬場秀子（旧姓母袋）さんは語る。

硬式テニス部の創部は早く、練習にも余念がなかったが、専用のテニスコートがなかったために市営コートまで出向き、各自で練習に励んでいた。

五十八年に待望のテニスコートが学内に完成するとともに、活動も活発になってきた。ここ二、三年はめきめきと力をつけ、多くの部員を擁するクラブに成長している。軽井沢、菅平での合宿を毎年行い、上田周辺の大会はもちろん、北信越大学テニス選手権に三年連続出場するなど、記録的

な成績こそ残すに至っていないが、当面はベスト4に入ることと連続出場を切らないことを目標に練習に励んでいる。

創作舞踊部は四十三年、文化祭の文化フェスティバル（上田市民会館）で、舞踊同好生が集まって「食欲」を発表したのを契機に、翌年、創作舞踊部を結成した。その年、早くも学外活動を行い、信州大学教育学部体育科主催の創作舞踊公演「心のらくがき」に賛助出演した。以来、平成三年までほぼ毎年長野市民にも鑑賞され、好評を得ている。

創作舞踊部は創部以来、「音楽と創作舞踊の会」から「クリエイティブダンス」「文化祭」などでの公演を中心に毎年着実に活動を重ね、学内の舞踊活動の中心となつて、先陣を切つて進んできてゐる。

陸上部は六十一年、国体長野県予選で女子成年八百メートルに入賞、また、北信越学生陸上競技選手権大会四百メートルに入賞を果たし、日頃こつこつと練習をしてきた成果が花開いた。

空手道部は平成四年、国体長野県予選で成年女子型演武で優勝し国体強化選手となつた。また、北信越大会で個人組手準優勝、団体準優勝。さらに全日本大学選手権大会女子団体組手で二回戦進出を果たすなど、その活躍が目立っている。

華々しい戦績こそないが、バスケットボール部、スキー部、スケート同好会、卓球部、ソフトボ

ールクラブも部員の輪を広げ、熱気に満ちている。また、女性のゴルフ熱の高まりとともにゴルフ同好会も活動をはじめている。

クラブ棟建設成る

「四十八年に上田女子短期大学として再スタートしたころは、施設はあまりよくなかった。学生たちのクラブ室は二、三室だった。とくにクラブ活動にはクラブ室はつきものだが、わずかにプレハブの二階建てがクラブ棟としてあり、そこは、華道部、ワンダーフォーゲル部、歴史研究会などが使用していた。

そこで、「あのクラブ棟では、活発なクラブ活動は無理です。クラブ棟をつくってください」と、短大側は北野理事長に要望を出した。するとまもなく「学生たちがいちばん使いやすい場所に建てなければなりませんからね」と、北野理事長は忙しいスケジュールの合間を縫って、クラブ棟建設の下見に訪れた。

キャンパスを一巡した後、クラブ棟の建設場所をあつかりと決めた。選んだ場所は体育館のすぐ裏手だった。クラブ活動で汗を拭うタオルをとりに行くのに、これ以上の場所はないと学生たちはよろこんだ。北野理事長は、以前から「運動部があるのにクラブ棟がないのはおかしい」と考えて

いた。自らキャンパスに足を運んだのも、学生への心遣いとスポーツ活動への理解の深さをあらわしている。クラブ棟は五十五年二月に完成した。

社会では、知識だけでなく、クラブ活動を通じて培われる協調性や友情、礼儀などが大切である。そして若い大学であればあるほど、学生たちに伝統のすばらしさを教え、自信もつけさせてあげたい。こうした北野理事長の教育理念を実現するための原点がクラブ棟だったのである。その思いは教授たちも同じであった。クラブ棟建設の朗報は、またたくまに学生たちに広まった。

学生たちは、やっと自分たちの居場所ができた、みんな大よろこびだった。真新しい二階建てのクラブ棟は、学生たちの希望の象徴となった。クラブ棟には、練習で汗を流した運動部の仲間や、お琴、お花など文化系クラブのメンバーの楽し気なおしゃべりと笑い声がざざめいた。

第二節―文化系クラブも活躍

地道な活動を続ける文化系クラブ

「クラブ活動が活発になれば学園は明るくなる」。これは北野理事長の信念でもある。

上田女子短期大学のスタートと同時に学生数が増え、新生学園にふさわしく、学園内は明るい雰囲気につつまれた。学生数の増加にともないクラブの数も増え、内容も充実していった。

文化系クラブには、歴史研究会、レクリエーション研究会、ボランティアクラブ、茶道部、華道部、演劇部、漫画研究会、映画研究会、文芸部、琴研究会、ワープロ・パソコン研究会、謡曲研究会などがあるが、なかでも、地域文化の向上に大きく寄与し、後世にその名が記録されるような活動をしているクラブもある。

歴史研究会による発掘調査活動は、昭和四十九年八月、上田市諏訪形の東山国有林に所在する舟窪古墳群で行われた。この発掘調査は北野理事長の発案により、上田女子短期大学の学術研究と同

時に地域文化解明事業の一環として、學術調査を本学の出費で行われた。

調査は日本考古学協会員で上田市文化財調査員をしている上田染谷丘高校小林幹男教諭の指導で、塩入秀敏顧問を中心に進められた。五基の円墳から成る群集墳の一つで一号墳と呼ばれる古墳である。古墳は高さ三・二メートル、東西八・四メートル、南北七・三メートルで、その周囲は東西十一メートル、南北十二メートルの石積みを施した方形基壇と幅四メートル、深さ七十センチの周溝と呼ばれる堀から成っている。石室は横穴式で、メノウの曲玉や水晶の切り子玉などが出土した。七世紀後半の築造と位置づけられた。

東山は大学のすぐ裏手にあり、標高約七〇〇メートルの丘陵で、この付近には三十五基の古墳が確認されている。この東信地方では最大の規模を誇る古墳群で、信濃国造の他田氏一族の墳墓とされている。この調査は翌年の二号墳発掘調査まで行われた。クラブ員の学生たちは、その後も各地の発掘調査に毎年参加している。

レクリエーション研究会は各種行事への参加をはじめ、菅平ゼミのキャンプファイアーでは他の学生をリードして楽しい会をつくりあげていった。通称レク研の代表的な活動に「手遊び」というのがある。たとえば「げんこつ山のたぬきさん、おっぱい飲んでねんねして……」と、歌いながら手でストーリーを表現するあの遊びだ。幼児教育には欠かせない技術である。

レクリエーション研究会の卒業生で幼稚園に勤務している持塚幸子さんは、「幼稚園では手遊びが多いんです。子供を集中させるには、歌より視覚から訴えるほうが強いから、レク研での手遊びの経験は、幼稚園に就職してもお互い教えあつたりするとき助かりました」と、その体験を語る。手遊びのレパートリーは、母から子へと代々伝えられているものから、テレビの幼児番組で紹介された最新流行の手遊びまである。また、「手遊び君」と名付けて学生たち自身がつくつたりもする。もちろん、幼児教育の道に入らなくても、母親になったときの手遊びなど効果は無限大なのである。

レクリエーション研究会はまた、地域でも絶大な人気を博している貴重なクラブの一つでもある。子供会で遊びの指導をしてくれませんか、という依頼がよくくる。

六十三年夏には、地味だが着実なレクリエーション研究活動が評価されて、全国レクリエーション大会で優良団体に選ばれるという輝かしい実績ももっている。

ポランティアクラブは、社会福祉施設などの訪問を中心に活動している。随時行っているものの上田悠生寮や小諸学舎等の訪問、春の上小地区心身障害者体育大会の補助、さらには献血運動など確実な活動を続けている。

献血運動は本学教職員、学生の協力により毎年続けられてきた。六十年九月、第十九回献血推進

長野県大会において表彰された。これはボランティアクラブの長年の努力が高く評価されたものである。

クラブ員はボランティアという実践をとおして人と助け合う喜びを学びとり、物質中心の現代社会にあつて、本学在学中の二年間で得たボランティア活動の心を大切にしている。

合唱部は、その年ごとに部員数の変動はあるが、文化系クラブの一翼を常に担ってきた。最盛期には四十人を超す部員をもち、学内コンサート、大学祭コンサート、卒業記念コンサートなど、活発な部活動を展開している。

美術クラブは大学祭への出品作品の制作、学外での個展。茶道部は裏千家の先生の指導を受けながらの基礎稽古を中心に礼法の練習。華道部は、未生流の先生について週一回の研究會参加と大学祭での生花の展示を行っている。

開学以来自発的で熱心な活動を綿々と続けている演劇部は、かつて上田市民会館で公演したこともあり、いつかは大輪を咲かすエネルギーを秘めた部だといえる。

毎年、機関漫画誌『山紫水明』を発行している漫画研究会や映画研究会も大学祭に向けての活動に余念がなう。

文芸部は、『かつ歩』という冊子を、また、詩の会は詩集『星の雲』を発行し、国語研究倶楽部

や日本語教育研究会もそれぞれ会誌を発行、活発な活動を続けている。

卒業生のなかには次のような声もある。

「自分たちで書いているだけじゃなくて、新聞に載るような文章を書いたり、あるいは会社に入った人が社内報にいい文章を載せたりすれば、『上田女子短期大学の国文科を出た学生はさすがだ』なんていわれるようになるかもしれないね」。卒業生のみならず、上田女子短期大学全体からの文化系クラブへの期待は大きいのである。

また、琴研究会も年々人気を集めている。六十年は琴研究会の歴史にとって忘れ難い出来事があった。アメリカ西海岸に演奏旅行に行ったのだ。これは学外から迎えている琴のお師匠さんの縁で実現したものだ。渡米した約二十人の部員は、毎晩七時過ぎまで練習を続けた。これは、いまでも変わらない。

時代の進展とOA機器の普及に呼応したサークル活動として、ワープロ・パソコン研究会の活動もあげられる。最新式シンセサイザーの導入にともないサウンドサークルができ、バンドグループが相次いで生まれ、にぎやかな音楽を響かせている。

ぎっしりつまったカリキュラムの合間と放課後の時間を使つてのクラブ活動や同好会活動に、学生たちはお互いの心の触れ合いを求めて精いっぱい青春を謳歌しているのだ。

青春の絆はいつまでも

卒業生たちは、クラブ活動の思い出を次のように述べる。

五十七年度入学の文化部の柳沢克美さんは、「私は、華道部とレクリエーション研究会に入っていました。レクリエーション研究会では『手遊び』を覚えたのですが、卒業後とても役立ちました。華道部は、クラブ棟の二階の和室で稽古をしていたのですが、毎週正座するのがたいへんだったという思い出があります。華道をやっていたと思うのは、園児たちが毎日、野の草を持ってきてくれるでしょう。そのとき、ちよつと手を加えて生けられるんですね。やはり華道部で基礎を勉強していたからできるんですね。もつとも学生の頃はそんなことはまったく分からず、ただ楽しそうだから、というので入っただけなんですけどね」

五十九年度入学の高橋よし江さんは、陸上部創設のときの苦勞を語る。

「最初は六人で、一年生だけでした。走るのが好きでみんな集まったんです。正式なクラブではなかったのですが、陸連の登録費を払わなければ出場することができなかつたんですね。大学に入ったときは一〇〇メートルを十四秒で走るのがやつとでした。それが一年で一秒縮めることができたのです。うれしかったですね」

六十年入学の依田淳子さん（旧姓鈴木）は、「私たちのときは、時代のせいかわりプロ同好会など

機器を扱うサークルがだんだん目立ってきましたね。私は人数の少ないクラブに片っ端から入ったんです。そのなかでいちばん印象に残っているのが演劇部です。ステージで練習していると、そこからバレーボール部、バドミントン部、創作舞踊部などが練習しているのが見えるんです。練習はとも気合いが入っていて、先生や学生の声が体育館中に響いてくるのに刺激されて、夜遅くまで練習したことを思い出します」

そして、バレーボール部で練習に明け暮れた山浦清美さんは、「好きでやっていたんですけど、どうしても我慢できないほどつらいときがありました。『やめたい』という時、まわりの友だちから、『そんなことでどうするの』と励まされました。バレーボールをやっていて、いい友だち、そして仲間を得たと思います。先輩は結婚して子供がいますけど、いまもつながりがあります」

クラブ活動は、それぞれに青春のひとこまとして、いまなお彼女たちの心の奥に生きているのである。

第三節——自治会活動と学海祭

学生自治会

伝統の上田女子短期大学自治会会則第二条に、「本学は上田女子短期大学の建学の理念にのっとり、学問の自由、学園の自治のための全学生の自主的な団結により、文化・体育等にわたり、全学的及び諸部の活動を通じて、学生生活の向上、学問研究の充実、人格の陶冶を期すことを目的とする」と記されている。

自治会の組織は、評議委員会、執行委員会、常任委員会に分けられている。

評議委員会は規則の改正や審査決定を行い、執行委員会は自治会活動の全てを統轄する。常任委員会は大学祭実行・運動・文化・整美、放送、交通等のそれぞれの専門的な役割を持つ委員会に分かれ、活動を行う。

入学シーズンともなると、執行委員会にとっては最も多忙な時期となる。まず会則、行事および

サークル紹介、下宿マップ、下宿生活アドバイスなどの小冊子を作成し、新入生に配布する。さらに四月から六月にかけて学生主催によるフェスティバルが続き、活動はますます活発化する。上田市内に所在する大学が催す「上田の森フェスティバル」、県下の大学があげて行う「春風高原フェスティバル」、そして長野大学と本学合同で開催する「新入生歓迎フェスティバル」などがそれぞれある。

しかし短期大学であるため、委員を引き継いで短期間に全学生を把握し活動することは、学生にとっては、たいへんな苦勞がともなう。これら執行委員の努力と知恵により、上田女子短期大学の伝統が築かれているといっても過言ではない。

また、運動部と文化部は課外活動において大きな役割を果たしている。「クラブ活動に参加せずして学生生活を語れない」といわれるほど、正課外における学術、社会、芸術、スポーツに参加する経験は、豊かな人間性を育成するために重要な意味を持つ。

個性の成熟、社会性の発達は、集団活動の実践的な体験を通じて達成される。

学海祭に総力を結集して

上田女子短期大学の大学祭を「学海祭」という。いうまでもなく「塩田は信州の学海なり」から

命名されたものである。

学海祭は学生が、教職員と地域の人びとを大学に招いて日頃の学習の成果を披露する年に一度のビッグイベントである。長い準備期間から始まって後始末まで、学生たちは学海祭をおしてさまざまな体験をし、貴重な社会勉強をする。それはまさに青春のページである。

第一回学海祭は昭和四十九年十一月一日から五日にかけて開催された。このときのパンフレットに、「あらゆる面でマンネリ化しつつある大学生活のなかから、たとえ小さなことでも何かを求めて脱皮をしようと望みをもち、『ぬげだせ』というスローガンをかかげる」と、その精神を謳いあげている。

従来、「大学祭」は併設の本州大学と共催で行われていた。学校法人上田女子短期大学の誕生とともに学生自身の大学祭にのぞむ意識も大きく変わった。実行委員長アピールに「短大全学生の力によって、学海祭というひとつの物語が創りあげられようとしています。みんなで感じ、創造し、そしてみんなで楽しみ苦しむのが本当の意味の大学祭ではないでしょうか」というように、大学祭を自らの手で開催しようと張り切る決意が如実にあらわれている。これは取りも直さず、全学生の力を結集して、新しい学園づくり立ち向かおうとする姿勢にほかならない。

子供の広場を実践の場に

地域に根づく大学を目指し、地域社会との交流を重視する上田女子短期大学の具体的な教育方針がうかがえるものに、第一回学海祭から今なおつづいている「子供の広場」がある。当時、教育実習を指導していた関克彦教授の発案・指導により、近隣の幼稚園や保育所の園児、小学生、福祉施設の人たちを招待して、日頃、教育実習でお世話になっているお礼の気持ちを込めて、餅つきやゲームなどで一日を楽しんでもらおうというものである。

大学の入口にかまどを造り付け、餅米をふかす。広場の中央に据えられたウスから搗きあげられていく餅に目を輝かせて見入る子供たち。それは、たいへんほほえましい光景である。

若い世代への生活文化の伝承というねらいは、みごと学海祭のなかで花開き、毎年企画のなかですっかり組み込まれるようになった。いまでは地域の人たちにもお馴染みの催しとなり、毎年多くの人がびとが集まり、話題になっている。

昭和六十三年度の第十五回学海祭のテーマは「己れ燃やして友照らせ」。西尾学長は素晴らしいテーマだと評して、「学園で精一杯の努力をして自己を燃えたさせ、友情に生きる。本当にたのしい。私は学生時代、禅堂で『脚下照顧』の札を見て強く心を打たれた。いま、その折の感銘を再び新たにした。『脚下照顧』は塩田に学んだ学問僧の修行に深い意味でつながっているが、このテ

「テーマはもつとも新しく大きい」と巻頭に寄せている。

学海祭では、学外に講師を求めて講演会が開かれるが、この年、身体障害者福祉司で県下障害者の輝ける星として活躍している平林八郎氏により、「人間とは何か」のテーマで行われた。人間とは何か、いま一度福祉の原点をみんなで考えようというものだった。

なお、第一回（昭和四十九年）は作家の早乙女勝元氏が「こどもたちにやさしさと強さを」、第二回（五十年）は評論家の羽仁説子氏で「女性として、母親として社会での生き方」、そして第十回（五十八年）は本学講師の柳沢重也氏で「欧州の社会福祉問題について」、第十四回（六十二年）はルナ子供相談所所長の岩佐京子氏による「テレビと牛乳」などの講演会が開かれている。青春のエネルギーを凝縮した学海祭は、内容も年ごとに充実の度合いを深めている。コンサート、バザー、展示、演劇、ダンスパーティー、模擬店と、各サークルやクラスがアイデアを出し、総力を結集して行われた。

六十三年はまた、新しい呼びものが登場し会場の人気をさらった。それは、日本のお祭りにつきものの和太鼓である。太鼓というものは、いったんやりだしたら病みつきになる。そんなお祭り好きな学生を中心に催しものを行えば、学海祭ももつと活発になるのではないか、というのがねらいだ。

七月の学海祭実行委員会で和太鼓の演しものが確認された。九人の実行委員の有志たちは和太鼓を求めて奔走した。そのうちのひとりが、私の知っているところで太鼓をやっている人がいて、その人が教えてくれると、菅平太鼓保存会のメンバーを知らせてきた。幸い、頼んだところ快く引き受けてもらった。毎週火曜日、九人の実行委員は、講義が終わってから菅平通いはじまった。夏休みには合宿もした。学海祭の一ヵ月前になると菅平通いは週二日になり、帰宅時間も夜遅くなるほど稽古に熱がこもってきた。

十一月一日、四ヵ月の練習の成果をみせてやるのだ、と九人は、中庭の特設野外ステージで力いっぱい太鼓を叩いた。『血と汗と涙の結晶、実行委員有志による和太鼓の妙技、お楽しみください』と書かれたパンフレットにひかれ、観客が集まった。演奏が終わると割れんばかりの拍手がわいた。アンコールに何度も応えた。無事に終わった安堵感にひたった。九人は二日間で三回の舞台をこなした。太鼓の響きは他の学生たちにも心地よい興奮と胸の高鳴りを感じさせた。

平成に入り、学海祭も時代の変遷とともに様変わりしてきた。従来の展示、研究発表に加えて楽しむ要素の強いフェスティバル的なものになって、学生のほか、地域の人びとの多数の参加もあり、盛り上がりを見せている。

広告とりも社会勉強

学海祭のパンフレットは年々立派になっていく。企業や商店の広告も目立つようになってきた。広告とりにも歩くのも学生たちである。広告は学海祭の貴重な財源となるが、それ以上に社会勉強のよい機会であり、社会的常識を身につける絶好のチャンスである。頭を下げることを知らない学生、お願ひしますと言うのが照れくさいという学生たち、といわれるが、そんな社会体験をする良机である。しかし、そんな学生もパンフレットが出来上がったときの喜びよりは、見ていても感動するところ。

広報活動も活発に行われるようになった。全学あげての学海祭である。広く地域の人や他の大学の仲間たちが見に来てくれないと寂しいものになってしまう。そこで学生たちは、宣伝カーを繰り出し、地域の人びとに学海祭の開催を知らせて回るのである。「恥ずかしいと言いながら、宣伝カーでのごうごうす嬢ぶりは決まっています。街でチラシ配りをしたとき、恥ずかしさから大人に配ることができずに、小学生に一生懸命配っている学生もいましたよ」と教員の一人は語っていた。

第四節——遠隔地の学生に寮・下宿を確保

学内に建つ紫苑寮

新しい紫苑寮が完成したのは昭和六十一年四月。場所はキャンパス内である。

鉄筋コンクリート二階建ての真新しい紫苑寮は、部屋数は十六室、各部屋に二人ずつ入るルームメイト制で定員は三十二人。校舎まで歩いて二分という距離にある。全室暖房完備で、室内にはベッド、机、椅子、衣装ダンスが備え付けられている。

遠隔地からの学生のために下宿や寮の確保にはどの大学でも苦勞しているが、上田女子短期大学では、学生寮のほかに大学周辺の良心的な下宿を確保して、学生に提供し続けている。六十一年に新しい寮が完成するまでは、キャンパスから歩いて十二、三分の生島足島神社の境内にある建物を借り受けて学生寮としていた。寮の名称は同じ紫苑寮で、ここでも十六室で、二人ずつ入居していた。

寮は自治寮で、運営はすべて学生の手任されている。寮長、副寮長のほか、会計、代議員の役員を選出する。役員のなかで、もつともたいへんなのは食事係。みんなの希望を一週間分集めて献立をつくるのだが、寮生三十二人の好みをまとめるので、決まるまでがひと苦労だ。決まった献立は寮母さんに渡される。もつとも寮生に食欲不振の心配はまるでない。寮生の辞書にダイエットという言葉はないからだ。

大学側は、学生たちが安心して寮生活を送れるように、教員と学生係・厚生係の事務職員で構成される厚生学寮委員会を組織している。教員はおもに学生の生活相談を、事務職員は施設について担当している。

ある寮生の一日から

キャンパス内に住む寮生はどんな一日を送るのか。国文科二年、久保田直美さんのある一日を作文からみてみると。

A.M. 8・10。私の一日が始まる。でも始業の8・50にはしつかり教室に滑り込んでいた（寮生は二分もあれば学校へ行けるのよ）。

朝から厳しい講義。3、4時限目の「ワープロ実務」はなんなくこなし、寮へ帰ってうれしいお

屋。5、6時限の空き時間には涼しい寮でお昼寝をと思つたけど、あさって好きな「近世国文学演習」があるから下調べをしないと。

図書館で資料を見つけ、ついでに『歴史をさわがせた女たち 外国篇』を借りた。7、8時限の「言語学Ⅰ」はひたすらノートをとつた。校内は涼しいが外は暑そう。9時限目は図書館司書課程の講義を受け、帰寮。夕食は寮母さん手づくりのちらしずし。フルーツサラダもおいしい。

まだ六時。「日曜日には軽井沢の高輪美術館へ行こう。ついでに高原文庫で堀辰雄展も」と、おしゃべりにはずみがつき、仲間がふえる。

お風呂、掃除をすませ、十時には全員食堂に集り夜礼。その後、自室でまた、日曜日の相談、試験対策、就職関係の情報交換と、夜はなかなか終わらない……。

「短大生専用」の下宿

寮に入れなかつた学生たちは、大学が斡旋する下宿に入る。大学が下宿確保でいちばん苦勞したのは五十八年、国文科の増設にもなつて、学生が一気に増えたときである。下宿の数がとにかく足りなくて、係の職員は大学の近所で住宅を新築する家があると聞くと出かけて行き、下宿用の部屋もつくつていただくようお願いして回つた。

その後、徐々に地元にも下宿専用の建物が新築されるようになったが、それを上田女子短期大学学生の専用下宿として他校の学生は入れないように頼んだ。その代わり学生を安定的に斡旋することにした。それが定着して現在に続いている。

専用下宿はもちろん、下宿のほとんどには権利金、敷金などはない。厚生学寮委員会は全下宿共通の「入居心得」を定め、大家さんにも協力してもらって、規則正しい下宿生活を送れるよう配慮している。さらに、年数回、下宿の学生代表と厚生学寮委員との話し合いが行われる。双方が問題点、要望を話し合い、改善に努めている。また、年に一回、大学側と大家さんとの話し合いもたれる。席上お互いに希望を出し合い、より良い下宿生活づくりのために知恵をしぼっている。

下宿は一カ所に平均五人から十人のところが多く、部屋は個室でも食事は共同で炊事することもあり、お互いに料理づくりを教えあったりするので、上達も早くレパートリーも広がるといって、学生たちは自分自身の成長ぶりに驚いている。

下宿の多くでは、時代に合わせてどんどん住みやすく改善されている。そこには、損得抜きで上田女子短期大学の学生のことを考えてくれる、地域の人びとの優しい愛情がある。

第四章—教育に終わりはない

第一節―地域に根ざす大学を目指して

地域への奉仕活動母親大学の実り

上田女子短期大学が、地域に根づき地域とともに歩む地方大学として高く評価されている対象に、昭和四十五年にスタートした「母親大学」があげられる。母親大学は、短大の基礎づくりを意識を燃やしていた創設時に、地元への奉仕活動の一環として行われたものである。中央教育審議会が「生涯教育」への体系整備の検討を叫びだしたのは、翌年四十六年六月のことである。中央教育審議会がいう生涯教育という言葉が生まれる前に、上田女子短期大学ではすでにその先鞭をつけていたわけである。母親大学を開こうと提案したのは、当時、本州女子短期大学学長代行鈴木鳴海であった。

当時、上田市塩田公民館でこの種の講座が開かれるのは、初めてのことと、全国的にみてもまだ珍しいことだった。早速、藤沢紫朗助教授が中心となって準備をはじめた。教授会が何度も開か

れ、十分に内容が検討された。母親大学のテーマは、受講者の生活に密着していることを最優先して、あくまでも受講者の立場にたつて選定された。上田市をはじめ、小諸、佐久とその周辺の教育委員会、公民館に、「大学から講師を派遣するから、公民館と共催して母親大学を開催してはいかがですか」と呼びかけ、講座のテーマの一覧表を添えて送った。

生涯教育という言葉がまだ広まっていない時代に、「婦人の教養を高め、地位向上をはかろうという大学側の主旨を、農村地帯の母親たちがどれだけ受けとめてくれるだろうか」と一抹の不安があったが、公民館では社会教育、なかでも主婦を対象にしたテーマを求めて模索していた頃だった。案内状を出してみると、大きな反響があった。元臼田町公民館館長の三石晴夫氏は、「企画はあの時期にあつて、婦人に対する画期的な生涯教育の実践であつた」と当時を振り返り語っている。

公開講座の産声は塩田母親大学

初年度は第一回塩田母親大学として、地元塩田公民館と共催して、農閑期と大学の休暇が重なる八月五日から九月十日にかけて行われた。教授たちは、夏休みを返上して講演にあたった。

第一日のテーマは「女性の社会的地位の変遷」（講師は鈴木鳴海学長代行）、第二日は、実技をまじ

えた「母と子の体力づくり運動」（木内盈治助教授）と「子供を育てあげてみて」（長井保助教授）。第三日は「物価は誰がきめるか」（鈴木鳴海学長代行）。第四日「くらしぶり」（溝上泰子教授）と実技「リズムに合わせて踊りましょう」（氏家正江助手）の六講座が開講された。

参加者は百人を上回り、二十代のお母さんから初老のご婦人まで幅広い層にわたった。講座はいずれも大好評であった。塩田母親大学が大成功に終わると、その噂を聞きつけて各地域の公民館からも開講の依頼が寄せられ、翌年の開催に引き継がれていった。孫の手を引いて参加した姑さんは、「昔は、農作業や家事労働に追われながらも大勢の子を育てたものです。いまのようにモノが豊かで、自由な時代のほうが、かえって子育てはむずかしいですね」と、感想をもらしていた。

一方、母親大学の一環として、各公民館では独自のテーマで講座が開かれた。

特色のある幼児教育を実践する上田女子短期大学が、地域と交流し、地域に奉仕しようとして取り組んだ講座は「幼児学級」である。もちろん幼児をもつ母親を対象に開いたもので、たとえば、上田市城南公民館では五十三年に「豊かな心をもつ子供に育てるために」のテーマで九月から十二月までの間に七回開催された。

このほか各地で開かれた講座名だけをあげてみても、育児教室、乳幼児学級、家庭学級、家庭教育講座、婦人生活学級、成人学級、老人学級、老人大学教養講座などがある。当時、東部町公民館

館長として母親大学を企画し、生涯学習の啓蒙に情熱を注いできた小山定雄氏は、「上田女子短期大学が母親大学開催に各地の公民館に協力してきたことは、地域の大学として地方文化発展のうえからも大きな役割を果たしている」と評価している。最近では、父親・母親を対象に、にこにこ子育て学級と名づけ、「父親・母親の役目」（竹内要教授）や、長野県警察本部の青年層を対象にした「地域振興と自然環境（上原貴夫講師）」の講座など、階層の幅に広がりをもてきた。

バスに揺られて主婦の一日入学

上田女子短期大学として新たなスタートを切った昭和四十八年十月二十二日は、教職員にとって忘れがたい一日である。この日午前六時、高原野菜の産地で名高い南佐久郡川上村の主婦たちは、大型バス一台を借り切り上田女子短期大学へ向かった。忙しかった高原野菜の収穫を終え、農閑期は勉強で心を耕そうと、村の公民館と婦人会が婦人学級の一つとして一日入学を計画したものである。いままで講師を派遣しつづけてきたが、母親たちを大学に迎えるのは初めてのことである。学校全体が歓迎したことはいうまでもない。川上村は、以前から教職員たちが頻繁に母親大学で足を運んでいたところである。

この日、午前中は職員が校内を案内した。「これからの娘さんはみんな短大くらい出るんだろう

が、私はこんなところで勉強したくてもできなかった。女もだんだん幸せになりますね」と、参加者の一人は子女があこがれているキャンパスをひと回りしたあと、羨望の眼差しで、こう語った。

見学のあと鈴木学長の「子供の願いと親の願い」と題する講演が行われた。教室を埋めた川上村の母親たちは、しきりにうなずきながら学長の講演に聞き入った。鈴木学長の講演は熱気を帯び、母親大学の歴史に残る名講演となった。母親たちは午後、塩田平の文化財を見学した後、満足してバスに乗り込んでいった。

乳幼児学級から老人大学教養講座まで

地域の社会教育活動を活発にし、内容を充実させる。その必要性は分かっているけれども、どうすればいいか分からない、という地元の公民館員にとって、この母親大学は希望の星となった。社会教育活動に対して全面協力してきた上田女子短期大学の地域に対する貢献度は計り知れないものがある。元塩田公民館館長の平野勝重さんは、「塩田地区での社会教育活動は、上田女子短期大学のおかげで内容が充実したものになったと確信している。また、地域に開かれた上田女子短期大学の存在を再認識させられる思いであった」と語っている。

母親大学とは別に、各公民館が独自に開催する講座に講師だけを派遣するケースも相次いだ。講

座の内容も多彩をきわめている。たとえば、現代の高齢化社会に対応して、よりよい心身の健康と人生の尊さを探り、老人の生きがいを追究するという老人大学教養講座では、「郷土の民話について（塩入秀敏講師）」のテーマで開かれ、婦人生活学級では、「望ましい家庭のあり方（鈴木鳴海学長）」、乳幼児学級では「子供と遊べる音楽あそび（北村恵子講師）」などの講座が開かれた。

母親大学の年間平均講座数は約四十を数えるにいたった。

学内開催の婦人大学へ

日本の経済成長が一段落するころ、各公民館では受け身の講演講座から積極的な各種教室が開かれるようになってきた。上田女子短期大学の母親大学も開講して十年を迎え、地域にすっかり定着していたが、多くの婦人がより豊かな創造性を求め、目を外に向けはじめた新しい時代の流れのなかにあった。

そこで、従来、公民館と共催で開催してきた母親大学を見直し、今度は大学が主体的になって講座を開けないだろうか、という声があがってきた。大学の態勢もとのつてきたので、図書館や音楽室、体育館などを使って、大学の特色を生かした講座を開いて、地域の人たちが上田女子短期大学に来て有意義な一日を過ごすこともできるようにはできないだろうか、というものである。鈴木学長が

再び音頭をとって、教授陣の協力のもとに、こんどは「婦人大学」の開講を提案した。

前年まで母親大学の委員長を務めた林幸四郎教授を先頭に、準備は進められた。専門分野を分かりやすく講義することを主眼に、実技を中心にしたプログラムが組まれた。

第一回婦人大学は、昭和五十五年六月四日から七月十六日まで、毎週水曜日の午前と午後に一講座ずつ、二回を一講座として全部で六講座が開かれることになった。

一日目の午前は「婦人の運動と健康」で講師は黒岩光生助教授。午後は「合唱の楽しさ」で関口信雄講師がそれぞれ講座を担当した。このほかのテーマを掲げると「健康、体操」「楽しい水彩画の描き方」「音楽史上の女性音楽家の生涯」「水泳」である。講師はいずれも上田女子短期大学の教授陣である。学内の授業の合間をぬって時間編成する形になったため、講座を担当した教員たちは、頼んだ係りのほうが恐縮するほどの忙しさになったという。

婦人大学の開講案内は、有線放送のほか附属幼稚園の「幼稚園だより」に載せるほか、教育委員会にも直接出向くなどして広く案内した。

声楽家でもある関口講師による「合唱の楽しさ」に参加したママさん学生のなかには、子供連れの人や遠く長野市からきた人もいた。みな、久し振りにピアノに合わせて、大きな声で歌を歌った。

男性から「私にも聞かせてほしい」

婦人大学の初期のころの参加者は、附属幼稚園の園児の母親が中心だったため、和気あいあいとした雰囲気であった。開講して三年目からは市の広報紙にも案内が掲載されるようになり、回を重ねるごとに婦人大学への入学者も増えていった。

そして五十八年に国文科が新設されると、婦人大学の講座内容も大きく変わった。文学、絵画、婦人問題、創作舞踊などがとり入れられ、いちだんと多彩なものになった。たとえば、国文科の教授陣も講師として加わった同年の第一講座は、中山渡教授の「小諸時代の島崎藤村」が行われた。中山教授の話を一言も聴きもらすまいと熱心に耳を傾けながら、ママさん学生たちはメモをとり続けた。

五十九年からは、塚田清策教授による「ペン習字・毛筆習字」「文章の書き方」などの実用講座、三田英彬教授による「川端康成の文学的生涯と『雪国』」などの講座が加わった。また、はじめの試みとして、講義の内容をもとにした参加者同士の話し合いの場を設けたところ、思いがけないほど好評だった。

婦人大学は、六十年に発展的に解消されることになった。というのは、国文科教授による文学の講座が開講したことをきっかけに、男性も婦人大学に参加するようになったからである。男性から

の講座への問い合わせの電話も入るようになった。もう、婦人の枠を取り払わなければならない時代を迎えたのだ。

国文科も参加して教養豊かな公開講座

そこで昭和六十一年から婦人大学は「公開講座」と名称を変え、幼児教育科、国文科の両分野について幅広い内容の講座を開くことにした。この年のテーマは、「愛しながらの闘い」(松田幸子教授)、「萬葉のすばらしさ」(福沢武一教授)、「能・世阿弥　そして信州」(天野文雄助教授)、「近松を読む」(大島富朗助教授)、「いじめっ子　いじめられっ子」(竹内要教授)、「源氏物語の世界」(西尾光一学長)と、それぞれの学科の特色を生かした内容となった。定員四十人のところに九十人の参加者があつた。

参加者の年齢層は大学生から七十歳後半にいたる人まで、まさに老若男女を問わず広まっていた。「大学で講義を聴くのははじめて」という人もいれば、「犬養孝の萬葉集の講座を聞いたことがあるが、こちらの学校の先生は同じ歌をどう解釈するかを知りたい」などという専門家はだしの人もある。小諸、佐久、坂城などといった遠方からの参加者もいる。教室のなかは、そんな人たちの熱気があふれていた。

より質の高い講座を求めて

年を経るごとに、講座の質的向上が目立つようになった。その結果、公開講座にたいする受講生からの注文が多くなった。たとえば、心理学の講義にたいしてある主婦は、こんな感想をもらした。「二時間という時間ではどうしても消化不良になりがちです。心理学の知識のとぼしい私たちにとって、専門用語の解説も大切かとは思いますが、もっと現実に即した、たとえば『嫁と姑』『近所づきあい』の問題などにも焦点をあて、より深く掘り下げていただくと、もっと分かりやすいかと思いました」

また、「二年、三年と続けて通いましたが、こま切れのようにいろいろなものを与えていただいても、私たちはただ聞いているだけで、たいへん残念です。年ごとに掘り下げてもらえれば、たいへんありがたいです」などの意見もあった。

「受講生が希望しているのは、いかなれば高度な内容ですね。受講生は安易な内容やごまかしは通じません」とは、公開講座担当事務職員の言葉である。

公開講座の企画は、こうした点にも細かな神経を使う。このような受講生の要望に応えたいという努力は講座の選定や内容の充実にあらわれて、受講者数は年々増加し、好評を得ている。

県民カルチャーとしての「開放講座」開講

昭和四十五年に「母親大学」の名称のもとにスタートした上田女子短期大学の「生涯教育」は、「婦人大学」から「公開講座」と名称を変えながらも着実に実績を重ね、地域の多くの人びとに親しまれていった。

その実績をかわれて平成二年度、三年度の公開講座は、長野県教育委員会から生涯学習の推進校としての委嘱を受けて、県教育委員会との共催による県民カルチャー「上田女子短期大学開放講座」が開講された。これは二年間の継続事業として計画され、七月から十一月までの間に二十一回、二年目は二十五回開かれた。

二年間の統一テーマは「生きる」。さまざまな角度から人間の生きる意味を受講生とともに考える講座内容とした。

初年度の題目と講師は「子どもとともに生きる」(竹内要教授)ではじまり、「生きることと教育」(天田邦子助教授)、「たのしい中国語」(信州大学大学院留学生)、「クリエイティブダンス」(飯田正江助教授)、「硬式テニス(初心者)」(犬飼己紀子助教授)、「西行のうた『地獄絵をみて』より生と死」(中西満義講師)、「シューマン作曲歌曲集『詩人の恋』に聞く愛と歌」(関口信雄教授)、「俳人『白雄』」(矢羽勝幸教授)、「コミュニケーションの自由」(清水正男教授)。

二年目は「文学と人生と『小説に描かれた人間の生き方』」（井出賢次教授）、「口承文芸と民族のころろ」（塩入秀敏助教授）、「死を生きる『辞世の日本文学』」（坂野信彦教授）、「世界経済のあれこれ」（福沢誠講師）、「たのしい中国語」（中国特別研究生）、「ストレス社会に生きる」（前田基成講師）、「余暇先進国スウェーデンに見るリゾートライフ・老後の生き方」（柳沢重也講師）、「中国女性について」（信州大学大学院留学生）、「陶印づくり」（周東清芳助教授）、「ドラマ教育」（北村恵子教授）、「余暇をみつめる」（大銅己紀子助教授）、「信州洋学者群像『転換期に生きる』」（大橋敦夫講師）、最後は「生きる」とと哲学」（松田幸子教授）。

二年間に四十六講座、計九十時間におよんだ開放講座には、若い卒業生から七十歳を超えたひとまで延べ千八百名の男女が参加し、かつてない好評のうちに終了し、この四十六講座の内容を集大成した『生きる』が発行された。

流暢な日本語で聞く中国語講座

「婦人大学」を「公開講座」と改称する前年の昭和六十年七月、一般公開講座の一環として「初級中国語講座」（定員三十人）が新たに開設された。この年の四月、中国から特別研究生として招いた二人の中国人留学生が講師となって行うものである。講師の名は田雁さんと孫蘇さん。二人は七月

十九日から二十七日までの間の日曜日を除き、毎日交代で午前中の二時間、教壇に立った。

講座の初日は田さんが教壇に立った。受講生は二十代から七十年代、主婦や元大学教授など幅広い層の人びと三十四人が集まった。

「一生懸命教えますので、みなさんもういろいろ教えてください」と、講師役の田さんが挨拶した。田さんは人に教えるのは初めてのこととあつて最初のうちは緊張気味だったが、授業の後半には落ち着き、冗談をいう余裕も出てきて、堂々たる先生ぶりをみせた。

授業のさいごに「草原情歌」をみんなで歌った。田さんが「アリガトウ」と挨拶すると、受講生たちは口ぐちに「シェー、シェー(ありがとう)」といいながら、拍手を送った。

「忘れていた中国語を思い出すことができて、とても懐かしく思います。日本と中国がまた身近になった気分です」と、仕事で長い間中国に住んでいたという七十歳の会社役員は、こう感想を語った。

翌六十一年の「初級中国語講座」は高磊さん、葛薇さんの二人の留学生が講師となつて開かれた。二年目は定員の倍の約六十人が申し込むという盛況ぶりであった。そこで、六十二年から「第三回たのしい中国語講習会」と名称を改めたのを機に定員を五十人に増やしたのだが、それでも定員をオーバーする五十四人の応募があつた。この年の講師は邢麗娟さんと馬慧麗さんがあつた。

受講者たちの中国熱はますます高まり、「もう一度、子音の発音を教えてください」などと、熱心な質問が飛び出すほどだった。

六十三年の「第四回たのしい中国語講座」は、過去三回の講習で受講者の語学力もあがってきたので、初級、中級の二つのクラスに分けた。両クラス合わせて四十五人が受講した。受講者のなかにはカセットテープに講義内容を録音する人もあらわれるほど熱心に学習していた。初級クラスは趙笑燕さんの担当で基本的な発音から簡単な会話まで行い、中級クラスは信燕さんが担当し、中国語で自己紹介ができるほどまでに腕をあげ、教室はいちだんとごやかな雰囲気にも包まれていた。

ミセス・オダの英語による特別講座

平成二年十一月八日、上田女子短期大学で開学以来初の英語による講演会が開かれた。講師はアメリカ合衆国ハワイ州の教育長マーガレット・Y・オダ先生。オダ先生は北野理事長と親しい間柄にある教育学博士である。演題は「アメリカにおける教育事情」。アメリカと日本の教育制度を比較しながら将来の教育を展望するもので、約一時間半にわたって通訳つきで行われた。

講演のなかでオダ先生は、日本には環太平洋という広い視野にたって軍備縮小や環境保全について学ぶカリキュラムが必要であること、日本の高校の受験制度は見直しが必要であることなどを提

案された。また日本の教育制度に触れ、「日本では努力や協調の大切さを教え、しかも学力の面で成果をあげているのでアメリカでも注目している」と評価し、これにたいしてアメリカでは個性重視の教育方針がとられていることを障害児教育の体制などを交えて紹介された。

さらに「アメリカは日本の小学校制度に学ぶべき点が多い。しかし、もつと創造性を發揮できるプログラムがあつてもいいのではないか。そのため、今の日本の高校入試制度は弊害になつてゐる」とも指摘された。

充実した内容と開学以来初めての英語による講演会とあつて、学生たちは「在学中のよい思い出になつた」と、たいへん好評であつた。

小さな碑に寄せる大きな期待

コミュニティー・カレッジという言葉がまだ日本に浸透していなかつた昭和四十年代から母親大
学を開講し、五十五年から上田女子短期大学のキャンパスで婦人大学、六十一年からは名称を変え
公開講座と、上田女子短期大学は、つねにアグレッシブに生涯学習というテーマを追い続けてき
た。

試行錯誤を繰り返して、毎年検討を重ねて何らかの工夫をこらしている上田女子短期大学の公開講

座は、まさに手づくりの味である。地域に根づく大学という大学創設時の目標は、もはや達成されたといっても過言ではあるまい。しかし、塩田平の小さな大学にかける地域の人びとの期待は、ますます大きくふくらんでいる。「その期待に応えるためには、過去に満足している時間などない」とは、教職員の一致した意気込みである。

高校生に夏期音楽講習会

上田女子短期大学が地元の高校生から期待されている催しに、夏期音楽講習会がある。毎年七月下旬の三日間、夏休みを利用して、保育・音楽関係への進学希望者、また、音楽に興味や関心のある高校生を対象にして開いているものである。昭和四十五年に地域サービスの一環として開講された母親大学のいわば高校生版で、こちらは学生募集のPR性を秘めている。

受講コースは「ピアノ初心者コース」と「音楽コース」の二通り。ピアノ初心者コースは、保育関係へ進学を希望している学生のためのもので、ピアノが初めてという学生も受講できる。講習は六十二年から導入したミュージック・ラボラトリー(ML)を使ったグループレッスンと、ピアノによる個人レッスンが中心である。

一方、音楽コースは、将来、音楽関係を志望する学生向けの講習で、受講科目は共通科目と専門

科目があり、共通科目はソルフェージュ(聴音・視唱)と声楽(課題曲)、専門科目はピアノまたは声楽の個人レッスンという構成である。

講習会は三日間行われる。その間、学内の音楽施設全てが開放されるので、合わせて三十数台備え付けられているピアノは、ほぼ一人に一台の割で自由に使って練習することができる。

こうした参加者が翌年春、晴れて上田女子短期大学の門をくぐるケースが多い。

一足お先に「わたしは短大生」

「あなたの可能性を先どりしてみませんか。信州の鎌倉といわれている塩田平の夏の一日、上田女子短期大学で学園生活を体験してみませんか。将来の進路決定を間近にひかえたみなさんにとって、この『一日体験入学』は、きつと有意義なものとなるでしょう。さわやかな風と明るい陽ざしのなか、本学のすべてを見てください」

上田女子短期大学はこんな呼びかけで、昭和六十二年七月三十一日、一日体験入学を始めた。体験入学は、女子高校生であればだれでも受講することができる。上田女子短期大学をはじめ、短大へ進学を予定している高校生に、大学の学生生活、また、大学で実際にどんな授業をしているのかを模擬授業を通して体験し、進路決定の判断材料に役立ててもらおうというねらいで始めたもの

で、長野県内の短大では初めての企画であった。

この体験入学は、「一度大学を見に行きたさ」という高校生の要望と、「キャンパスを自分の目で確かめてほしい」という大学側の考えが一致して実現したものである。

初年度は、八十人を目標に募集したところ申し込みが相次ぎ、幼児教育科百十九人、国文科五十八人の計百七十七人という、予定の倍以上の人数が参加した。高校生がいかに進路決定に真剣に取り組んでいるかを物語っている。参加費は無料で、以後毎年実施されている。この一日体験入学の参加者が上田女子短期大学に進学する割合は夏期音楽講習会より多く、初年度は幼児教育科六十八人、国文科三十人で、入学率五五・四パーセントだった。以後、入学率は毎年五〇パーセント前後にのぼり、この企画は大成功である。

体験入学は朝九時半から十一時まで総合ガイダンスが行われ、短大生活全般と学生生活、就職などについて説明を受ける。十一時から十二時までは入試ガイダンス。幼児教育科、国文科の学科別に、それぞれの特色やコース制について説明を聞いたり、ビデオで学校行事の具体的なようすなどを知ることができる。

午後は幼児教育科と国文科に分かれ、キャンパスの見学。その後は模擬授業である。二つの学科に分かれて、本学教授による実際の講義を受ける。

幼児教育科では、初年度は幼児教育科の特性ともいふべき「児童福祉論」について学科長の竹内要教授が講義を行い、六十三年度は電子ピアノの実技指導を兎束淑美助教授が行い、ワープロの実技指導も両学科の希望者が受講した。

国文科では、六十二年度は中世の能を取り上げ、世阿弥について天野文雄助教授が、六十三年度は古文書を通してみる小林一茶論を矢羽勝幸助教授がそれぞれアカデミックな内容の講義を行った。

以後体験入学は毎年続けられているが、幼児教育科では教育学、心理学などに関する講義と保育実習指導、国文科では文学論、国語学に関する講義と、それぞれ専門的に内容の濃いものとなっている。

体験入学終了後、希望者を対象に個人相談が行われる。個人相談では受験生と教職員がゆっくりと相手の心の糸をたぐり寄せるように会話が進んでいく。高校生たちには短期大学という未知の世界を覗くことができると、大好評である。

第二節—地域社会から国際社会へ

熱烈歓迎、中国人留学生

昭和六十年四月八日。この日、二人の若い中国人女性が上田駅に降り立った。北京市生まれの田雁さんと南京市生まれの孫蘇さんである。田さんは北京市人民政府外事弁公室、孫さんは中国人民対外友好協会北京市分会でそれぞれ通訳として活躍している。

二人は、上田女子短期大学国文科の特別研究生、いわゆる留学生として初めて来日したのである。これからの半年間、他の学生に交じって日本語や日本の習慣を学んでいくのだ。

上田駅で出迎える学生から花束を贈られ、握手を求められた二人の目は輝いていた。熱い歓迎にたいして二人は「アリガトウ」と、しっかりと発音で繰り返した。「とても景色がきれいなところですね」、「長野県の人は親切ですね。友達をたくさんつくりたいです」。大きなスーツケースを片手に長旅の疲れもみせず、二人は満面に笑みをたたえ、歓迎に応えた。

中国人留学生の受け入れが決まったのは、五十九年六月のことである。

長野放送の社長でもある北野理事長は、日中友好放送・教育関係者訪中視察団の団長として、北京市を訪れた。その際、中国人民対外友好協会北京市分会の王笑一会長から留学生の受け入れを要請された。若いときからニューヨーク、ハワイ、インドネシア、サウジアラビアなど、世界中をまたにかけて活躍してきた根っからの国際派の北野理事長は、留学生受け入れの要請をふたつ返事で承諾した。そしてその年の暮れ、「中国人民対外友好協会」に留学生の招聘状を出した。現地からの連絡によると、かなりの人数の留学希望者が集まったという。そこで、人選は同友好協会があたり、二人の女性が決まった。それが田さんと孫さんであった。

留学生が中国を出発してから帰国するまでの費用はすべて上田女子短期大学が負担している。さらに滞在中の安全面を考慮して、障害保険、健康保険に加入するなど、留学生受け入れに際しては細心の注意を払っている。

「彼女たちにとって留学する機会は、一生のうち一度あるかないかだろう。わずかな期間だが、日本にいる間は不自由な思いをすることのないようにしてあげたい」という北野理事長の温かい取り計らいによるものだ。その結果、留学生たちの生活環境は非常に恵まれている。彼女たちの下宿は、大学が契約している一般学生と同じ下宿の一室で、日本の平均的な生活が送られるようにと、

冷蔵庫、テレビ、扇風機などが備えつけられている。

六十一年には高磊さんと葛薇さんが来日した。高さんの出身地は天津市、葛さんは常州市出身。二人とも中国の四年制の大学で日本語を学んだのち、中国人民対外友好協会を通訳の仕事をしている。高さんは「敬語や助詞のほかに、できるだけ幅広く日本語を学びたい」といい、葛さんは「日本の女性の生活や行動が中国人とどう違うかを詳しく勉強したい」と意欲まんまんだった。

六十二年は邢麗娟さんと馬慧麗さん。二人は北京市で通訳の仕事をしていて、研究論文は邢さんが「現代敬語の研究——日本で感じた敬語の問題について——」。馬さんは「現代敬語および女性語の研究」

六十三年は信燕さんと趙笑燕さん。信さんは北京市国際交流服務中心通訳を務めている。研究論文は「現代日本語の敬語研究——問題敬語について——」。趙さんは北京市月壇中学の日本語教師で、来日した留学生のうち初めての中学校の教師である。研究論文は「日本語の助詞、助動詞の表現機能についての研究」

平成元年度は王麗華さんと許金華さん。二人とも北京市月壇中学の日本語教師。王さんの研究論文は「現代日本語の敬語研究——敬語の仕組みと問題敬語について——」。許さんは「助詞の表現機能の研究——主として格助詞について——」

一年おいた平成三年度は張琪さんと丁衛東さん。張さんは北京市月壇中学の日本語教師。研究論文は「中国人学生の日本語アクセント傾向―誤読タイプと指導効果の分析」。丁さんは北京市国際交流服務中心通訳で、研究論文は「現代日本語敬語の諸問題―使用調査分析による研究」

平成四年度は杜佳さんと婁宝蘭さん。杜さんは北京市西城区政府外事弁公室通訳で、研究論文は「現代日本語敬語の研究―言語生活における現実と理想」。婁さんは北京市月壇中学の日本語教師。研究論文は「現代日本語助詞『に』の表現について―混同しやすい諸助詞との比較を中心に」であった。

一年間に二人ずつ、八年間で合計十四人の留学生を受け入れた。いずれも清純な中国人女性ばかりである。

成果は日本語の研究論文

中国人留学生たちの面倒をみるのは「中国特別研究生受入委員会」のメンバーで、受入委員の一人はつねに事務室に控えている。留学生は「オハヨウゴザイマス」と朝、必ず事務室に顔を出し、ここで教員や外部からの連絡を受ける。帰る前も必ず事務室に立ち寄り、翌日の打ち合わせをする。

留学生たちが外部から受ける招待の折衝にあたるのも委員の大事な仕事である。上田女子短期大学に留学生がきていることを知って、「塩田平の親善大使を招待したい」という話がたびたび持ち込まれる。かつて中国に旅行した折、通訳のお世話になった人たちからのものだ。こんな電話の応対も委員の仕事である。

留学生たちが半年間に学ぶ学習量はたいへんだ。帰国するまでに五、六十枚の研究論文を書かなければならないからである。母国の大学や大学院で日本語を学び、卒業後通訳や日本語教師として活躍するなど日本語のベテラン揃いではあるが、その彼女たちにしても日本語はむずかしいという。たとえば、中国語には敬語と女性語・男性語の区別がない。だから、教科書を読んでも敬語の感覚をつかむのが容易ではないのだ。研究論文の作成指導は当初、青木千代吉教授が担当していたが、その後、中西満義講師、大橋敦夫講師が当たっている。

研究論文の出来栄は、「これが留学生の論文か」と目を見張らせるほどの力作揃いだという。六十年の留学生の孫さんの場合は、日本語の過剰敬語についての論文であった。ある日、テレビを見ていたとき、市川団十郎が襲名披露の挨拶回りで、「七代目市川団十郎を襲名させていただきましたので、今回そのご披露のご挨拶に伺わせていただきました」といった。そのセリフの「ばかりいねいさ」について、突っ込んだ内容の論文を書き上げたのである。一方の田さんは女性語につい

て研究した。山崎豊子の作品『白い巨塔』を読破し、女性語をすべて洗い出して、分類、考察するという力作であった。

留学生たちには「百聞は一見に如かず」で、可能なかぎり日本の風俗・習慣に触れられるように計画が立てられている。手近な塩田平の文化史跡めぐりをはじめ、菅平の山開きを兼ねたお祭りへの参加、地域の人たちとの交流など、すべて一般学生と行動を共にするように組み込まれている。また、古都・京都、奈良には生活指導にあたる委員が案内役を兼ね、三泊四日の見学旅行を行って
505。

充実した留学生生活

留学生の下宿での生活ぶりも家族の一員と少しもかわらない、という。下宿の大家さんは、「初めのうちは抵抗感や戸惑いがありました、いまでは新しい留学生が来るのを待ちわびるほどです。日本語も達者だから言葉に不自由しません。留学生が来たときと帰るときには、下宿の全員が集まって会食するのが習慣になっていますよ」と語る。

中国からの留学生の受け入れは、学生たちをはじめ教職員にも少なからず影響を与えた。広い視野をもつことがいかに大切かを、彼女たちは教えてくれたのだ。

六十三年度の留学生信燕さんは、『私は上田女子短大生です』と題して、次のような作文を残している。

「ずっと前からあこがれていた留学が、やっと実現しました。これは、北野先生のご招待で来られたわけで、今年はもう四年目です。北野先生をはじめ、上田女子短大の先生たちの思いやりをいただいて、私たちは充実した留学生生活を送っています。学校で日本の学生たちと一緒に授業を聞いたり、運動をしたりして、ほんとうに楽しいです。自分は外国人とは思いませんでした。この新しい環境の中で、短大生の一人となり、大変うれしいと思っております。これに対して十分な勉強と良い成績を返さなければなりません。今までの留学生たちは、帰ってからみな職場の中堅となりました。私も努力して、自分のささやかな力で、中日両国の人民の相互理解を深めるために、がんばりたいと思います。(信燕)」

日本語教育特別講義

留学生を受け入れて六期目の平成三年度から、新たに「日本事情」、「日本語教授法」の特別講義が大橋敦夫講師を中心に設定され、スタートした。この年の留学生は張琪さんと丁衛東さん。

「日本事情」講座は、有志の日本人学生が参加して日本に関する事柄をディスカッションしていく

もので、テーマは各担当教師が出し輪番で講義する「輪講」で行われる。「輪講」は四年制の大学にはあるが短大では少ない。

留学生はひととおり日本語に精通しているので、日本のようすをさらに知る機会になる。ディスカッションで、知っていると思っていたことが意外と知られていなかったことが明らかになる。また、日本事情とはいえ日中比較文化の考察という方向にも展開されるなど、「日本事情」講座のもつおもしろさがここにある。

張琪さんは、「日本で、言葉だけを勉強するのは留学ではない。日本の歴史も伝統文化もきちんと学びたい。したがって、『日本事情』の講義にとっても興味をもっていた。『日本事情』が大好きだった。そのおもしろかった講義内容や楽しかったディスカッションなどは、いつまでも私の心に残るだろう」と、「日本事情」の講座の感想を書き残している。

また丁衛東さんは、「中国と日本は、二千年にわたる友好往来と文化交流の歴史をもっています。そして昔、日本は中国から強い影響を受けました。今日まで、普通の日本人の生活のなかに風俗習慣などの面で、その影響がまだ残っています。中国と日本は、共通点が多いといえるでしょう。ただし、いくら似ていても、中国と日本は絶対に「同じだ」とはいえません。日本は日本、中国は中国です。教科書だけを読んだ私にとって、日本社会に入ってみることは必須のことです。教科書と

普通の暮らしは違うでしょう」と、日中文化を比較した感想文を残している。

「日本語教授法」は、日本語を対象にした言語習得理論・教授理論・教授法などについて学ぶもので、中国における日本語教育についての分析をふまえ、有志学生の参加を得てモデル・レッスンを行的、実践的な教授法を考案するもの。「日本語教授法」にも将来、外国人に日本語を教えたいという目的をもった日本人学生が参加し、日本語・中国語の構造を見詰め直す勉強をしている。たとえば、日本語にはあるが中国語にはない助詞の問題。それをどのように整理して教えてあげればよいか。または、分かりやすくなるかといった検討をする。

「留学生たちは日本語ができるので、教えるという部分はさほど多くはない。文法問題にしても、それが合っているかどうかというより、より洗練された表現を知りたいのだから、この場にはどちらがふさわしいかという高度な内容を討議しています。また、留学生が外国語として日本語を学ぶときの工夫を見直すことは、日本の学生自身が外国語を学ぶうえでもたいへん参考になっています」と、大橋敦夫講師は語る。

北野理事長は中国からだけでなく、いづれアメリカからも大学生を受け入れ、上田女子短期大学の学生を交換留学生として派遣したいという夢も持っている。「地方の小さな短期大学から、国

際的視野をもつ若者がたくさん育てば、こんなうれしいことはない」と語る。

平成四年五月、北野理事長は北京市教育局から金帆奨（教育功労賞）を授与された。金帆奨は教育功労者に贈られるもので、日本人としては初めての受賞者である。受賞の理由は、昭和六十年以来八年間にわたって北京市の日本語通訳ならびに日本語教師十四名を特別留学生として受け入れてきたことが評価されたものである。

第三節——就職活動

短大は花嫁修業の場ではない

短大生の二年間は短い。希望に胸ふくらませて入学してきた一年生は、夏休みが終わると、コース制の選択、就職、という大きな目標に向けて突き進む。二年生になると同時に具体的な就職活動を開始することになる。短大生が四年制の学生に比べて入学当初からはっきりした目的意識をもっている、といわれる理由の一つでもある。

「就職特別講座では、繰り返し就職活動の基本や応用について指導を受けてきたが、実際には何から手をつけたらよいのか分からないまま、七月から活動を開始した。就職活動がこんなにも気を使ひ体力を使うものだとは思わなかった。八月には会社訪問や試験があつたが、準備不足のためうまくいかなかつた。九月がいちばん精神的にまいってしまった時期で、食事がのどを通らなくなってくる。これも、夏休みの間の単独行動という孤独な活動のためだ。周りの情報に振りまわされず、

真実を見極めることが大切だ。そのためには、会社訪問をなるべく多く行い、いろいろな違った業種の会社を訪問して比べてみるべきである。そのうち自分に適した業種がみえてくる。大事なものは、自分が何をしたいかを頭に入れて職業の選択をするべきである」とは、六十二年度国文科卒業生、中島由美さんの報告である。

三者一体の就職指導委員会

「私にかぎったことではありませんが、就職を担当していると、国文科と幼児教育科合わせて一学年三百人ほどの学生の名前と性格や出身地など、自然に頭のなかに入ってしまうですね。二年生の後期ともなると、ほとんどの学生を覚えてしまいます。そうしますと、求人先から突然問い合わせの電話がかかってくる、すぐ対応できるようにする必要がありますね」。就職指導委員会の委員長を勤めた塩入秀敏助教授の話である。

就職指導委員会を中心とした上田女子短期大学の就職活動は、学生・家庭・大学が緊密な連絡のもと、三者が一体となって強力に推し進めている。これは、地元とともに生きる上田女子短期大学の特色の一つである。では、どのように進められているのか。

まず、二年次の四月、就職にたいする心構えを説く「就職特別講座」から開始される。特別講座

は年間を通して開かれ、講座の内容は履歴書の書き方から手紙の書き方、小論文・作文指導とつづき、会社訪問のノウハウまで懇切丁寧に行われる。一方、クラス別に担任による個人面接が行われ、学生の能力・適性の把握をもとに、きめ細かな就職指導が行われる。さらに六月にクラスごとに行われる保護者を対象にした就職懇談会が開催される。

学外での就職開拓活動も活発で、学生の出身市町村とその地域にある企業・団体・官公庁・保育所・幼稚園・社会福祉施設などにたいする文書による求人依頼、訪問による就職開拓を中心に行われる。学生の出身地が長野県を中心とした地域からさらに広がりを見せているが、それらを拠点に可能なかぎり訪問開拓に当たっている。その結果、求人との問い合わせに、該当する学生がいなくて対応に苦慮するという、うれしい悲鳴をあげることもしばしばである。

大学のこのような後押しと家庭の理解・協力に支えられ、学生自身も積極的に就職活動を行いながら進路を決定していくが、ここ数年の進路状況をみると、これらの活動がとくに功を奏しているといえる。

不況下も克服した就職開拓

地域に根づき、地域に役立つ大学を目指す上田女子短期大学は、卒業生の就職状況からみても、

その教育成果のほどがうかがえる。

五十一年度の入学定員の増加にともない、五十年年度の卒業生一三九人に対し五十一年度は一八二人、五十二年度は一八七人と増えていくにしたがい、就職指導委員会は体制をいっそう強化して指導にあたった。しかし、五十年代に入ると同時に日本経済はドルショック、オイルショックと続く経済不況に見舞われた。上田女子短期大学といえども世の中の影響をさけることはできない。多くの業種にもみられることだが、経済環境が悪くなると企業従事者の定着率が高くなり、就職希望者の道が狭くなる。卒業生の増加に加えての、狭き門の出現となったのである。

幼児教育科についてみると、昭和四十年代の高度経済成長時代の終結とともに保育所で働く保育者の離職率が低くなり、回転周期が長くなった。あわせて出生率の低下による乳幼児の減少で、保育者の需要が落ち込んだのである。これは幼稚園も例外ではなかった。

しかし、卒業生が増えた五十二年度は保育所への就職者は減少したものの、数年来増え続けている社会福祉施設への就職者が前年に比べて倍増するほど上昇した。これは県下六カ所の保母養成校のなかでもトップを示すもので、社会福祉に挺身しようとする学生の真剣な姿のあらわれで、上田女子短期大学の特色の一つとして特筆に値するものである。

ユニークな試みの父兄懇談会

五十三年度は経済不況がより深刻化し、就職戦線にいっそうの暗雲が立ち込めた。この就職難時代に対して就職指導委員会では広く情報収集につとめ、いち早く学生たちにその状況を認識させ、同時に初めての試みとして父兄懇談会を開催したのである。この懇談会開催は功を奏し、例年三月上旬に七五パーセント程度だった就職決定率が一挙に八五パーセントという好成績をおさめた。これは保育所など回転率の低い専門職を避け、一般企業へ就職の道を求めていったことがあげられる。

一方、新しい分野の医療事務関係への進出を見逃すことはできない。医療事務関係へは従来から就職者があつた分野だが、五十三年の不況期に小児科医院や幼児専門の歯科医院への就職が目立ちはじめ、以来、幼児教育科の専門性が生かされるとして、これらの医院で幼児教育科の卒業生が歓迎されている。

六十年度になると保育所、幼稚園、社会福祉施設、音楽教室など専門技術を生かした就職者は好調で、三年連続上昇をつづけた。なかでも音楽コースの専門職就職率は家事手伝いを除き一〇〇パーセントに達する勢いであつた。

その後も、保育所、社会福祉施設、幼稚園関係への就職者は前年度と比べると、社会福祉施設へ

の就職者は年々増え、とくに社会の要請もあり増加している。

国文科では六十年三月、初の卒業生を送り出した。日本経済の回復期のなかという環境も幸いし、第一回の国文科卒業生は希望者が全員就職という、幸先よいうれしい結果だった。

就職先は地元東北信が多く、上越地方出身者もそれぞれ地元就職することができた。受け入れ側は短大の卒業生が会社のイメージアップにつながる、と歓迎しているが、「新しい上田女子短期大学の国文科生は、なかでもフレッシュウーマンのイメージにぴったりだ」という声も聞かれたほどだ。

この年、五十八人の卒業生のうち五十四人が就職をしたが、金融・保険、製造・販売業、マスコミなどの一般企業が九〇パーセントを占め、難関を突破した官公庁の三人をはじめ、学校・農協などで一〇〇パーセントとなった。一般企業はいずれも評価の高いトップ企業ばかりで、国文科一期生の就職先として高く評価されている。

六十一年度には就職活動時期が四年制大学卒業予定者については早められたのたいし、短大卒業予定者は据え置かれるという措置がとられたために、一般企業・専門職就職ともその影響をまともにかぶったことになったが、教職員・学生・保護者の三者一体の就職活動によって、この影響を回避することができた。

いちだんと強化・充実した就職指導体制

好成績をおさめている就職状況ではあるが、企業や大学をとりまく社会情勢は年々変貌している。就職戦線も、いつまでも売り手市場のままではいられるとはかぎらない。そこで、平成元年度から就職指導委員会の委員長に就いた井出賢次教授のもとで、就職指導体制の抜本的な見直しが行われ、さまざまな角度から検討が加えられた。

まず、就職相談室に選任の相談室長を置き、就職指導が組織的に行われるように組織の充実を計った。スタッフの増員と同時に就職関係の資料室を整備した。その結果、求人情報の効果的収集と情報提供が充実した。資料のなかには、先輩たちが受けた就職先の受験記録も含まれている。就職情報は得やすく、より有機的になった。なかでも、就職相談室の増員によって全学生にたいする個人面接が、よりきめ細かに行われるようになったことは大きな成果だった。

一方、学生にたいしては、就職内定時期の繰り上げに対応するために、従来二年次の前期から行われていた「就職特別講座」を、一年次の後期から行うように綿密な計画のもとに練り直した。講義は一週一時間、計十七時間である。

講座内容は、就職に関する心構えの育成からはじまって就職決定にいたるまでを一つの姿にとらえて綿密に組み込まれている。さらに、講義を受け身で終わらせず積極的になるように、授業の終

わりに感想文を書かせたり筆記試験の実施なども織り込んだ。

講義には企業の採用担当者を講師として招き、「企業はどのような人材を求めているのか、採用試験はどのような内容のものをを行うのか」、また卒業生にも講師として協力をお願いして、「就職希望先の選択から受験・決定までのプロセス・就職決定後から入社まで」といった具体的な経験を通じた実践的な講義内容が組み立てられている。

就職指導体制の見直し、就職特別講座の繰り上げ実施の結果、学生の就職にたいする意識も高まった。早くて正確な就職情報の提供とときめ細かな就職指導が相俟って、二年次から就職に直結した活動ができるようになった。

地域に根づき、地域に役立つ大学を目指す上田女子短期大学では、就職に関して一つのルールが確立されている。就職が内定した場合、第二希望・第三希望の試験の結果を待たずに、速やかに就職の意思を表明する、ということである。その結果、学生は就職先の選択に真剣になる。企業側は安定した人材が確保できる、企業と大学の結びつきが緊密になる、内定が早い段階で決まるなど就職状況に明るい話題を提供することになる。

さらに、昭和六十二年度から導入したコース制が就職活動のうえにもあらわれ、就職先で好評を博していることを付記しておく。

第四節——大学の発展を支える同窓会

同窓会会報『わかば』の創刊

上田女子短期大学二十年の歴史のなかで、大学の発展を支えているひとつに、卒業生で組織する同窓会がある。

同窓会は昭和四十四年三月卒業の本州女子短期大学の第一期生五十六人で発足した。四十八年に上田女子短期大学同窓会と名称を改めたが、以来、会員相互の親睦を図り母校の発展に寄与する目的のもとに、地味ではあるが着実な活動を行っている。

会員は会則第五条に記すように、通常会員は本州女子短期大学卒業生と上田女子短期大学の卒業生とし、特別会員に上田女子短期大学教職員によって構成されている。

平成三年度の卒業式には第一回生の二人がわが子の卒業を祝って参列し、親子二代の同窓生が誕生した。また、姉妹の会員もふえてきている。

平成四年度の卒業生で、会員数は四、五五〇余人となった。

発足当時は毎年八月に定期総会を開催していたが、出席者数のうえで総会の意味をなさないという反省から、『同窓会会報』を発行して総会に代え、会員間の意思の疎通をはかることにした。そして同窓会会報は、上田女子短期大学の移行にともない、シンボルマークの「わかば」にちなみ、『わかば』と命名され、同窓会発足七年目の五十年十一月五日付けで創刊された。

成果をあげた児童文化研究集会の共催

昭和五十三年は、同窓会は上田女子短期大学とともに記念すべき年であった。まず四月に、上田女子短期大学が念願としていた附属幼稚園が開設されたことである。同窓会ではこの記念すべき母校の教育事業を後援して、遊戯室ステージの段帳を贈呈した。

また八月、児童文化研究所が卒業生を対象として児童文化研究集会を開催するにあたり、同窓会に協力を要請した。この要請にたいして同窓会の役員会では同日のプログラムに同窓会総会を盛り込み、組織をあげて全面的に協力することとした。この研究集会には一〇〇人を超す参加者があり、たいへん意義のある一日であったが、これは取りも直さず、同窓生がいちように児童文化へ高い関心を示していることを物語るものであった。

研究集会は三つの分科会に分かれ、保育現場からの事例報告を中心に行われるのだが、ごく数例を除き、事例報告者のほとんどは同窓会会員が行い、同窓会の事業としては特筆すべきものであった。研究集会への共催は第一回から五十七年の第五回まで行われ、五十八年の第六回から六十年の第八回までは後援というかたちで協力した。なお、六十一年の第九回以降は、児童文化研究所による単独主催で「児童文化研究大会」と名称を変え、行われている。

装い新たに「わかばの会」定期開催へ

児童文化研究集会が同窓会総会を兼ねて行われることによつて、毎回多くの卒業生が参加するようになった。その結果、いままで見合せていた総会が定期的に開催されるという、思わぬ効果をもたらすことになった。そこで同窓会は、五十九年から「わかばの会」として独立して開催されることになった。

「新たに十一月三日の文化の日に、『第一回わかばの会』の発足と定例総会を計画しました。『わかばの会』とは目新しい活字かと思われませんが、『本年は同窓会としての独自の活動を』という意見があつて、とまどいしましたが、十分検討を重ねた結果の計画です。私どもは学窓を去つてから母校を訪れるチャンスが少なかったことが反省されます。第一回の卒業生から本年度卒業の方々まで

の、各年代層の私どもが、私どものすべてを見守ってきてくれた短大へ集まって、自らの青春を思い、泣き笑いを語り、そして生涯学習への機会を持ちたい、と計画したわけです。十一月三日は大
学祭の真っ只中ですが、短大側の積極的など協力のお返事をいただきまして、新しい分野への第一
歩と考えたわけです」（会長小林弥生『わかば』昭和五十九年十月十二日 第八号から）。

この日、「みんなであそぼう」という副題をつけて、体力とは何かを考えながら、「子どもと一緒に健康と体力づくり」と、模造紙やカラーテープ、針金、麻ひもなどを使い「しつぽを作ろう！」が和気あいあいのうちに行われた。

「第三回わかばの会」では特集として「思い出作ろう」と題し、退職された前学長の鈴木鳴海先生と六人のなつかしい先生方をお迎えして語り合い、その後、懇親会が盛大に行われた。

平成四年でわかばの会も七回を数え、今後この会を軸に、同窓生の和を広げ、また、生涯学習の場として発展させたいと願っている。

エピソード

「教育のことは教育のプロである現場の先生方に全部任せてあるんです」

北野理事長は、上田女子短期大学を語るとき、いつもこの言葉を口にする。実際、上田女子短期大学の教職員は、日々の教育を行ううえで、特別な規制を受けたことはない。逆に、常々教職員たちにたいして、「現場の先生方の目で見えて足りないことがあったら、僕になんでもいってください。全部かなえてやれるかどうかはわからないが、できるだけのことにはやりたい」と言っている。

教育、とくに女子の教育には大きな理想とビジョンをもつ教育家としての先見性には定評がある。

昭和四十八年のことだ。北野理事長は、旧知の「歌のおばさん」こと松田トシさんを副学長として招聘した。このことはすでに触れた。その結果、応募者の数は四十九年、五十年と年を追ってふえつづけ、開学以来つづいてきた定員の枠を大幅に見直さなければならぬほどになった。そこで

五十一年二月、従来の定員を一〇〇人から一五〇人に変更した。結局、これが上田女子短期大学の評判を上げる要因となり、「上田女子短期大学はいい学校になった」といわれるようになったのである。

また、学生一人ひとりにたいしても限りない愛情を注いでいる。平成元年四月に設立された「北野奨学金基金」は、その一つのあらわれである。

家庭の経済的な事情で中途退学しなければならぬ学生がいると知ったとき、「うちの学校に入ったからには面倒をみましょう」と、奨学金基金を寄付したのだ。無利息のうえ卒業後八年間で返済すればいい奨学金制度である。

西尾学長が語るように、「本学は、『敬愛、勤勉、聡明』の三綱領のもとに、学術の研究ならびに真理の探究と人格の形成を重視し、社会の進歩に対応し得る磨かれた知性と豊かな情緒を備えた女性の育成を建学の理念としています。教育文化に関してすぐれた伝統に支えられた信州の風土のなかで、清新にして堅実な学風の確立に努め、さらに理想的な大学教育の場を目指し、最善を尽くす所存であります」という指針は学園全体に生きている。

教職員が全員一丸となって、地域のため、上田女子短期大学のため、そして学生のために、常に全力をあげて学校づくり邁進する牽引力となり、明るく活気にあふれた学園をつくりあげる原動力

力にもなっている。そしてその力は、全員の強い絆となって協力体制をつくりあげているといっても過言ではない。若者たちの、そして学園の未来について、今日も熱心な先生方の意見交換が行われている。

「これから女性の社会進出が多くなることが予測される。女性が活躍する場はますますふえつつけるだろう。そのためにも多面的な判断力を身につけるための教育をしていきたい」

「国際化社会に対応するための語学教育をはじめとする教育の多様化をはかる」

「生涯にわたる生きがいを創造する場として、学問だけを教えるのではなく、女性の生涯教育の学校として未来を架ける女性のキャリアプランを創造していく」

「伝統文化とともに豊かな土地に存在することを誇りにもって、さらに新しい地域文化の創造に、そして世界にはばたく力をつくりあげる」

さらには、情報機器の体系的な導入、時代の流れに沿ったテーマをコース制に反映させるなど、先生方の未来にたいする発言がつづく。これらの意見を理事長は決してなおざりにはしない。むしろ、現実の世界へ一歩一歩近づける努力をつづけることが、自分自身の夢を実現させることであるということを知っているからだ。教育内容をさらに充実させながら地域に根づいた学園として上田女子短期大学の存在は、ますます大きくなっていくことだろう。

北野理事長は、設備の面についても大きな構想をもっている。大学としての設備は、この二十年間でかなり整備・拡充されたが、「まだまだやらなければならぬことがたくさんあるんですよ」といってはばからない。体育館、運動場、学生寮の整備・増設、それに講堂の建設も計画されている。

上田女子短期大学は二十年間にわたって、これを支えてきた北野理事長のリーダーシップと鈴木鳴海初代学長、西尾光一二代目学長ほか教職員の努力によって大きく成長した。この間の卒業生は四千六百余名にのぼり、卒業生たちは、上田女子短期大学で勉強した二年間の成果を生かして、社会人として生き生き働き、職場でも高い評価を受けている。卒業生の評判はそのまま学校の評価につながり、上田女子短期大学の人気は高まるばかりだ。

「信州の鎌倉」塩田平の小さな大学、上田女子短期大学は、これからも多くの人びとの愛情あふれる眼差しに見守られて、教育の理想郷に向かい、大きく前進していくであろう。

年表

この年表は、上田女子短期大学の前身の本州女子短期大学の設立から平成五年三月に至るまでの本学の変遷を通覧するため、本学の重要な事項を中心に、あわせて教育関連と社会の主な動向を記した。

年次	月日	学校事項	月日	主な教育関連・一般事項
昭和42年 (一九六七)	3月15日 7月3日 11月3日	本州女子短期大学幼児教育科認可(定員一〇〇人) (幼稚園教諭免許状授与課程認定・幼稚園教諭二級普通免許状) 開学 第一回入学式(理事長学長・尾形亀吉、学監・柳沢英蔵) 本州女子短期大学父兄後援会発足 第一回大学祭(音楽・創作舞踊発表)	2月11日 6月6日 6月30日	第一回建国記念の日 文部省、大学・短大の認可基準を改定 臨時私立学校振興方策調査会、「私立学校振興方策の改善について」答申 日本、GNP一四〇億ドルで資本主義国第三位となる。いざなぎ景気(40〜44年)
昭和43年 (一九六八)	2月21日 3月 3月 6月12日 8月24日 10月16日	厚生省から保母養成校指定認可 保母養成校指定認可にもなる学則一部変更 「幼児教育研究」第一集発行 尾形亀吉、理事長学長退任 理事改選により理事長に西沢権一郎就任 柳沢英蔵学監、学長代行就任	1月 3月29日 10月17日	東大ほか全国的に学園紛争が起こる 私立大学連盟、「学生運動に対する見解」を発表 川端康成、ノーベル文学賞受賞
昭和44年 (一九六九)	2月 3月18日 4月 7月25日 8月3日 10月	同窓会設立準備会 第一回卒業証書授与式挙行 柳沢英蔵学長代行辞任、鈴木鳴海学長代行就任 第一回夏期ゼミ(菅平、以後菅平ゼミと呼称) 同窓会第一回総会 第一回創作舞踊校内発表会	5月26日 7月20日 7月23日 8月7日	東名高速道路全線開通 米人工衛星アポロ11号、月面着陸 自民党、防衛二法案強行採決 大学の運営に関する臨時措置法公布

昭和42年～昭和48年

昭和45年 (一九七〇)	2月17日 4月1日 5月18日 7月下旬 8月20日	第一回卒業研究発表会 上田市合併にともない住居表示変更 第一回体育デー 第一回夏期音楽講習会 第一回母親大学開講	3月15日 4月1日 4月18日 8月2日 11月3日	日本万国博覧会開幕 塩田町、上田市に合併 日本私学振興財団法公布 東京都で歩行者天国がスタート 新上田橋開通
昭和46年 (一九七一)	3月	「紀要」第一号発行	6月11日 7月1日 8月16日 12月20日	中央教育審議会、「今後における教育の施策」答申 環境庁が発足 ドルショックで東京の株式市場は史上最大の暴落 1ドル三百八円の新レイト実施
昭和47年 (一九七二)	3月 3月 4月 10月 12月	保母養成課程の改正並びに音楽コース新設による 学則一部変更 「幼児教育研究」第七集刊行(この年から卒業研究論文掲載) 音楽コース開設 第一回美術デー実施 校名を「上田女子短期大学」と名称変更決定	2月2日 2月3日 2月19日 2月21日 3月26日 5月15日 7月29日 9月29日 12月4日	元日本兵の横井庄一さん帰国 札幌で第11回冬季オリンピック開会 連合赤軍浅間山荘事件 ニクソン米大統領、中国訪問 奈良・高松塚古墳発見 沖縄復帰、沖縄県発足 第一回上田市民祭「上田わっしょい」 日中国交正常化 文部省が短大・大学生は10年間で倍増し一八一人と発表
昭和48年 (一九七三)	3月28日 4月10日	学校法人「上田女子短期大学」設置認可 (理事長・北野次登、学長・鈴木鳴海)学則変更 第一回入学式	2月14日 3月20日	円、変動相場制に移行 祝日法改正(祝日と日曜日の重なる日は休日とする)

年次	月日	学校事項	月日	主な教育関連・一般事項
昭和48年 (一九七三)	5月 5月19日 10月1日 11月17日	5月4日を開学記念日に制定 上田女子短期大学父兄後援会結成 「短大だより」第一号発行 音楽・創作舞踊による第一回「音楽会」開催(上田市民会館)	8月12日 8月25日 10月6日 10月23日	長野市中央通りで県下最長の歩行者天国 筑波大学法成立 第一次オイルショック始まる 第四次中東戦争起こる 江崎玲於奈、ノーベル物理学賞受賞
昭和49年 (一九七四)	3月 4月 8月 9月30日 11月1日 11月16日	第一回音楽コース卒業演奏会 校歌制定(吉川静夫・作詞、吉田正・作曲) 本学主体の学術調査(舟窪古墳第一号墳発掘) 体育館完成(一、一四九五) 第一回学海祭 「音楽会」を「音楽と創作舞踊の会」と改称して開催(上田市民会館) 松田トシ教授指揮のアンクロン演奏、NHK『スタジオ一〇二』で全国放送される 「図書館だより」第一号発行	2月16日 3月12日 5月12日 10月8日 12月9日	東大宇宙航空研、誘導制御で初の衛星打ち上げ フィリピンのルバンゲ島で発見の小野田寛郎元陸軍少尉帰国 上田市古舟橋完成 佐藤栄作、ノーベル平和賞受賞 三木武夫内閣発足
昭和50年 (一九七五)	3月 4月 8月 10月 11月 11月15日	『上田盆地の民話』初版刊行 児童文化研究所設置 本学主体の学術調査(舟窪古墳第二号墳発掘) 第一回校内創作オペレッタ発表会 同窓会誌「わかば」一号発行 「音楽と創作舞踊の会」に創作オペレッタが加わ	3月10日 4月19日 5月16日 7月11日 7月19日	岡山・博多間山陽新幹線開業 国立大学協、全国共通一次試験方式採用 日本女子登山隊のエベレスト登頂成功、女性による世界初 私立学校振興助成法公布 沖縄海洋博覧会開催

昭和48年～昭和53年

		3	10月22日 10月22日	ソ連「金星九号」、金星に軟着陸 上田市東前山の塩田城跡の総合調査始まる（県文化財保護協会）
昭和51年 (一九七六)	2月12日 3月18日	入学定員を一〇〇人から一五〇人に変更認可 同窓会「会員名簿」51年版発行	1月31日 4月 7月27日 11月29日 12月24日	鹿児島で五つ児誕生 新短期大学設置基準制定 東京地検、ロッキード事件で田中前首相逮捕 天皇在位五十年式典 福田赳夫内閣発足
昭和52年 (一九七七)	3月31日 4月 4月 9月 12月	ロッカールーム完成(一、二、三、四) 正門・玄関前ロータリー整備 研究生課程発足 音楽コースを器楽専攻と声乐専攻に分ける 附属幼稚園設立認可申請提出 附属幼稚園園舎完成(鉄骨平屋一部二階建八二八㎡)	5月2日 7月14日 9月3日 10月21日	大学入試センター設置 わが國初の静止気象衛星「ひまわり」打ち上げ 王貞治、世界最高の通算七五六の本塁打達成。国民栄誉賞第一号受賞(9月5日) 中央教育審議会「生涯教育の在り方」教師に関する問題」を決定 大学進学率十一年ぶりに低下 平均寿命男女とも世界一となる
昭和53年 (一九七八)	2月22日 4月1日 4月7日 5月29日 8月14日 10月8日	附属幼稚園設置認可 附属幼稚園開園 附属幼稚園第一回入園式 北信越大学バレーボール選手権大会初出場優勝(金沢) 第一回児童文化研究集会開催 附属幼稚園第一回運動会	1月1日 5月13日 6月24日 7月 8月21日 10月15日 12月27日	国際児童年スタート 新東京国際空港(成田空港)開港 上田市自然運動公園プール完成 上田市人口十一万人を突破 日中平和友好条約調印 天皇陛下、やまびこ國体開会式にご出席 大平正芳内閣成立

年次	月日	学 校 事 項	月日	主 な 教 育 関 連 ・ 一 般 事 項
昭和58年 (一九七八)	11月25日	北信越大会バレーボール新人戦大会優勝(新潟)		
昭和54年 (一九七九)	3月17日 3月17日 3月31日	附属幼稚園第一回卒園式 附属幼稚園、父と母の文集「虹」第一号発行 児童文化研究所「所報」第一号発行	1月13日 5月3日 6月6日 6月28日 11月5日	国立立大学共通一次試験実施 英国でサッチャーが先進国で初の女性首相に就任 元号法成立 第五回先進国首脳会議東京サミット開催 上田市が鎌倉市、上城市出石町と姉妹提携
昭和55年 (一九八〇)	1月24日 2月 9月7日 11月	独立棟図書館完成・開館(鉄骨二階建五六一坪) クラブ棟増築完成(鉄骨平屋建一五二坪) 児童文化研究所、叢書第一号 『児童文化の性格と課題』(鈴木鳴海著)刊行 北信越大学学生バドミントンリーグ戦大会に初出場で三部優勝(金沢)	1月1日 6月1日 7月17日 7月19日 9月21日	国際障害者年スタート 東京地方で「確率予報」開始 鈴木善幸内閣発足 第二回夏季オリンピック、モスクワで開幕(日本不参加) イラン・イラク戦争全面戦争化 校内暴力、家庭内暴力急増
昭和56年 (一九八一)	1月24日 7月18日 7月22日 11月15日	父兄後援会新潟支部結成 第一回クリエイティブダンス(上田市民会館) 国文科開設認可申請提出 第九回「音楽の会」(従来の「音楽と創作舞踊の会」を改称、音楽と創作オペレッタ発表)	3月2日 9月27日 10月19日	中国残留孤児初の訪日実現 上田市自然運動公園総合体育館完成 福井謙一、ノーベル化学賞受賞

昭和57年 (一九八二)	9月 10月15日 10月25日	国文科開設準備にともなう教育設備拡充(図書七千冊、和文タイプ二〇台、英文タイプ二〇台) 文部省私立大学設置審議会委員現地調査 文部省大学設置審議会委員現地調査	6月23日 11月1日 11月15日 11月27日 12月	東北新幹線営業開始 長野県の人口二一〇万五〇六人に 上越新幹線営業開始 中曽根康弘内閣発足 テレホンカード使用開始
昭和58年 (一九八三)	1月17日 2月8日 4月1日 4月11日 9月 11月13日 12月15日	国文科設置認可(定員八〇人) 教員免許授与の課程認定 (中学校教諭二級普通免許状・国語) 国文科開設 国文科第一回入学式 グラウンド、テニスコート整備工事完成 創立十周年記念式典挙行(特別講演・水上勉氏) 同窓会「会員名簿」58年版発行	1月15日 4月1日 6月2日 6月26日 10月12日 10月 11月22日	信州の鎌倉をめざし文化財保護についての市民憲章を制定 放送大学開学 文部省、初の「荒れる教室」全国実態調査を公表 参院選挙で比例代表制導入 ロッキード裁判の田中角栄被告に実刑判決 上田城築城四〇〇年記念行事 教育職員養成審議会、「教員免許基準」を答申 パソコン・ワープロが急速に普及
昭和59年 (一九八四)	3月31日 7月12日 7月 11月3日	「紀要」(第七号)創立十周年記念論文集刊行 国語国文学会設立総会開催 第一回木曾ゼミ(国文科) 第一回「わかばの会(同窓会)」開催	7月1日 8月21日 9月19日 11月1日	総務庁発足 臨時教育審議会設置 長野県西部地震発生(M6.8) 一千万・五千万・千円各新札発行
昭和60年 (一九八五)	2月20日 3月31日 4月1日 4月10日	第一回国語国文学会大会開催 国語国文学会機関誌「学海」第一号発行 学長鈴木鳴海退任、西尾光一就任 第一回中国特別研究生二名入学	2月14日 3月16日 4月1日 5月17日	文部省大学設置基準改正 科学万博1つくば博覧会開幕 N.T.T・日本たばこ産業株式会社発足 衆議院本会議で男女雇用機会均等法が可決成立、

年次	月日	学校事項	月日	主な教育関連・一般事項
昭和60年 (一九八五)	7月 10月 11月 12月16日	中国特別研究生による第一回中国語講座の開講 正門前、学生駐車場整備(二、二〇二坪) 第一回文学研修旅行実施 長期教学将来計画研究委員会発足	5月29日 6月26日 7月15日 8月12日	61年4月施行 上田市小牧橋開通 臨時教育審議会、「個性重視」を基本理念とする 第一次答申提出 世界婦人会議、ナイロビで開催 日航ジャンボ機、群馬県御巢鷹山山中に墜落
昭和61年 (一九八六)	1月13日 3月5日 3月 6月 8月 10月26日 11月	校舎(本館)増改築(六〇七坪) 学生食堂増築 学生寮(紫苑寮)完成(四五七坪) 前庭植栽、花壇整備 婦人大学を公開講座と改称(第八回) 陸上部団体県予選にて活躍(女子成年八百メートル優勝 ほか) 北信越学生陸上競技選手権大会四百メートル入り入賞 コース制導入、司書課程開設にともなう学則変更	1月21日 4月23日 4月26日 11月21日 12月26日	上田創造館開館 臨教審第二次答申、「生涯学習体系」への再編成 提唱 ソ連ウクライナ共和国のチェルノブイリ原子力発電所で事故発生 英チャールズ皇太子・ダイアナ妃が初来日 三原山が二百年ぶりの大噴火 浅間テクノポリス構想指定、上田地域テレビピア 情報センター「テレコム・ユ」創立
昭和62年 (一九八七)	1月14日 4月 4月 4月	司書講習の相当科目の単位認定 コース制導入実施(幼児教育科・幼児保育コース、 社会福祉コース、教養文化コース、音楽コース、 国文科・文学コース、表現コース、書道コース) 図書館司書課程・図書館司書教諭課程開設 教育設備大幅拡充(ワープロ二〇台、M.T.二〇台)	3月28日 3月30日 4月1日 4月21日 8月25日	文化財保護審議会、生島足島神社所蔵文書(上田市)を重要文化財に指定 上田バイパス開通 国鉄分割民営化、11民間会社J.R.スタート 上田市東太郎山・神畑山林火災 上田市平井寺トンネル開通

昭和60年～平成元年

<p>昭和63年 (一九八八)</p>	<p>7月31日 10月31日 12月22日</p>	<p>第一回体験入学 北新校舎完成(鉄骨平屋建二三二坪) 法人名を学校法人上田女子短期大学から『学校法人北野学園』に変更</p>	<p>平成元年 (一九八九)</p>	<p>3月5日 4月 4月 4月 6月 6月</p>	<p>鈴木鳴海前学長ご逝去、正五位勲三等瑞宝章が贈られる 経理業務の機械化開始 年間学事予定大幅変更 附属図書館に冷房装置設備 会議室改装</p>
<p>10月12日 11月6日</p>	<p>利根川進教授、ノーベル医学生理学賞受賞 竹下登内閣発足</p>	<p>1月1日 3月13日 4月10日 6月1日 8月20日 9月17日 10月8日</p>	<p>長野県の人口二一五万九三一人 青函トンネル開通、連絡船は80年の歴史を閉じる 本四連絡架橋「瀬戸大橋」開通 JOC、一九九八年冬季オリンピックの国内候補都市を長野市と決定 イラン・イラク七年十一ヵ月ぶりに停戦 ソウルオリンピック開幕 藤ノ木古墳の調査始まる リクルート疑惑発生</p>	<p>1月7日 1月15日 6月3日 6月4日 8月2日 8月3日 8月10日 11月9日</p>	<p>北野奨学金基金設立 学生相談室設置 図書館業務の機械化開始 教職免許法の改正にもなる、免許状授与の所要資格を得させるための再課程認定申請を文部大臣に提出(平成2年3月26日認可) 西尾光一学長勲三等旭日中授章受章</p> <p>昭和天皇が没し、新元号が平成と決定 祝日法改正、昭和天皇誕生日4月29日は国民の祝日、「みどりの日」に 宇野宗佑内閣発足 中国・北京の天安門広場で学生・市民らが民主化要求デモ、戒厳軍が武力行使して制圧 北陸新幹線高崎・軽井沢間着工 文部省が平成元年度大学進学率で女子が男子を初めて上回ったと発表 海部俊樹内閣発足 善光寺昭和の大修理の落慶法要</p>

年次	月日	学校事項	月日	主な教育関連・一般事項
平成元年 (一九八九)			11月	「ベルリンの壁」事実上消滅
平成2年 (一九九〇)	4月	入試業務の機械化開始 保健室を整備	4月1日	大阪で「国際花と緑の博覧会」(花の万博)開幕
	7月	長野県教育委員会より平成二年度～三年度、県生涯学習推進校の委嘱を受け県民カルチャー上田女子短期大学開放講座として、メインテーマ「生きる」を開講	6月29日 8月2日	礼宮様、川嶋紀子さんと結婚秋篠宮(家)を創設 イラク軍がクウェート領内に侵攻し、武力制圧する
	9月6日	図書館の機械化による貸出し返却業務稼働開始 (県内大学中、初の貸出稼働)	10月3日	東西ドイツが統一、新生「ドイツ連邦共和国」が誕生する
	11月8日	米国ハワイ州教育長 Dr. Margaret Y. Oda 先生による「アメリカにおける教育事情」と題した開学以来初の英語による講演会開催	11月12日 21日	丸子町で二億円の使途不明金明るみに出る 天皇の即位の礼が行われる
平成3年 (一九九一)	1月20日	第一回ニューイヤークコンサート開催	12月2日	TBS宇宙特派員秋山豊寛さんソ連ソユーズで日本人初の宇宙飛行に出发
	4月	教務関係業務の機械化開始	7日	北陸新幹線越前・長野間フル規格での予算化決まる
	4月29日	教育・放送功労者として北野次登理事長監修受章	11月17日 4月5日	多国籍軍がイラク空爆を開始、湾岸戦争に突入 松商学園高校、選抜高校野球大会で県勢としては65年ぶりの準優勝を飾る
	9月17日	保母養成教育課程の改正にもなう学則変更申請書を厚生大臣に提出(平成4年1月17日承認)	7日	善光寺御開帳始まり、50日間で三十八万人の入出を記録
	9月	学生用洗面所改修	11日 6月3日	国連安保理が停戦宣言、湾岸戦争が終結する 長崎県雲仙岳で大火砕流が発生し人命・人家等に

平成元年～平成5年

<p>平成5年 (一九九三)</p>	<p>平成4年 (一九九二)</p>	<p>3月12日 3月31日</p>	<p>4月 4月23日 9月6日 10月23日 11月13日 11月15日</p>	<p>上田女子短期大学が発足して第二十回の卒業証書授与式を挙行 学長、西尾光一退任 『紀要』第十六号(創立二十周年記念論文集)発行 『上田女子短期大学の二十年』発行</p>	<p>大学設置基準改定にともなう自己点検・自己評価研究委員会発足 中国特別研究生受け入れが評価され、中国・北京市教育局から北野次登理事長に日本人初の金帆奨(教育功労賞)受賞 北信越大学空手道団体選手権大会にて本学空手道部準優勝 長野県民カルチャー上田女子短期大学開放講座 麟義内容『生きる』発行 附属幼稚園が平成四年度文部省調査統計功績者として文部大臣から表彰される 全日本大学選手権大会にて空手道部女子団体組手で二回戦進出</p>	<p>1月19日 3月26日 3月27日</p>	<p>2月8日 6月15日 7月1日 7月25日 8月 9月12日</p>	<p>皇太子さま、小和田雅子さんとご婚約内定(6月9日結婚の儀) 長野自動車道豊科・須坂長野間開通 上信越自動車道群馬県藤岡・佐久間開通</p>	<p>山形新幹線開業 第25回バルセロナオリンピック開幕、女子二〇〇メートル泳ぎで14歳の岩崎恭子選手史上最年少で金メダル 東京佐川急便献金疑惑発生 日本人宇宙飛行士、毛利衛さんらが乗った米宇宙航空局(NASA)のスペースシャトル・エンデバーが打ち上げられ、宇宙実験・宇宙授業などを行う</p>	<p>大きな被害を出す 英パームシングラムでI.O.C総会が開かれ、一九九八年の冬季オリンピック開催地を長野市に決定 全国中体軟式庭球女子団体が塩田中学が優勝 宮澤喜一内閣発足 ソヴィエト社会主義共和国連邦(ソ連)消滅</p>
------------------------	------------------------	------------------------	---	--	--	----------------------------------	---	--	---	---

名簿

この名簿は、上田女子短期大学の前身の本州女子短期大学の設立から平成五年三月に至る現教職員・旧教職員を収録した。

【役職員】

理事長	北野	次登
理事・学長	西尾	光一
常任理事・事務局長	龍口	貴夫
理事・幼児教育科学科長	竹内	要
国文学科科長	井出	賢次
一般教育・教職課程主任	松田	幸子
附属図書館長	山口	吉宗
児童文化研究所所長	西尾	光一
附属幼稚園長	竹内	要
理事	北野	次登
理事長	西尾	光一
理事	荒井	金雄
	北野	静子
	瀧田	勇夫
	竹内	要
	龍口	貴夫
監事		
監事	尾和	郡司
	保谷	秀雄
顧問		
顧問	甲斐	安夫

【評議員】

北野	善造
北野	袈裟造
荒井	金雄
尾和	郡司
島田	基正
瀧田	勇夫
保谷	秀雄
小笠原	光三
大森	義彦
唐沢	佐代子
長嶺	寸久江
鈴木	秀一郎
龍口	貴夫
竹内	要
井出	賢次
松田	幸子
関口	信雄
飯田	正江

【退任理事】

★北野	幾造	(昭和48・4↓昭和54・3)
小山	一平	(昭和48・4↓昭和50・3)
丸山	正樹	(昭和49・5↓昭和55・4)
★鈴木	鳴海	(昭和48・4↓昭和60・4)
藤田	保夫	(昭和55・4↓昭和62・3)
★神津	得一郎	(昭和48・4↓平成2・8)
青木	千代吉	(昭和60・4↓平成元・3)

(附属幼稚園長)

【退任監事】

羽田	義知	(昭和48・4↓昭和50・3)
竹内	武雄	(昭和48・4↓昭和58・3)
岩崎	大三	(昭和58・4↓平成3・3)

名簿

〔現職専任教員〕

西尾	光一
井出	賢次
飯田	正江(氏家)
北村	恵子(神林)
坂野	信彦
関口	信雄
竹内	要
松田	幸子
山口	吉宗
天田	邦子(前島)
犬飼	己紀子(寺島)
兎束	淑美
塩入	秀敏
周東	清芳
樽田	修
山本	秀磨
大橋	敦夫
中西	満義
前田	基成
清水	正男
嘱託教授	

〔現職専任職員〕

龍口	貴夫
笠原	忠彦
坂田	安美子
谷口	桂子
沼田	悦子(林)
三井	実
窪田	寿子
林	道也
池田	次代(倉島)
竹内	真理子(林)
館長(兼)	山口 吉宗
主幹(司書)	長張 和子(関)
副主幹(司書)	久保田ゆかり(甲田)
嘱託職員(就職相談室室長)	三浦 清男
"(保健室)	上沢 長子
"(事務局)	竹内 芳夫
"(学寮)	酒井 澄子
学校医	堀内 泉

〔附属幼稚園〕

園長(兼)	竹内 要
主任教諭	若山 淳子
教諭	片山 真澄
"	佐藤 利佳子(武居)
"	増田 とし美
"	望月 由香
職員	和田 歌織
嘱託教諭	林 集一
嘱託職員	白鳥 恵
	大池 深志

〔現職非常勤教員〕五十音順―担当教科

講師

秋山 智枝子 (器 楽)
 安藤 裕 (環 境)
 阿部 康次 (生活科学)
 池田 輝 (図画工作)
 上原 貴夫 (教育心理学)
 上平 忠一 (精神保健)
 荻原 和夫 (小児栄養)
 加田 泰 (特別講座)
 金子 泰子 (国 語)
 加納 悟郎 (器 楽)
 北川原 平造 (言 葉)
 久保田 園実 (器 楽)
 佐藤 美恵 (ワープロ実務)
 斉藤 敦子 (器 楽)
 清水 美穂 (ワープロ実務)
 篠沢 友子 (器 楽)
 嶋田 貴美子 (英 語)
 田子 檀 (古代国文学)
 田中 京子 (書道研究)
 千野 光亮 (情報学)
 塚田 宏 (教育課程の研究)
 土屋 準 (日本国憲法)

中垣 雅雄 (生物学)
 中山 登美子 (保育原理)
 福沢 誠 (経済学)
 福田 芳典 (中古国文学)
 堀内 健 (小児保健)
 松尾 智子 (小児保健実習)
 松田 菜穂子 (器 楽)
 丸山 英人 (特別講座)
 三石 千代子 (家庭管理)
 宮川 則子 (保健体育講義)
 森 敏孝 (声 楽)
 矢羽 勝幸 (近世国文学)
 柳沢 重也 (言語学)
 山崎 博太 (日本国憲法)
 若麻績 修英 (宗教学)
 若山 淳子 (兼・人間関係)

〔退職教職員〕 (五十音順) ★印は物故者
 ①専任教員 (カッコ内は退職時職名・担
 当教科・退職年度)

- 青木 千代吉 (教授・国語学・昭63)
- 天野 文雄 (助教授・中世国文学・昭62)
- 安藤 暉子 (教授・小児保健昭59↓看護教授)
- 安藤 昭子 (講師・教育心理学・昭49)
- 石橋和子(浦沢) (講師・哲学・昭53)
- 上原 貴夫 (助教授・教育心理学・昭62)
- 大島 富朗 (助教授・近世国文学・昭61)
- 大森 幹子 (講師・児童音楽・昭42)
- ★尾形 亀吉 (理事長・学長・昭43)
- 大野 明美 (助手・音楽・平3)
- 木内 盈治 (助教授・保健体育・昭47)
- 菊池 志げ子 (教授・小児保健昭63↓看護教授)
- ★北村 達二 (教授・英語・昭60)
- 黒岩 光生 (教授・保健体育・平2)
- ★小松 忠志 (教授・漢文学・昭61)
- 近藤春美(富井) (助手・体育実技・昭51)
- 桜井 房江 (講師・音楽・昭48)
- 島田 紀美子 (助手・音楽・昭45)
- 白倉 徳明 (教授・自然・昭51)
- ★鈴木 鳴海 (学長・社福社昭59↓名誉教授)
- 須永 淑 (助教授・保育原理・昭61)

関 克彦 (教授・絵面制作・昭55)
 高木 秀世 (講師・絵面制作・平2)
 ★高野 豊文 (図書館長・昭47)

- ★塚田 清策 (教授・書道・昭62)
- ★長井 保 (教授・英語・昭54)
- 長瀬 守 (教授・歴史・昭46)
- 中山 渡 (教授・近代国文学・平元)
- 野上 澄江 (教授・保育原理・昭50)
- ★花里 はる江 (講師・言語・昭45)
- ★林 幸四郎 (教授・図画工作・昭56)
- 福沢 武一 (教授・近代国文学・昭60)
- 藤沢 紫朗 (教授・声楽・昭50)
- ★藤沢 誠 (教授・哲学・昭48)
- 藤島 輝子 (助教授・心理学・昭45)
- 星 悦子 (助教授・心理学・昭59)
- 松田 トシ (副学長・声楽・昭50)
- ★溝上 泰子 (教授・教育原理・昭50)
- 三田 英彬 (教授・近代国文学・昭63)
- 柳沢 英蔵 (学長代行・教授・昭43)
- 矢羽 勝幸 (教授・近世国文学・平3)
- ★湯川 尚文 (教授・図画工作・昭43)
- ★渡辺 竹二郎 (教授・文学・昭58)

②事務職員 (退職時職名・退職年度)
 荒井 みつ子 (寮母・昭59)
 川村憲二(遠藤) (事務局長・昭50)
 下村 恵勇 (事務局次長・昭60)

- ★高寺 重延 (庶務・昭53)
- 手塚 しげき (用務・昭53)
- 丸山 正樹 (理事・事務局次長・昭55)
- 藤田 保夫 (理事・事務局次長・昭61)
- 柳沢 啓三 (運転手・昭57)

③附属幼稚園 (退職時職名・退職年度)

- 青木 千代吉 (園長・昭63)
- 大島多恵子(上原) (教諭・昭60)
- 加々井英恵子(手塚) (教諭・昭57)
- 河野千加子(中村) (教諭・昭56)
- 竹内 芳夫 (園務・運転手・昭59)
- 土屋 吉太郎 (副園長・昭58)
- 長島恵美子(上野) (教諭・平3)
- 長嶺すみ江(藤) (教諭・昭55)
- 水野 美恵(酒井) (教諭・平元)
- 宮原純子(金巻) (教諭・平2)
- 山岸克子(石井) (教諭・昭57)
- 矢幡知美(矢幡) (教諭・平2)
- 吉村 節子 (主任教諭・昭59)

④非常勤講師

青木 千代吉	(學科) 担当教科	(國文・中國特別研究生指導)
青柳 靖夫	(幼教・臨床心理学)	
安藤 暉子	(幼教・小児保健)	
浦野 吉人	(幼教・絵画制作)	
海老原 泊善	(幼教・教育学史)	
太田恭子(大谷)	(幼教・器樂)	
大沢 智昭	(幼教・小児保健)	
押金 丈雄	(國文・経済学)	
片桐和子(宮崎)	(幼教・器樂)	
金子 敏彦	(幼教・書道)	
河崎 俊一	(幼教・哲学)	
京極 興一	(國文・国語表現法)	
木内裕美(木内)	(幼教・器樂)	
栗田 とよ	(幼教・栄養学)	
黒沢 惟昭	(幼教・教育学)	
小池 重裕	(幼教・養護原理)	
小林 恒一	(幼教・家庭看護)	
坂口 厚美	(幼教・化学)	
笹井 弘	(幼教・図画工作)	
佐藤直子(菅沼)	(幼教・器樂)	
佐藤 かよ子	(幼教・乳児保育)	
佐藤 昌子	(國文・和文タイプ)	
渋谷 久	(幼教・哲学)	

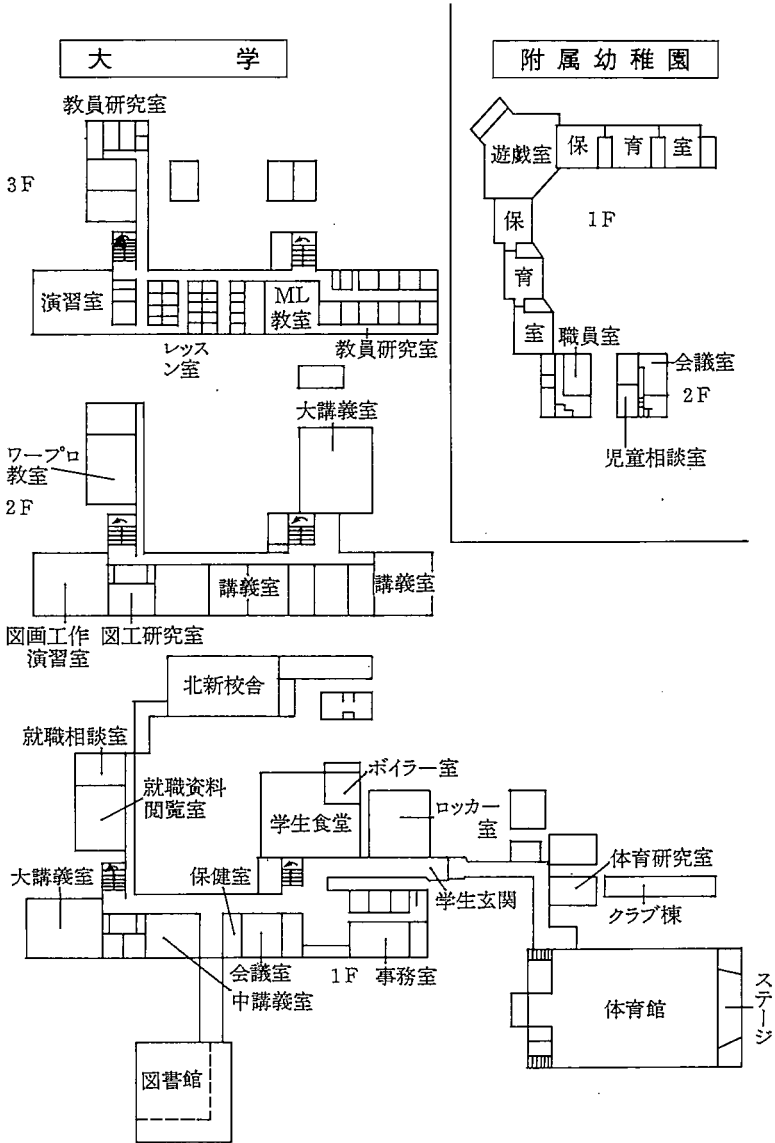
清水 悟	(幼教・自然)	
白井 汪芳	(幼教・生活科学)	
島田 美成	(幼教・美術)	
須永 淑	(幼教・保育原理)	
鈴木 昭一	(幼教・英語)	
スエッチ利江(窪倉)	(幼教・器樂)	
★関沢 欣三	(幼教・養護原理)	
大安 ヒデ子	(幼教・乳児保育)	
武井 隆二	(幼教・生物学)	
滝沢 石	(幼教・養護原理)	
竹島 弓子	(幼教・器樂)	
龍野博子(土屋)	(幼教・器樂)	
田中 豊子	(幼教・被服住居)	
土屋 敦博	(幼教・保体講義)	
土屋 吉太郎	(幼教・教育実習)	
戸田 すみ子	(幼教・乳児保育)	
中西 君代	(幼教・乳児保育)	
中村 平八	(幼教・経済学)	
長塚 安幸	(幼教・法学)	
長谷川 敏平	(幼教・哲学)	
長谷川さゆり(寺沢)	(幼教・器樂)	
羽生 千鶴	(幼教・器樂)	
菱田浩子(古沢)	(幼教・声樂)	
★平岩 通夫	(幼教・生活科学)	

平野 勝重	(両科) 図書館活動
福沢 武一	(國文・近代国文学)
藤森 芳房	(幼教・教育実習)
細野 哲雄	(國文・中世国文学)
町田 等	(幼教・音楽)
丸山裕美(高畑)	(幼教・器樂)
三沢京子(小島)	(幼教・器樂)
三沢 光則	(幼教・臨床心理学)
水間 大吉	(幼教・児童心理学)
三田 コト	(幼教・家庭管理)
宮原 高夫	(幼教・教育実習)
山田 寅子	(幼教・養護原理)
山田 優子(村石)	(幼教・器樂)
柳沢 琴子	(幼教・器樂)
★山本 太郎	(幼教・保健衛生)
横内 静雄	(幼教・養護原理)
吉本 光彦	(幼教・養護原理)
渡辺 康	(幼教・児童心理学)
その他	
安藤 守正	(学校医)
千葉 弘子	(スキー指導員)
西沢 爽	(特別講座) 作詞

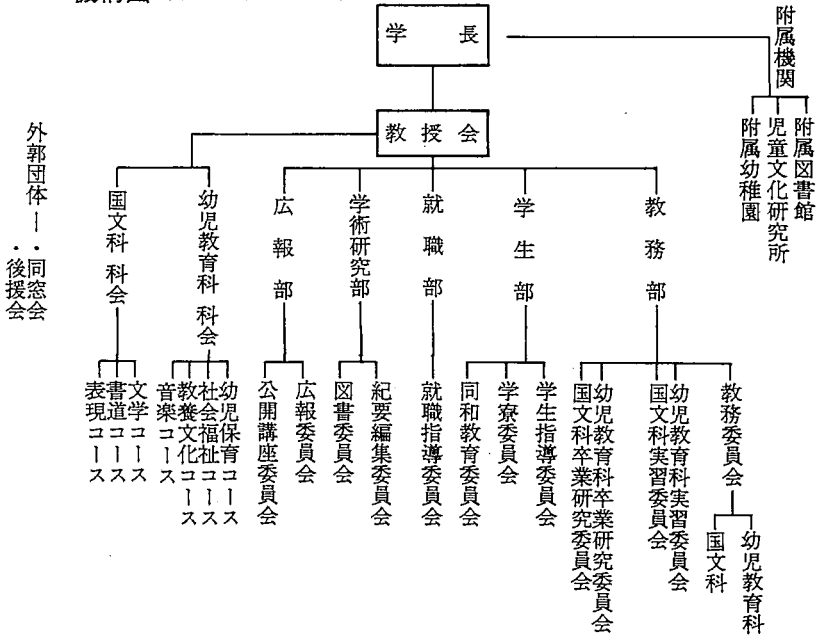
資料

この資料は、上田女子短期大学の概要、教育内容等を示す主なものを収録し、創立以来通覧できないものについては平成五年三月時点の内容および統計で示した。

校舎及び教室配置図



機構図 (平成4年4月現在)



幼児教育科開設科目及び担当者 (平成4年度入学者用)

分野	授業科目	担当者	
一般教育 養育科目	哲学	松田 幸子	
	文学	中西 満義	
	倫理学	松田 幸子	
	美術	山本 秀麿	
	宗教学	若麻織 修英	
	日本国憲法	山崎 博太	
	社会学	樽田 修	
	教育学	天田 邦子	
	歴史	塩入 秀敏	
	経済学	福沢 誠	
	情報学	千野 光亮	
	生活科学	阿部 康次	
	生物学	中垣 雅雄	
外国語	英語 I	嶋田 貴美子	
	英語 II	福沢 重也	
	ドイツ語	松川 幸子	
保健体育	保健体育講義	富川 則子	
	保健体育実技	富川 則子	
専門教育科目	教科に関する専門科目	器楽I 1年前期	兎束淑美 北村恵子
		器楽I 1年後期	加納愷郎 秋山智枝子
		器楽II 2年	久保田園実 斉藤教子
			篠沢友子 松田菜穂子
		声乐I 1年前期	関口信雄 森敏孝
		声乐I 1年後期	関口信雄 森敏孝
		声乐II 2年	関口信雄 森敏孝
		音楽理論I	兎束 淑美
		図画工作	池田 輝
		生活美術	池田 輝
		体育 I	大飼 己紀子
	体育 II	大飼 己紀子	
	国語	金子 泰子	
	教職に関する専門科目	教育原理	清水 正男
		児童心理	前田 基成
		教育史	天田 邦子
		教育方法・技術	清水 正男
		障害児保育	竹内 要
		教育課程の研究	塚田 宏
		保育内容総論	塚田 宏
		健康	飯田 正江
		人間関係	若山 淳子
		環境	安藤 裕
言葉 I		北川原 平造	
造形表現 I		山本 秀麿	

分野	授業科目	担当者
専門教育科目 その他の教育科目	富 葉 II	北川原 平造
	造形表現II	山本 秀麿
	音楽表現I	北村 恵子
	身体表現I	飯田 正江
	音楽表現II	北村 恵子
	身体表現II	飯田 正江
	幼児教育指法	若山 淳子
	教育実習	天田 邦子
	児童福祉	竹内 要
	社会福祉I	樽田 修
	社会福祉II	樽田 修
	保育原理	天田 邦子
	保育原理II	中山 登美子
	養護原理	竹内 要
	養護原理II	竹内 要
	乳児保育	中西 君代
	保育実習	竹内 要
	保育実習III	竹内 要
	保健体育実習	前田 基成
	精神保健	上原 貴夫
	臨床心理学	竹内 要
	教育心理学	前田 基成
	小児保健	堀内 健
	小児保健実習	松尾 智子
	精神保健	上平 忠一
	小児栄養	荻原 和夫
	小児栄養実習	荻原 和夫
	児童文化	竹内 要 天田邦子
		井出 賢次
	障害者福祉	樽田 修
	老人福祉	樽田 修
	地域福祉	樽田 修
	家庭教育論	天田 邦子
現代女性論	松田 幸子	
社会体育	大飼 己紀子	
創作舞踊	飯田 正江	
ワープロ実務	佐藤美恵 清水美穂	
和声法	久保田 園実	
音楽史	兎束 淑美	
音楽理論II	久保田 園実	
ソルフェージュI	北村 恵子	
ソルフェージュII	北村 恵子	
音楽教育指法I	北村 恵子	
音楽教育指法II	兎束 淑美	
卒業研究	各担当教員	

資料

国文科開設科目及び担当者 (平成4年度入学者用)

教 科 目		担 当 者	
一 般 教 養 科 目	人 文	哲 学	松田 幸子
		文 学	坂野 信彦
		倫 理 学	松田 幸子
		美 術 学	山本 秀麿
		宗 教 学	若麻績 修英
	社 会	日本国憲法	土屋 準
		社 会 学	梅田 修
		教 育 学	天田 邦子
		歴 史 学	塩入 秀敏
		経 済 学	福沢 誠
	自 然	情 報 学	千野 光亮
		生 活 科 学	阿部 康次
		生 物 学	中垣 雅雄
外 国 語	英 語 I	柳沢 重也	
	英 語 II	柳沢 重也	
	ドイッ語	松田 幸子	
保 体	保健体育講義	宮川 則子	
	体育実技	宮川 則子	
専 門 教 育 科 目	教 科 目	担 当 者	
	国語学概論	大橋 敦夫	
	国語学演習	大橋 敦夫	
	国語史 I	大橋 敦夫	
	国語史 II	大橋 敦夫	
	国 文 法	金子 泰子	
	言語学 I	柳沢 重也	
	言語学 II	柳沢 重也	
	国語表現法	井出 賢次	
	古代国文学	田子 檀	
	中古国文学	中西 満義	
	中世国文学	中西 満義	
	近世国文学	矢羽 勝幸	
	近代国文学	井出 賢次	
	古代国文学演習	田子 檀	
	中古国文学演習	福田 芳典	
	中世国文学演習	中西 満義	

教 科 目		担 当 者
専 門 教 育 科 目	近世国文学演習	矢羽 勝幸
	近代国文学演習	坂野 信彦
	国文学史	田子 檀
	小説研究	坂野 信彦
	詩歌研究	北川原 平造
	児童文学研究	坂野 信彦
	作法研究 I	井出 賢次
	作法研究 II	坂野 信彦
	文章作法	坂野 信彦
	生活言語論	大橋 敦夫
	表現文化論	飯田 正江
	漢文学論	周東 清芳
	漢文学演習	周東 清芳
	書道研究 I	周東 清芳
	書道研究 II	周東清芳・田中京子
	書道史	周東 清芳
	書写書道概論	周東 清芳
	古文書学	塩入 秀敏
	人間関係論	松田 幸子
	現代女性論	松田 幸子
	演劇論	中西 満義
	外国文学	柳沢 重也
	情報学特論	千野 光亮
	民俗学	塩入 秀敏
	日本史概説	塩入 秀敏
	ワープロ実務	佐藤 美恵
	卒業研究	各担当教員

教 科 目		担 当 者
教 職 に 関 す る 専 門 科 目	教育原理	清水 正男
	教育心理学	上原 貴夫
	教育史	天田 邦子
	教育方法・技術	清水 正男
	辦教方法(個詔)	井出 賢次
	道徳教育の研究	松田 幸子
	特別活動の研究	松田 幸子
	生徒指導等の研究	前田 基成
	教育実習	中西満義・清水正男
	教育実習・補助研究	清水 正男

司書・司書教諭課程開設科目及び担当者（平成4年度入学者用）

司書課程（幼児教育科・国文科）

授業課目		担当者
甲群	図書館通論	山口 吉宗
	図書館資料論	山口 吉宗
	参考業務	山口 吉宗
	参考業務演習	山口 吉宗
	資料目録法	山口 吉宗
	資料目録法演習	山口 吉宗
	資料分類法	山口 吉宗
	資料分類法演習	山口 吉宗
図書館活動	山口 吉宗	
乙群	青少年の読書と資料	井出 賢次
	図書及び図書館史	坂野 信彦
	情報管理	千野 光亮
丙群	社会教育	天田 邦子
	人文科学及び社会科学の書誌解題	塩入 秀敏
	社会調査	樽田 修

司書教諭課程（国文科）

授業課目	担当者
学校図書館通論	清水 正男
学校図書館の利用指導	清水 正男

その他の授業科目

学校図書館の管理と運用	図書館通論及び 図書館活動	山口 吉宗
児童生徒の読書活動		
図書の選択	図書館資料論	山口 吉宗
図書以外の資料の利用		
図書の整理	資料目録法及び 資料分類法	山口 吉宗

児童文化研究大会

開催日・記念講演テーマ・講師・分科会テーマ

第1回(53・8・14)

「今日の幼児をめぐる諸問題」

長野県中央児童相談所長 三沢 光則

分科会「なつかしい講義をとおして」

第1分科会「教育の原理は自己自身」 元教授 溝上 泰子

第2分科会「保育現場と大学の連繋の必要性」 教授 関 克彦

第3分科会「遊びの本質と保育活動」 助教授 須永 淑

第2回(54・9・2)

「子どもの人権としての教育と福祉」

名古屋大学教授 小川 利夫

分科会「子どもの発達と指導」――保育の事例をとおして――

第1分科会「絵画・図工の面から」 大塚幼稚園 齊藤 厚子

第2分科会「音楽の面から」 塩田中央保育園 藤原 房子

第3分科会「動きのリズムの面から」 豊殿保育園 安田美津子

第3回(55・9・7)

「わたしの児童文学周辺」 児童文学作家 長崎源之助

分科会「子どもの創造的な文化を求めて」

――保育事例をとおして――

第1分科会「絵画・図工の面から」 塩田北保育園 市村 幸子

第2分科会「読み聞かせの面から」 泉 千鶴子

第3分科会「遊びの面から」 手塚英恵子

上田女子短期大学附属幼稚園

上田女子短期大学附属幼稚園

第2分科会「音楽の面から」

上田女子短期大学附属幼稚園 武居利佳子

第3分科会「動きのリズムの面から」 豊殿保育園 三井しげ子

第4回(56・9・6)

「テレビに子守りをさせないで」

ルナ子ども相談所所長 岩佐 京子

分科会「子どもの豊かな発達を求めて」――保育事例をとおして――

第1分科会「発達遅滞をともしなう自閉的傾向児について」

上田いずみ園 齊藤 京子

第2分科会「虚弱児施設における登校拒否児」

原峰保養園 宮坂美貴子

第3分科会「自然・社会両領域の関連活動をめぐって」

海野保育園 吉沢あけみ

第5回(57・6・6)

「園生活の再検討」

桐朋学園幼稚園 大場 牧夫

分科会「子どもの文化と発達」――保育事例をとおして――

第1分科会「幼児期の遊びと調整力の発達」

依田保育園 長坂美江子

第2分科会「子どもと紙芝居とのあいだ」

南部保育園 唐沢佐代子

第3分科会「園内合宿で育つものいずみ幼稚園」

田中由紀子

第6回(58・6・19)

「自然と遊ぶ子どもたち」

東京家政大学教授・亀戸幼稚園園長 山内 昭道

分科会「子どもと環境」――保育事例をとおして――

第1分科会「子どもをみる眼」

堀井美智恵

- 上田女子短期大学附属幼稚園 吉村 節子
 大犀幼稚園 石原 照美
- 第2分科会 「過保護に育った幼児の指導」
 小諸野岸幼稚園 滝沢 典子
- 第3分科会 「未満児保育の実践にあたって」
 長野大橋保育園 坂口サトミ
- 第7回 (59・6・3)
 「創作児童文学の時代を築く」 理論社会長 小宮山暈平
 第1分科会 「幼児の発達段階に応じた子供の言語指導」
 軽井沢中保育園 土屋 厚子
 聖ヨゼフ保育園 飯盛 園江
- 第2分科会 「体育遊びを通して子供の調和の取れた運動能力の向上をめざして」 御代田第一保育所 柳沢 純子
- 第3分科会 「小動物の飼育(か)の一生」 西丘保育園 小林 協子
- 第8回 (60・6・2)
 「子供の世界の東と西」 上智大学教授 村松 定孝
 ー 下村湖人の「次郎物語」とルナールの「にんじん」ー
- 第1分科会 「仲間達との関わりをなかに育つ言語」
 あゆみ保育園 倉田 三子
- 第2分科会 「童話の創作活動にたずさわって」
 信濃子ども会創作研究会・本学講師 嶋田貴美子
- 第3分科会 「子供達の健やかな発育のために」
 元上田市東塩田小学校養護教諭 永井 瑞江
- 第9回 (61・9・13)
 「幼児の心とことば」 京都教育大学教授 岡本 夏木
 第1分科会 「保育園における同和教育の実践」 海野保育園 小林 豊子
 第2分科会 「絵本の読みかきかせによる幼児の指導」
 上田女子短期大学附属幼稚園 水野 美恵
- 第3分科会 「幼児期の言語形成と指導」 対話指導の実践から
 上田女子短期大学附属幼稚園 金葉森 純子
- 第10回 (62・10・17)
 「子どもの発達と遊び」 加古総合教育研究所所長 加古 里子
 第1分科会 「心ゆくまであそぶ子どもに」
 上田女子短期大学附属幼稚園 増田とし美
 片山 真澄
 水野 美恵
- 第2分科会 「アメリカの子育て、日本の子育て」
 御代田めぐみ教会 W・リース氏御夫妻
- 第3分科会 「地域の児童文化活動」
 ① 絵本の学校の活動 絵本の学校 暁士見台分校 牧純子ほか
 ② おもちゃ図書館の実践 上田明照会堂池園 柳沢 民子
- 第11回 (63・10・15)
 「いま何を語りつたえるか」 児童文学者 松谷みよ子
- 第1分科会 「心ゆくまであそぶ子どもを求めて」
 上田女子短期大学附属幼稚園 佐藤利佳子
 矢幡 知美
 金葉森 純子
- 第2分科会 「子どもの創造力を育てる活動をめざして」
 大犀幼稚園 川上 明子
 滝沢智恵子
- 第3分科会 「第二の教育現場から」
 北御牧VYSだけのこの会 野村 伸弥

第12回(元・10・14)

「幼児の発達と音楽環境」 国立音楽大学講師 後藤田純生

第1分科会 「心ゆくまで遊ぶことを求めて」

豊かな心が育つための環境づくり

上田女子短期大学附属幼稚園 増田とし美

片山 真澄

第2分科会 「子どもと共に感じあい保育をとらえなおす」

川上村みやま共同保育所・学習教室 近藤 幹生

松本市内田保育園 富島 通江

第3分科会 「農協の「子供おもしろセミナー」について」

東部町農業協同組合 杉田 修司

第13回(2・10・13)

「土と草と風の絵本」 絵本作家 田島 征三

第1分科会 「幼児の身体表現」

丸子町わかくさ幼稚園 岡本美代子

第2分科会 「養護施設の子どもたち」

長野市田福寺愛育園 東福寺奈津江

萬山由香理

徳武 真弓

第3分科会 「夢を育てる手作り人形劇」

中野市平野保育園 下田あや子

中野市松川保育園 松崎 礼子

第14回(3・10・19)

「子どもがつくる文化―遊びの文化論―」

京都大学教授 藤本浩之輔

第1分科会 「ほめられることもつらいな」

上田女子短期大学附属幼稚園 片山 真澄

和田 歌織

第2分科会 「折り紙で楽しく遊ぼう」

東部町保育園 寺島 初子

岩田 広子

柳沢 和子

平川美智代

小山千賀子

第3分科会 「児童館と子どもの遊びについて」

上田市川辺町児童センター 吉本千賀子

水沢 治子

志摩千恵子

第15回(4・10・17)

「動物たちが大人になるために」

上野動物園園長 増井 光子

第1分科会 「竹馬の保育実践」

東部町くるみ幼稚園 館林千恵子

宮尾 知恵

第2分科会 「養護施設の子どもたち」

長野市松代福祉寮 酒井千恵子

島田 祐子

宮原千奈津

中村 由紀

第3分科会 「夜間保育所における実践」

長野市若葉保育園 保科かおる

音楽の会

(第1回から第16回までは省略)

第17回 (平成元年十一月二十六日)

上田市民会館

コンサートと創作オペレッタ

第一部 コンサート

1・合唱

瑠璃色の地球

吉川静夫作詞
吉田 正作曲

松本 隆作詞
平井夏美作曲

指揮 関口 信雄
伴奏 夏目佳代子

(音楽コース一年)

2・合唱

持田美晴作詞
矢田久子作曲

指揮 関口 信雄
伴奏 溝口由香子

(音楽コース一年)

女声合唱曲集「空とふうさぎ」より

木綿 小倉久雄作詞 西脇久夫作曲

手紙 谷田由美子作詞 西脇久夫作曲

空とふうさぎ

ナレーター 大家あゆみ 高橋 優子

3・ピアノ連弾

一年生 味澤 恵見

一年生 山田 恵子

「小組曲」(下ビュッシー作曲)より
行列

4・メゾ・ソプラノ独唱 音楽コース
研究生一年尾崎 澄子

伴奏 研究生一年 塩原こずえ

献身(リヒャルトシュトラウス作曲)

オペラ「トロバトーレ」(ヴェルディ作曲)

より「炎は燃えて」

5・ピアノ独奏 音楽コース

「二つの練習曲」二年生 日出優紀子

・森のささやき(リスト作曲)

・小人のおどり

バラード3番(アイ長調op47)(シヨパン作曲)

6・声楽アンサンブル 音楽コース全員

女声合唱組曲「めざめた薔薇」全曲

塔 和子作詞 柳川直則作曲

指揮 関口 信雄

伴奏 二年吉田佳おり

・めざめた薔薇

・憧憬

・白いバラ

第II部 創作オペレッタ 指導 北村恵子

1・ピーターとセレーネ

責任者 大家あゆみ 黒岩加奈恵

ピーター……………白田 ゆみ

セレーネ……………青木 美香

王様……………三宅 順子

妖精……………酒井 美恵 堀口美代子

太田 和枝 内堀奈津江

山岸 由香 吉田 陽希

黒岩加奈恵 市川 陽子

青木千亜紀 市ノ瀬恭子

ふくろうのおじさん……………池田 裕子

人間……………青木 尚子 伊藤美奈子

神谷 直子 川合さとみ

北村 紀子 工藤 真己

花……………尾臺 恵美 掛川みどり

石坂……………石坂 仁美

大道具・小道具……………片山 千津

生玉 光 大島久美子

大竹 弘美 池田 真理

市川 桂子ほか

照明……………上條 法子 畦上 香理

岩下 裕子 内田 泉

ナレーター……………北澤百合子

伴奏……………風間千恵美 池田 早苗

指揮……………馬場 淑江

コーラス・作曲・その他:二年A・B組

2・サヨの星

責任者 茅野真由美・古越 博江

サヨ……………古越 博江

サヨの母……………中嶋 喜和

しの……………深沢あゆみ

サヨのおばあちゃん……………原田なみ江

けん太……………東川 園子

赤ちゃんの母：武田 栄子
 けん太の父……寺尾 明美
 お地蔵さん……戸島 千波
 村人……武田 惠美 土屋亜矢子
 中山 康子 西野入久美

クリエイティブダンス

第9回(平成元年七月一日)
 (第8回までは省略)

上田市民会館

第一部

指導 飯田正江

樹海

工藤 真巳 神谷 直子 伊藤 陽子
 北村 紀子 北澤百合子 飯島 深雪
 風とあそぼう

心蔵

上田女子短期大学附属幼稚園 まつ組
 指導 増田とし美 片山 真澄

Fairies of Ice (氷の精)

上田市立第二中学校
 指導 竹尾 祐子
 大久保栄理 太田 みほ 橋詰 綾子
 柴田加奈子 成澤 恵 海野 静
 大井 美紀 伊藤 宗子 打江 麻里

村の子供達……田邊 馨 塚田知恵美
 中嶋 典子 中島八重子
 名取 美和 茅野真由美
 大道具……藤田 智子 西沢 美香
 長岡美恵子 中沢 和美
 ほか

山下 洋子 小林佐和子 竹下 絵麻
 古沢あき子 保里みどり 高橋 奏子
 土屋奈津江 橋爪 玲子 半田恵里子
 横山理恵子 関岡 亜希 林 陽子
 トーテムポール
 山越由香里 山宮恵里佳 山本さゆり
 湯本久美子

心

青木千亜紀 青木 尚子 川合さとみ
 酒井 美恵 堀口美代子 三宅 順子
 山岸 由香 吉田 麻希 小林ゆりえ

麻

上田千曲高校舞踊班 指導 奥村てつゑ
 遠藤 裕子 名川しおり 飯島えみ子
 下平 円 深井美奈子 山崎 直美
 室賀 清美 福島 加奈

大地

田辺 陽子 近松 万樹 土田 素子
 長岡美恵子 長川原みつ子 長沢由美
 原田なみ江 深沢あゆみ
 少年
 市ノ瀬泰子 小林 夏美 佐藤 広美

ナレーター……長川原みつ子
 伴奏……塚田 昌子 松沢 浩子
 指揮……富尾 知恵
 コーラス・作曲・その他……二年C・D組

第二部
 満員電車

小林みゆき 塚田知恵美 坂本美希子
 中島 茂子 高橋 文枝 中嶋 喜和
 茅野真由美 中島八重子

湖の伝説

上田染谷丘高校舞踊部 指導 斎藤朋子
 小林 彩子 水沢 知加 矢島 由美
 湯田富美恵 市村 真美 藤岡 弘恵
 竹花 雪乃 中沢千鶴子 堀部 裕子
 飯田 貴子 宮沢由美子 曾根原孝美
 土屋 晴美 小山 愛美 内田 孝恵
 原 淳子 乾 惠美 堀口 弓子
 堀内満利子 横山 恵里

カヒ

桜井 美佳 清水ひろ美 清水 靖子
 下條水里子 武居まゆみ
 飛行機
 岩下 裕子 白田 ゆみ 内田 泉

尾蓋 惠美 上條 敦子
若葉

上田女子短期大学舞踊部卒業生有志
渡辺 睦子 山浦 靖子 翠川真由美
百瀬 典子 山崎 文恵 高間真智子
小林 香織 大田垣知子 尾崎 節子

革命

霜鳥亜希子 黒沢きよみ 小林さおり
小出美由紀 五明 晴美 甲田真理子
酒井 文
さそり
小林 夏美

生命 大気汚染

武田 栄子 田邊 馨 土屋亜矢子
手塚めぐみ 徳竹 裕子 中嶋 典子
西沢 美香 西野 仁子 福沢 良美
照明 小林 勇雄

ニューイヤークンサート

(第一回と第二回は省略)

第三回(平成五年一月二十四日)

1・合唱 上田市文化会館ホール
合唱 二年声楽講座
指揮 関口 信雄

ピアノ 星野 由美

「光のとおりみち」より

「小鳥の旅」

2・ピアノ連弾 ピアノ 笠原 理恵

ピアノ 佐藤 愛

「くろみ割り人形メドレー」
(チャイコフスキー・織田 英子(編曲)

3・ピアノ独奏 ピアノ 西澤こずえ

「エチュード」Op.8-12・Op.42-4

(スタクリヤービン)

4・ピアノ独奏 ピアノ 小池 正字

「二つのラプソディ」より

第二番Op.79(ブラームス)

5・ソプラノ独唱 ソプラノ 保坂真由美

オペラ「連隊の旗」より 野口千香代

「さようなら」(下ニゼットイ)

6・ピアノ独奏 ピアノ 星野 由美

「水のたわむれ」(ラヴェル)

7・三重唱 ソプラノ 石北奈穂美

ソプラノ 中島小百合

メゾソプラノ 近藤 礼子

ピアノ 西澤こずえ

オペラ「魔笛」より
三人の侍女の三重唱(モーツァルト)

8・ピアノ独奏 ピアノ 大野 明美

「幻想曲」Op.17ハ長調第一楽章

9・ソプラノ独唱 ソプラノ 塩野崎英子

「舞踏への誘い」(レスピーギ)

ピアノ 野口千香代

オペラ「つばめ」より

「マレッタの夢」(ツッチーニ)

10・合唱 合唱 音楽コース合唱団

「小ミサ曲全曲」

・キリエ ・サンクトゥス

・ベネディクトゥス ・アニエスデイ

★二年声楽講座コーラス

★音楽コース合唱団

「二年生」・「一年生」全頁

「研究生」

加藤 久恵 夏目佳代子 石北奈穂美

中島小百合 西澤こずえ

「卒業生有志」

板垣千恵子 池田 早苗 上野知夏子

尾崎 澄子 海沼 佳代 加藤 生穂

塩野崎英子 関口 広子 千国ゆかり

土屋 和美 中田あゆみ 中村 至子

馬場 淑江 保坂真由美 両沢 惠美

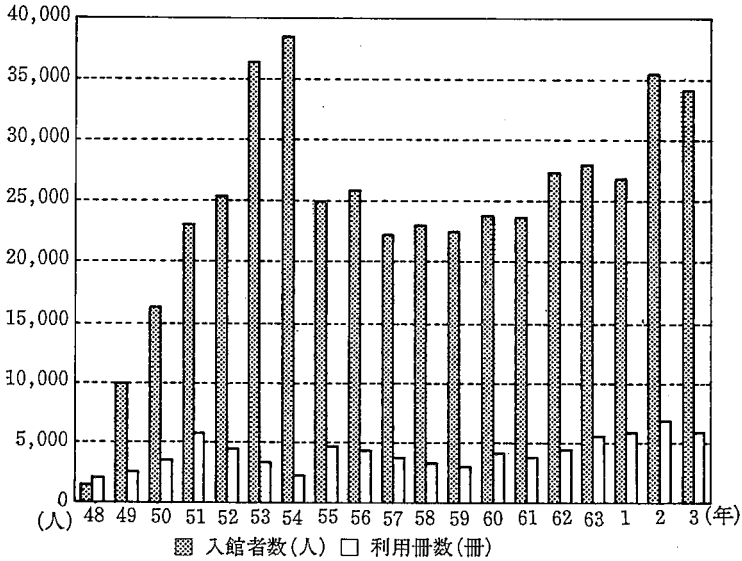
★指導「ピアノ」 兎束淑美 北村 恵子

加納 悟郎 松田奈穂子

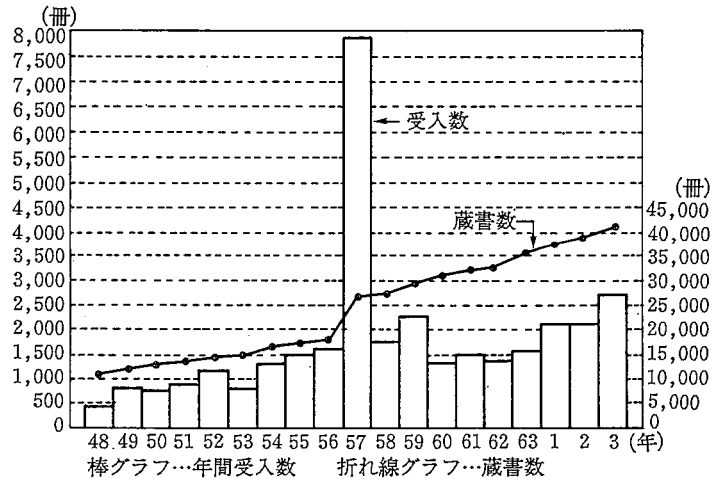
「声楽」 関口 信雄 森 敏孝

図書館受入数・蔵書数および利用状況

利用状況



受入数・蔵書数の変遷



婦人大学・公開講座・開放講座

開催日・テーマ(カッコ内は講師)

第1回(昭和55年6月4日～7月9日)

- 「婦人の運動と健康」(助教 黒岩 光生)
- 「合唱の楽しさ」(講師 関口 信雄)
- 「健康 体操」(講師 犬飼己紀子)
- 「楽しい水彩画の描き方」(教授 林 幸四郎)
- 「音楽史上の女性音楽家の生涯」(講師 兎束 淑美)
- 「水泳」(助教 黒岩 光生)
- (講師 犬飼己紀子)

第2回(昭和56年6月17日～11月12日)

- 「万葉集と女性」(講師 塩入 秀敏)
- 「左利きについて・その他」(教授 菊池志げ子)
- 「婦人と社会参加」(講師 前島 邦子)
- 「女性のライフサイクルと子育て」(助教 須永 淑)
- 「幼児教育・歩みの中の女性」()

第3回(昭和57年6月2日～6月28日)

- 「現代婦人の学習の方向について」(学 長 鈴木 鳴海)
- 「孤立感の中で主婦の求めるもの」()
- 「百人一首の女性」(講師 塩入 秀敏)
- 「遊びの指導」(助教 黒岩 光生)
- 「親子の体力づくり」(講師 北村 恵子)
- 「合奏の楽しみ」()

第4回(昭和58年6月1日～7月7日)

- 「小諸時代の島崎藤村 詩から散文へ」(助教 中山 渡)
- 「ダンスボディトレーニング(身体育成)」(講師 飯田正江)
- 「創作舞踊」()

第5回(昭和59年5月31日～6月30日)

- 「美しさの創造」(講師 高木 秀世)
- 「現代社会の発展と女性の功績」(教授 清水 正男)
- 「新世紀の人間づくりと婦人の役割」()
- 「日本の英語教育について」(教授 北村 達三)
- 「ペン習字」「毛筆習字」(教授 塚田 清栄)
- 「川端康成の文学的生涯と「雪国」」(教授 三田 英彬)
- 「文章の書き方」()
- 「子どもの問題とその指導 幼児期・少年期」(教授 竹内要)

第6回(昭和60年5月30日～6月25日)

- 「徒然草における無常の認識と人間の把握」(学長西尾光一)
- 「中国人の生命尊重について」(教授 小松 忠志)
- 「万葉のすばらしさ」(教授 福沢 武一)
- 「幼児期・少年期の言語形成と言語行動」()
- (上田女子短期大学附属幼稚園園長 青木千代吉)
- 「心理学からみた人間関係論」(助教 上原 貴夫)

第7回(昭和61年6月4日～7月2日)

- 「この回から「婦人大学」を「公開講座」と改名」
- 「愛しながらの闘い―男女の新しい人間の関係」()
- 「万葉のすばらしさ その2」(教授 松田 幸子)
- 「能・世阿弥 そして信州」(教授 福沢 武一)
- 「近松を読む」(助教 天野 文雄)
- 「いじめっ子 いじめられっ子」(教授 大島 富朗)
- 「源氏物語の世界」(学 長 西尾 光一)

第8回(昭和62年6月2日～7月7日)

- 「子どもの心のゆくえ」(助教 天田 邦子)
- 「万葉のすばらしさ その3」(元教授 福沢 武一)

「レクリエーションのある暮らし」

「死にゆく民話」

「清小納言と枕草子」

「現代と第九」

「源氏物語」

「高村光太郎『智恵子抄』をよむ」

「やる気と健康学」

「音楽と創造性」

「たのしい中国語」

第10回(平成元年6月3日～7月22日)

「俳人加舎白雄の人と作品」

「小説に描かれた歴史上の人物の虚像と実像」

「現代生活と情報」

「たのしい中国語」

平成二年度国民カルチャー開放講座

(平成2年6月15日～11月10日)

「子どもと共に生きる」

「生きることと教育」

「クリエイティブ・ダンス」

「硬式テニス」

「西行のうた―地獄絵をみて―より

「シューマン作曲歌曲集『詩人の恋』に聞く愛と歌」

「俳人、白雄(北信濃文学散歩)」

(講師 犬飼「紀子

(助教授 塩入 秀敏

(学長 西尾 光一

(助教授 関口 信雄

(学長 西尾 光一

(教授 中山 渡

(助教授 黒岩 光子

(助教授 北村 恵子

趙 笑燕 信 慈

(教授 矢羽 勝幸

(教授 井出 賢次

(教授 山口 吉宗

(留學生 王麗華、許 京華

(留學生 習推進校委嘱

(教授 竹内 要

(助教授 天田 邦子

(助教授 飯田 正江

(助教授 犬飼「紀子

(講師 中西 満義

(教授 関口 信雄

(教授 矢羽 勝幸

「コミュニケーションの自由」

「たのしい中国語」

平成三年度国民カルチャー開放講座

(平成3年6月15日～11月16日)

「文学と人生と―小説に描かれた人間の生き方」

「口承文芸と民族のこころ」

「死を生きる―辞世の日本文学」

「世界経済のあれこれ」

「ストレス社会に生きる」

「余暇先進国スウェーデンに見るリゾートライフ・老後の生き方」

「中国女性について」

「陶印づくり」

「ドラマ教育」

「余暇をみつめる」

「信州洋学者群像―転換期に生きる」

「生きることと哲学」

「たのしい中国語」

第13回(平成4年6月6日～7月22日)

「インツプ寓話」

「教科書」と「子供の風俗」

「高齢化社会を迎えて―社会福祉の本質」

「老年の心理学」

「滝廉太郎の生涯と作品について」

「たのしい中国語」

(教授 清水 正男

(留學生 孫連徳、李 寅

(教授 井出 賢次

(助教授 塩入 秀敏

(教授 坂野 信彦

(講師 前田 基成

(講師 柳沢 重也

(留學生 羊 亜平

(助教授 周東 清芳

(教授 北村 恵子

(助教授 犬飼「紀子

(講師 大橋 敦夫

(教授 松田 幸子

(留學生 張琪、丁衛東

(講師 大橋 敦夫

(助教授 山本 秀麿

(助教授 樽田修

(講師 前田 基成

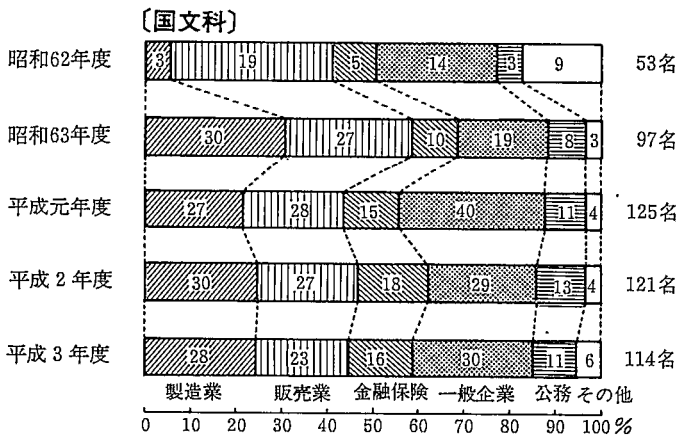
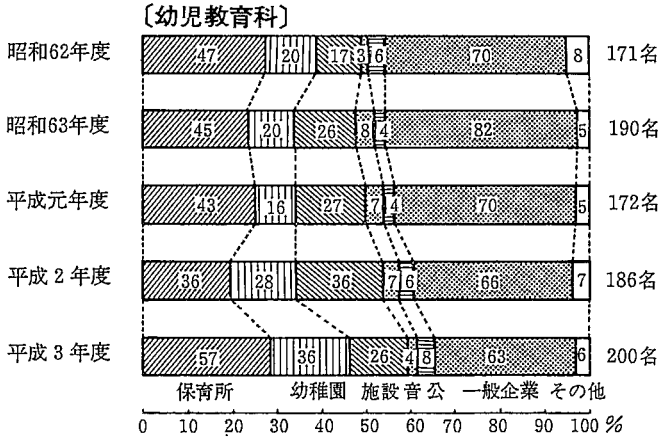
(助教授 兎東 淑美

(留學生 杜 佳、婁 宝蘭

資料

就職状況

最近5年間の進路状況



バレーボール部の主な戦績

1 北信越大学バレーボール選手権大会

年度	春季選手権	開催地	秋季新人戦	開催地	主 将
53	優 勝 (初出場)	金沢市	優 勝	新潟市	桜井 美幸
54	優 勝	長野市	優 勝	福井市	竹内 聖子
55	準優勝	富山市	準優勝	金沢市	百瀬 真理
56	準優勝	新潟市	優 勝	松本市	花里百合子
57	優 勝	福井市	優 勝	富山市	浅田千恵子
58	優 勝	金沢市	優 勝	新潟市	木村 弘子
59	優 勝	長野市	優 勝	福井市	清水 充子
60	準優勝	富山市	優 勝	金沢市	平澤寿美子
61	優 勝	新潟市	優 勝	長野市	百瀬三都子
	春季新人戦		秋季選手権		
62	優 勝	福井市	優 勝	富山市	山浦 清美
63	準優勝	金沢市	優 勝	新潟市	神谷 仁美
平成	優 勝	長野市			

2 全国大会

58	全日本バレーボール大学女子選手権大会	ベスト16(東京)	参加63校
59	全国私立短大体育大会	ベスト8(北海道)	52校
60	全国私立短大体育大会	3位(東京)	71校
61	全国私立短大体育大会	3位(郡山)	59校
62	全国私立短大体育大会	3位(東京)	77校
62	全日本バレーボール大学女子選手権大会	ベスト16(東京)	76校
63	全国私立短大体育大会	ベスト8(大阪)	87校

上田女子短期大学 校歌

吉川静夫 作詞
吉田 正 作曲

J-116

1. あし たり が お い おも
2. しん は ひ と い つ きう
3. や ま ば と か と っ こ う きう

い でになるひ も せ か い の-どこ- かに- い- き -て-い- て きぼうをほし
も またここに も めぐ み と-ひか- りに- は- な -ひ-ら-く まことあいつ
し に-うたお う し せ ん の-ふる- さと- と- お -と-さ-に はるかにつづ

に を く きぼうをほし- に つないでまなんだともをよほ う し -お だ
まことあいつ- を く きさげてかざさう わかいのちに ち -く ま
はるかにつづ- く やまなみあおいで あさのコーラス こ -じう の

だいらの みどりのな かに そびえた つ う えだ じゃ したん だい わた
きよ-い ながしのな かに うつるそ ら う えだ じゃ したん だい わた
あと-の れきしのな かに そだちゆ く う えだ じゃ したん だい わた

to ♩ 1. 2. D.S.
し の ぼ- う 3. 3. 3.
し の ぼ-
し の ぼ-

to ♩ 1. 2. D.S.
し の ぼ- う 3. 3. 3.
し の ぼ-
し の ぼ-

♩ Coda
poco ril. - - -

♩ Coda
poco ril. - - -

*女子の場合は、1音下げてB[♭]で歌うほうがよい。

装幀——杉浦康平＋谷村彰彦

上田女子短期大学の二十年

平成五年三月三十一日発行

編集——『上田女子短期大学の二十年』編纂委員会

長野県上田市下之郷六二〇

発行——北野学園上田女子短期大学

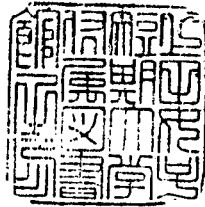
長野県上田市下之郷六二〇

制作——株式会社知性社

東京都港区元赤坂一—四—二 元赤坂知性ビル

印刷——大日本印刷株式会社

東京都新宿区市谷加賀町一—一—一



048412